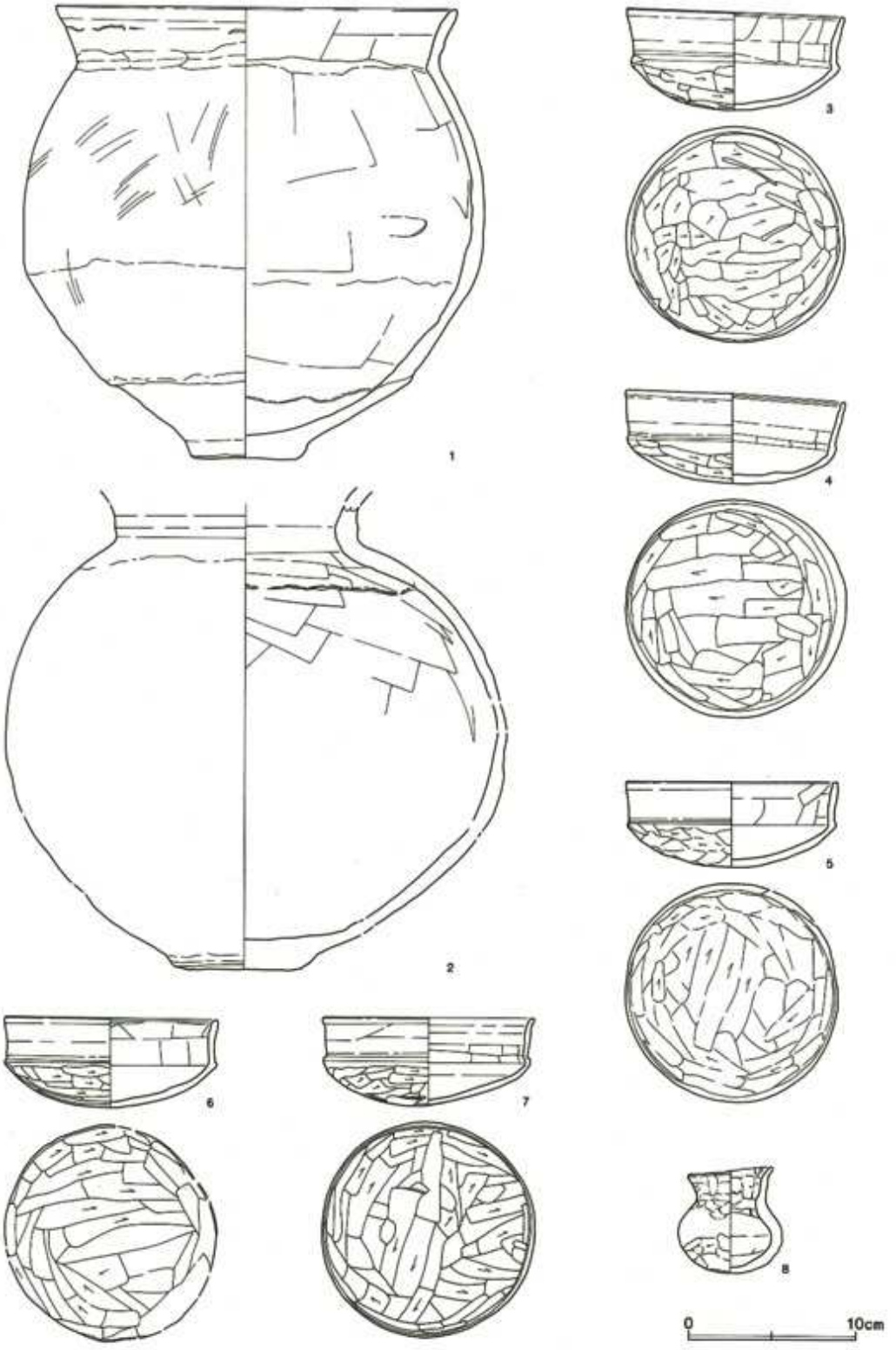
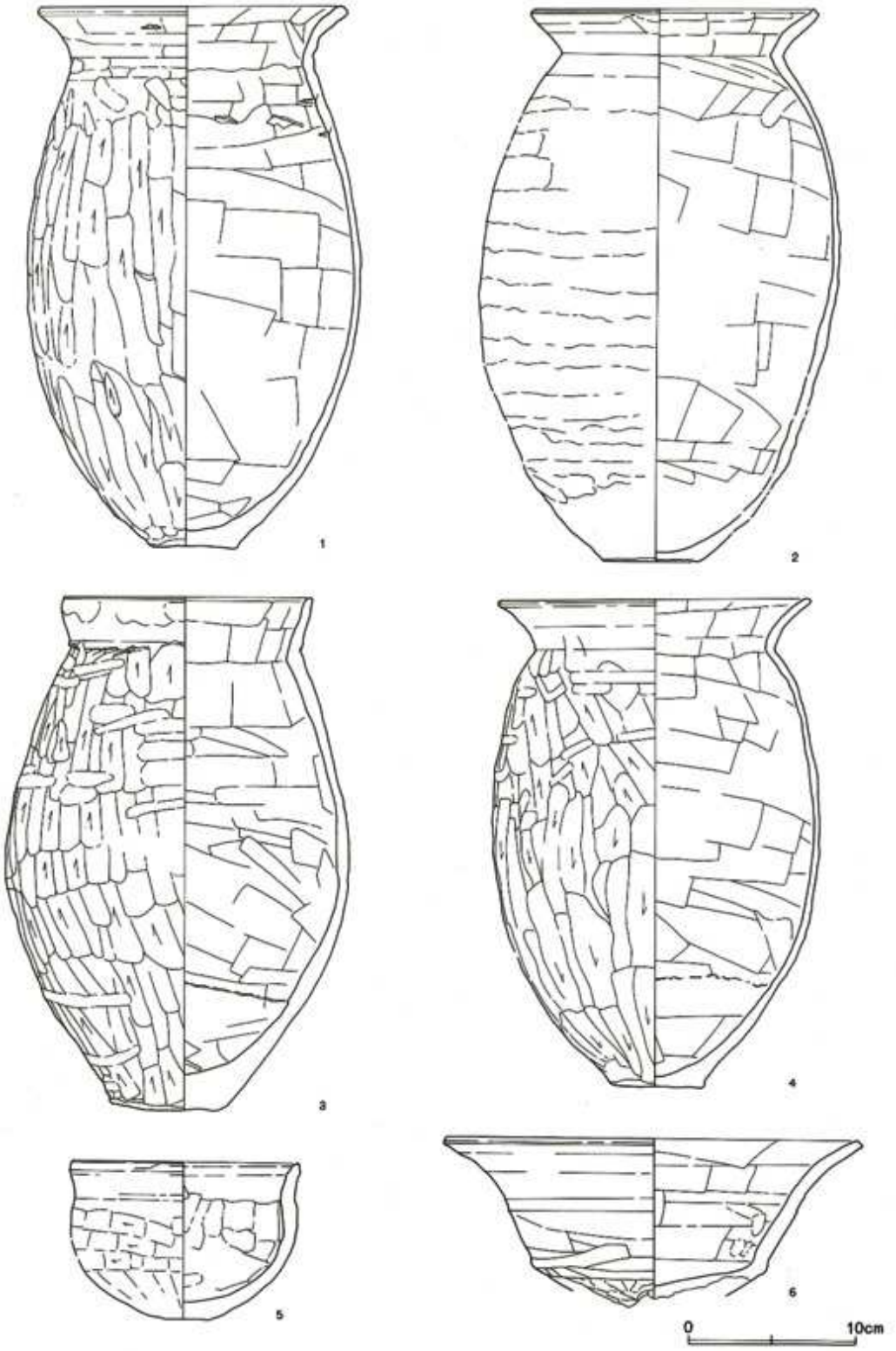
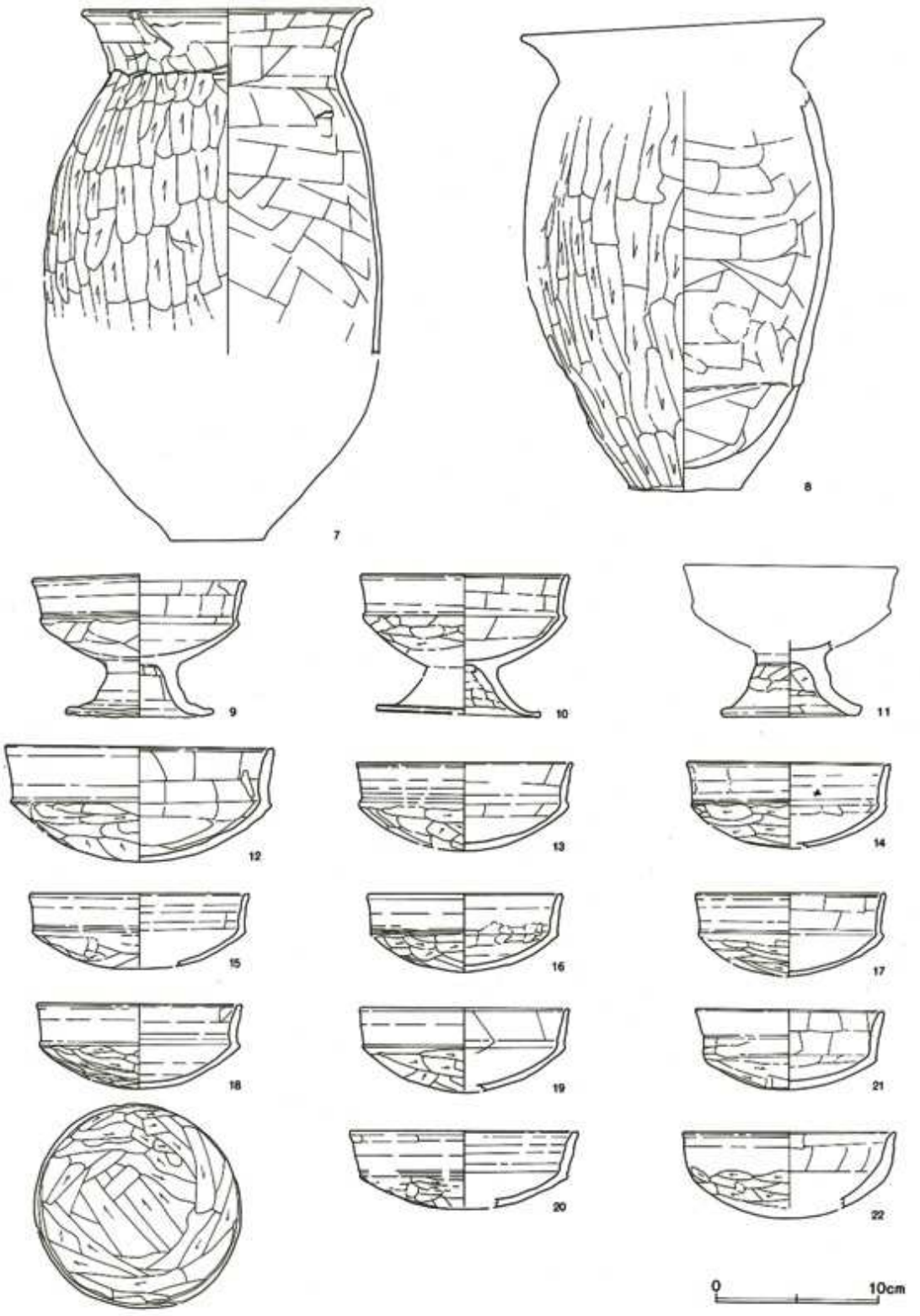


第208図　第42号住居跡出土遺物



第209図　第43号住居跡出土遺物(1)



第210図　第43号住居跡出土遺物(2)

第42号住居跡出土遺物（第208図）

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	壺	23.9 × 27.0 × 6.5	95%	W＋W′少＋粗R＋B′多	橙	
2	〃	― ×(27.8)× 7.6	80%	細(W多＋B′)	にぶい黄橙	磨耗著しく外面一ヘラ削り→ナデ?
3	坏	13.0 × 5.8 × ―	ほぼ完形	細(W＋W′＋R＋B′)	橙	
4	〃	13.1 × 5.3 × ―	完形	細(W＋W′＋B′)＋粗R少	にぶい黄橙	磨耗著しい
5	〃	12.7 × 5.0 × ―	ほぼ完形	W＋W′＋粗R多＋B′少	橙	〃
6	〃	13.0 × 5.2 × ―	〃	細(W多＋W′＋B′)＋R少	明赤褐	
7	〃	12.7 × 5.3 × ―	完形	粗(W′＋B′)＋R	橙	火熱を受け煤ける
8	ミニチュア壺	5.1 × 6.2 × ―	〃	W少＋W′少＋粗R多＋B′	〃	

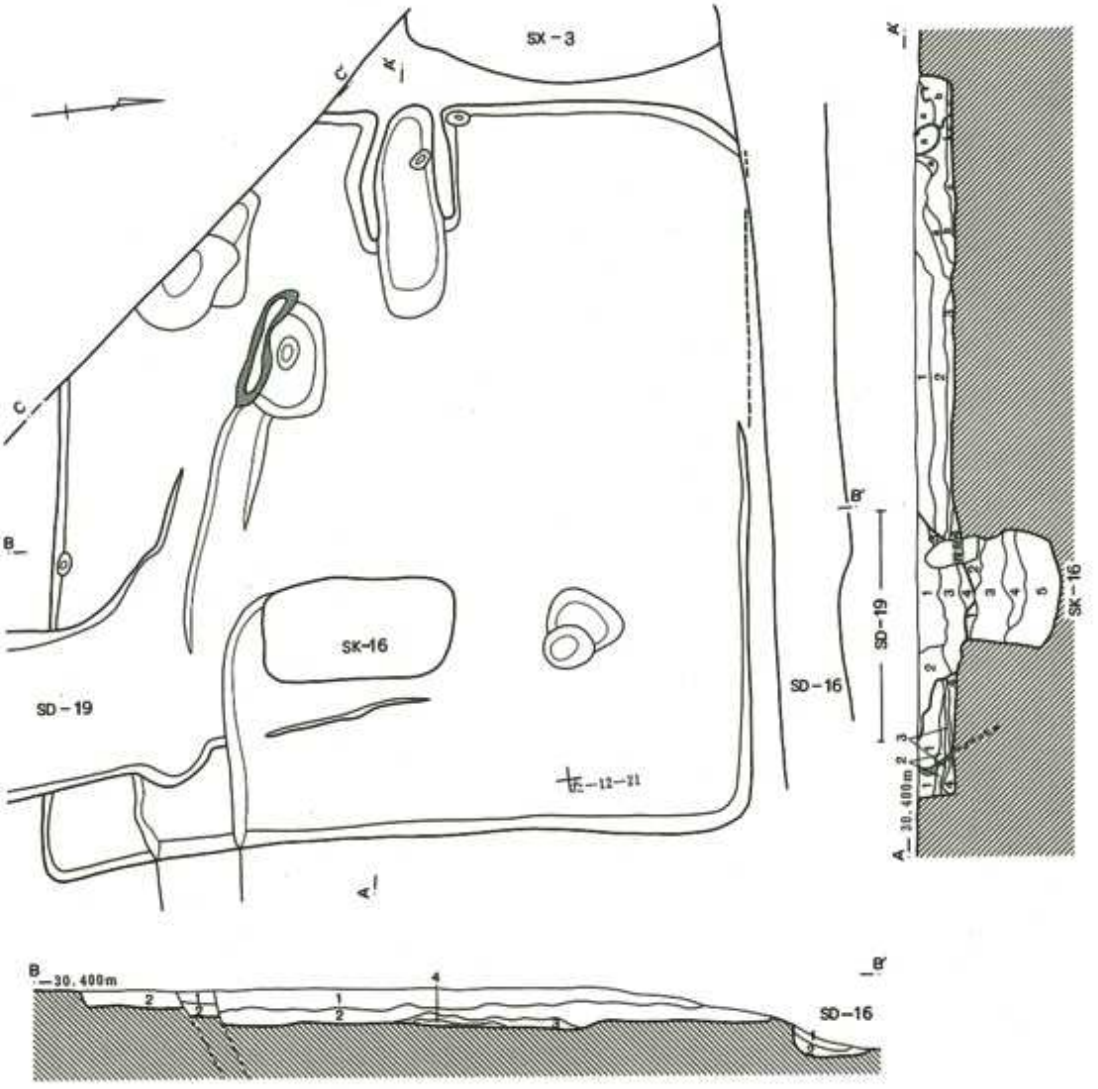
第43号住居跡出土遺物（第209・210図）

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	甕	18.2 × 32.1 × 6.0	ほぼ完形	粗(W＋B)＋W′＋B′	明赤褐	
2	〃	17.6 × 32.7 × 6.2	95%	W＋(W′＋B′)多＋B	にぶい黄橙	
3	〃	15.0 × 30.2 × 7.2	90%	W＋W′多＋粗R＋B＋B′	明赤褐	
4	〃	(16.2)× 29.4 × 6.0	50%	粗W′多＋R＋B＋B′	橙	
5	鉢	13.8 × 9.3 × 2.4	90%	粗(W＋B)多＋W′＋R＋B′	〃	剥落著しい
6	高坏	25.2 ×(10.1)× ―	坏部ほぼ完形	細(W＋W′＋B′)＋R	〃	
7	甕	16.0 ×(21.1)× ―	上半部	粗W′多＋B＋片岩	〃	口縁～頸部歪む
8	〃	― ×(24.4)× 6.8	下半部	粗(W＋W′)多＋B	〃	
9	高坏	13.2 × 8.6 ×裾9.3	90%	W＋W′＋R	〃	
10	〃	13.0 × 8.8 ×裾9.8	脚部50%欠	W＋W′＋粗R＋B′	〃	
11	〃	― ×(4.6)×裾9.0	脚部70%	W＋W′＋粗R少＋B′多	〃	
12	坏	16.4 × 7.0 × ―	70%	W＋W′＋R多＋B′微	明赤褐	
13	〃	13.4 × 5.5 × ―	50%	細(W＋W′＋R＋B′)	橙	
14	〃	12.5 ×(5.3)× ―	60%	W＋W′＋R＋B′	〃	
15	〃	(13.6)×(4.5)× ―	30%	W＋W′少＋R＋B	〃	
16	〃	(12.2)× 4.7 × ―	60%	W＋W′＋粗R＋B′	〃	
17	〃	11.8 × 5.1 × ―	50%	W＋W′＋粗R＋B′微	〃	磨耗著しい
18	〃	12.6 × 5.3 × ―	90%	W＋W′＋B′	〃	
19	〃	(13.0)×(5.1)× ―	30%	W＋W′＋B	明赤褐	
20	〃	(14.2)×(4.6)× ―	30%	W＋W′＋B＋B′	橙	
21	〃	11.8 × 4.8 × ―	70%	W多＋W′＋粗R少＋B′少	〃	
22	甕	(13.2)×(4.8)× ―	30%	W＋W′＋粗R多＋B′	〃	

第44号住居跡（第211図）

埋没河川の南岸肩部、た―12―16グリッドを中心に位置する。北壁を近・現代の用水路に削られるほか、南東部の壁や床は中世の溝と土坑に切られている。南西隅部が調査区外となるが、全体は約5.6m×5.4mの長方形をなし、面積は約30.2㎡を測る。主軸はかなり西へ傾き、方向はおよそN―84°―Wを指す。

覆土２のうち、床に接する部分にはブロック状のＦＡが見られる。壁の立ち上がりは垂直に近く、



第19号溝土層説明
1．10YR5/1　褐灰色土　Cブロック微。
2．10YR5/3　にぶい黄褐色土　B粒微。
3．10YR6/2　灰黄褐色土　Cブロック多。B粒微。
4．10YR6/1　褐灰色土　Fe粒多。

第16号土坑土層説明
1．10YR6/1　褐灰色土　砂のブロック少。
2．10YR6/1　褐灰色土　砂粒。Lブロック多。
3．10YR6/2　灰黄褐色土　砂粒多。
4．10YR6/1　褐灰色土　砂粒少。
5．N6／　灰色土　砂ブロック多。

表土層説明
Ⅰ．現耕作土。
Ⅱ．現耕作土層の床土。
Ⅲ．地山L。

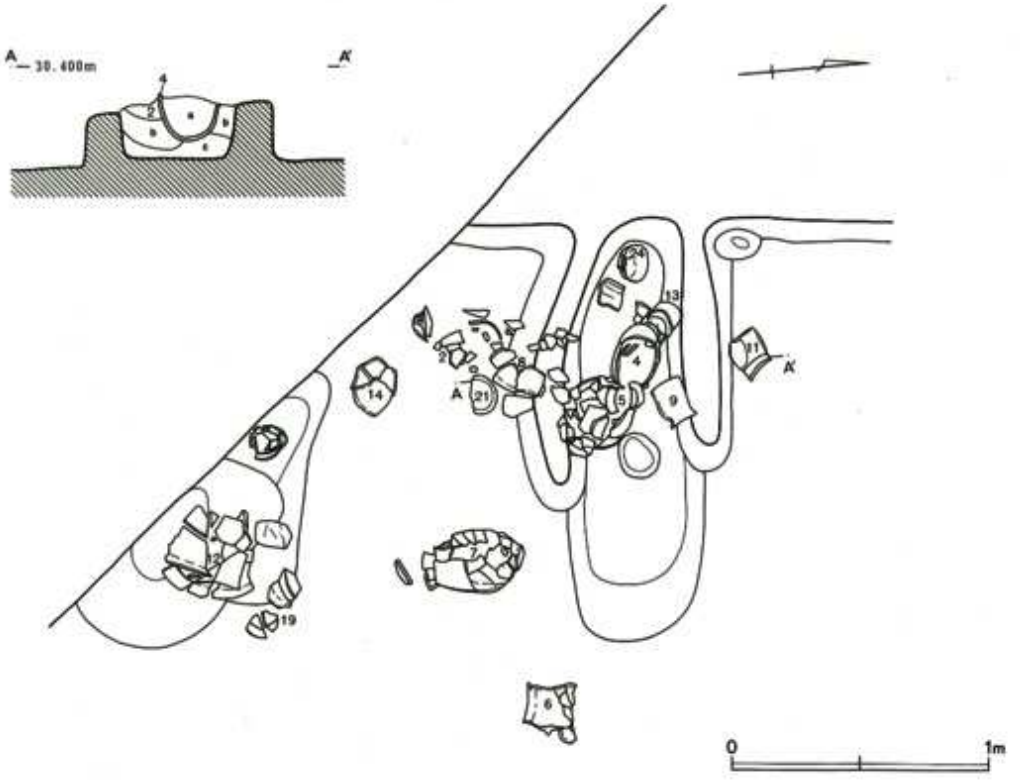
第16号溝土層説明
1．10YR4/2　灰黄褐色土　浅間A軽石粒多。
2．10YR4/2　灰黄褐色土　L粒微。

第44号住居跡土層説明
1．10YR3/4　暗褐色土　主にLブロックからなる。微量のB粒。
2．10YR3/3　暗褐色土　主にGブロックからなる。L粒多。B・C粒微。
3．10YR5/2　灰黄褐色土　Cブロック少。
4．10YR5/3　にぶい黄褐色土　Fe粒多。しまり良い。
5．10YR5/1　褐灰色土　Fe粒多。C粒微。
6．10YR5/2　灰黄褐色土　G，粘性強い。
7．10YR6/1　褐灰色土　G，ほとんど粘土。

第44号住居跡カマド土層説明
a．10YR5/2　灰黄褐色土　Bブロック・C片微。天井部崩落土層。
b．10YR6/4　にぶい黄橙色土　B粒微。
c．10YR4/1　褐灰色土　Bブロック多。炭層。

0　2m

第211図　第44号住居跡



第212図　第44号住居跡遺物出土状態

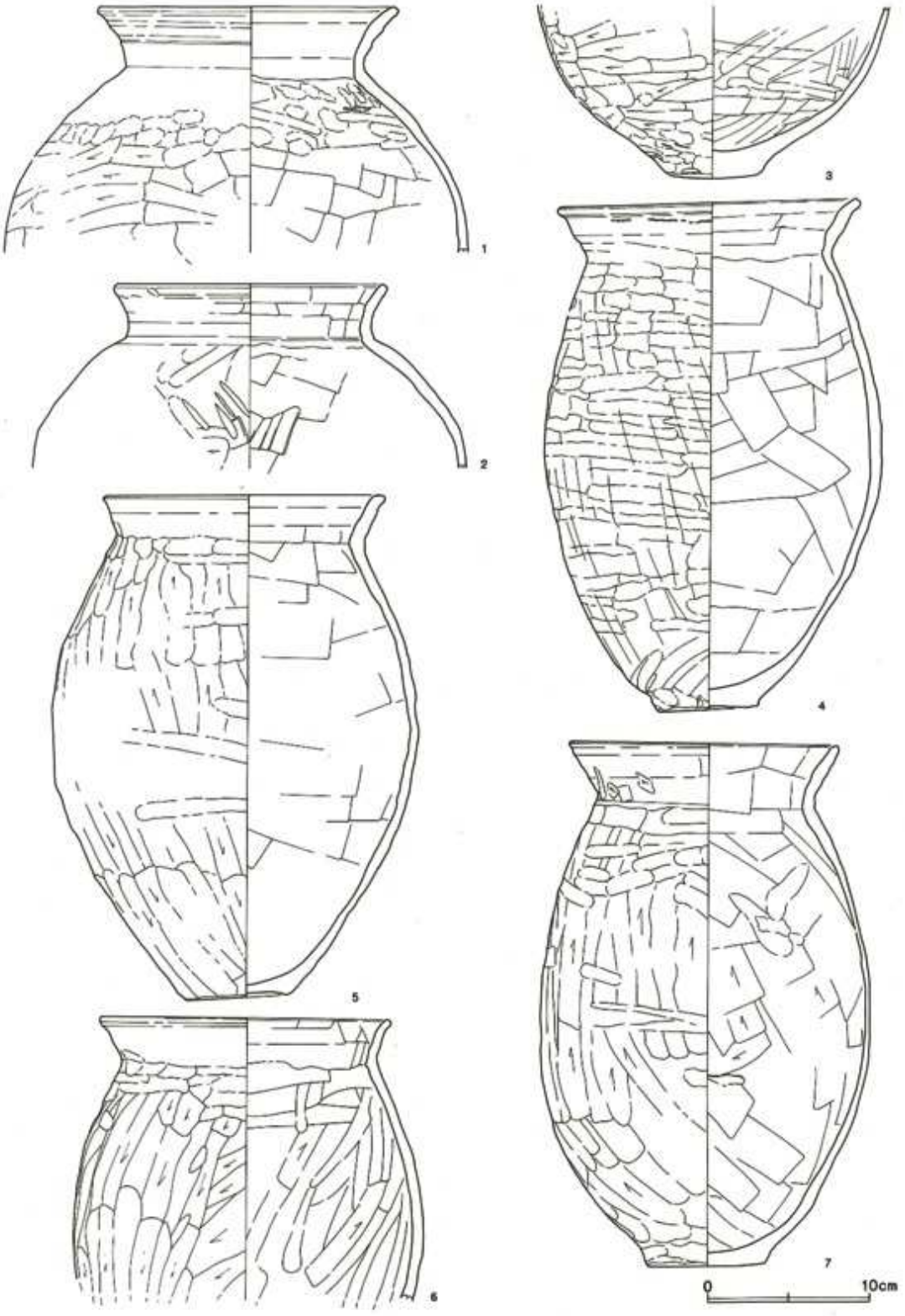
床からの高さは約28cmである。床面は概ね平坦であるが、地震の亀裂により、南半部では階段状に沈下している。

カマドは西壁の中央に設けられている。やはり袖は削り出されており、壁からの長さは約110cmである。焚き口部での幅は50cmほどで、床面は足場状に一段低くなっている。火床面は平坦で、壁へ向かってわずかに上り傾斜となっている。この奥部右袖側には支脚として高坏(13)が逆位に据え置かれ、上には甕(4)が乗せられている。他にもカマド周辺からの遺物出土は多く、大半は床から浮いた状態で見いだされている。

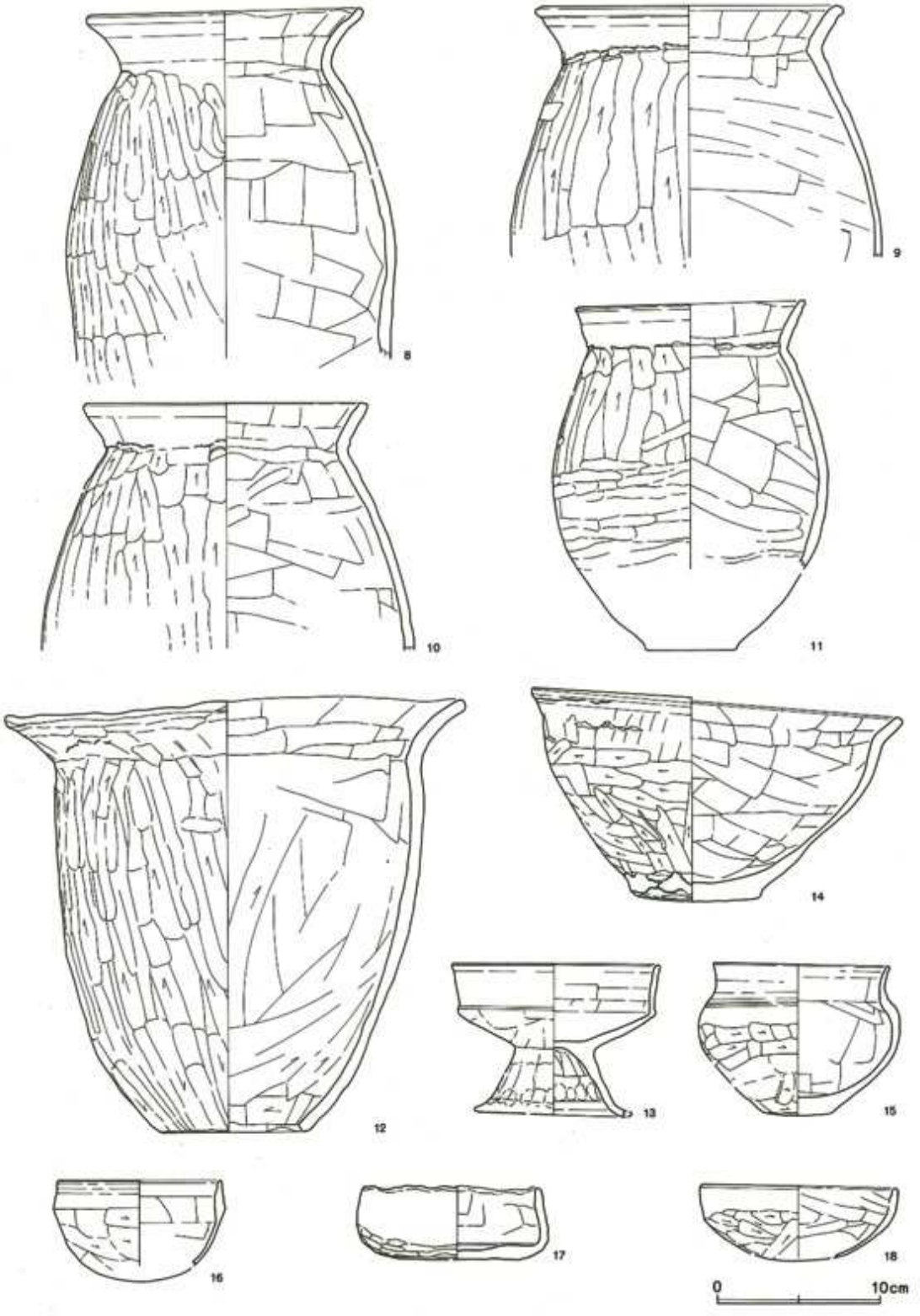
貯蔵穴は南西隅部に検出された。半分ほどは調査区外となるため、形状や規模は不明である。肩部から覆土最上層にかけ、甑(12)や坏(19)が出土している。

第44号住居跡出土遺物(第213・214・215図)

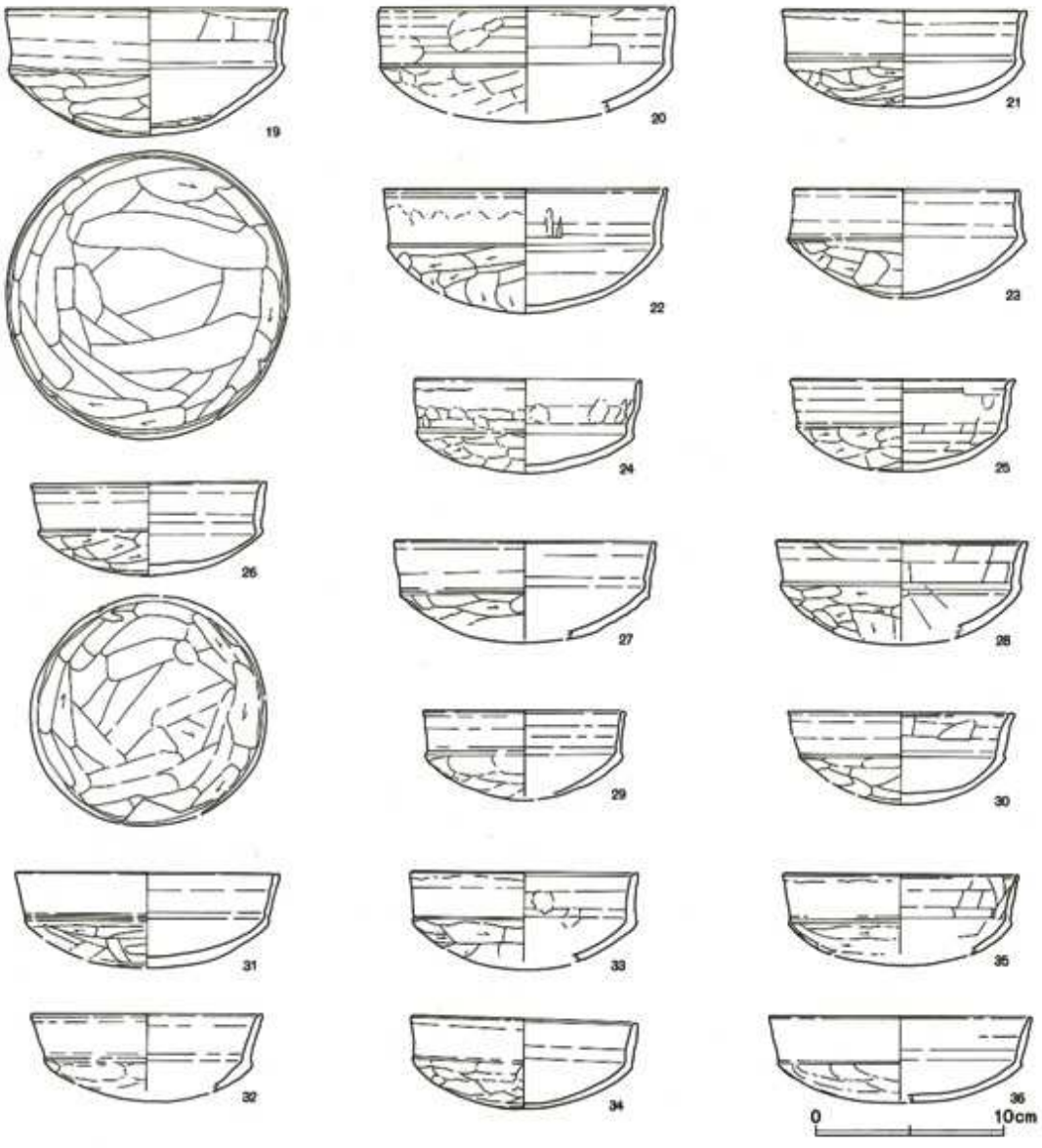
No.	器種	法量	残存率	胎土	色調	備考
1	壺	18.6 ×(15.9)× —	口縁～胴半部	W+W′+粗R多+粗砂B多+B′	橙	
2	〃	(17.0)×(11.5)× —	口縁～胴部片	粗砂(W′+B+B′)+R	黒褐	
3	〃	— ×(10.6)× 5.9	胴下半部～底部	W+W′少+粗R多+B′	橙	
4	甕	18.9 × 31.5 × 6.0	70%	粗(W+W′)多+粗(R+B′)	明赤褐	
5	〃	18.6 × 31.3 × 6.6	80%	粗(W+W′多+B+B′)	〃	
6	〃	18.1 ×(18.1)× —	口縁～胴中部	粗砂(W+W′+B)+R+B′	灰褐	
7	〃	17.0 × 32.1 × 7.5	95%	W多+W′少+R+B′多	橙	
8	〃	(17.4)×(22.4)× —	口縁～胴下半部	粗(W+W′)+R+B′	にぶい黄橙	
9	〃	(19.0)×(15.4)× —	口縁～胴中部片	粗砂(W+W′)多+R多	橙	破砕後二次焼成
10	〃	17.4 ×(15.4)× —	口縁～胴半部	粗砂(W+W′+B)+R+B′	〃	
11	小型甕	15.8 ×(16.4)× —	口縁～胴下半部片	粗砂(W+W′+B)+R少+B′	〃	磨耗著しい
12	甑	27.6～29.0× 26.6 ×孔9.0	95%	粗砂(W+W′+B+B′)+R	〃	口縁歪む
13	高坏	12.8 ×(9.8)× —	80%	W+W′多+B′少	〃	
14	鉢	23.4 × 12.4 × 8.0	ほぼ完形	W+粗砂(W′+B)+R+B′	にぶい橙	
15	小型甕	10.7 × 9.2 × 3.9	80%	W+W′多+R+B′	橙	
16	壺	(10.2)×(5.4)× —	40%	W+W′+粗R多	〃	
17	坏	(12.0)× 4.4 × 9.6	40%	W+W′+R+B′	〃	
18	〃	12.1 ×(4.9)× —	70%	W′+粗R多+B′	〃	
19	〃	15.1 × 6.7 × —	95%	W+W′+B′	〃	
20	〃	(15.8)×(5.7)× —	30%	W′+粗R多+B′	〃	
21	〃	13.1 × 5.1 × —	70%	W+W′多+粗R多+B′微	〃	
22	〃	(16.0)×(6.1)× —	60%	W+R+B′	〃	
23	〃	12.4 × 5.7 × —	70%	W+W′少+R多+B′多	〃	磨耗著しい
24	〃	12.4 × 5.0 × —	ほぼ完形	W′+R	〃	〃
25	〃	(12.0)×(4.9)× —	25%	W+W′少+B′	〃	
26	〃	12.5 × 4.9 × —	90%	W+W′+粗R多+B′	〃	
27	〃	(14.0)×(5.2)× —	30%	W+W′+R+B′少	明赤褐	
28	〃	(13.4)×(5.1)× —	20%	W+W′+R+B′微	橙	
29	〃	10.8 ×(4.7)× —	25%	W少+W′多+B′	〃	磨耗著しい
30	〃	11.8 × 5.0 × —	60%	W+W′+R多	〃	〃
31	〃	(14.0)×(5.1)× —	30%	W+W′+B′	〃	
32	〃	12.4 ×(4.2)× —	50%	W′+粗R+B′	〃	磨耗著しい
33	〃	12.1 ×(4.6)× —	50%	W多+W′+R+B′少	〃	
34	〃	12.0 × 4.8 × —	95%	W+粗R+B′	〃	磨耗著しい
35	〃	(12.6)×(4.3)× —	20%	W微+R+B′	〃	〃
36	〃	(14.0)×(4.7)× —	30%	W+W′+B′微	〃	



第213図　第44号住居跡出土遺物(1)



第214図　第44号住居跡出土遺物(2)



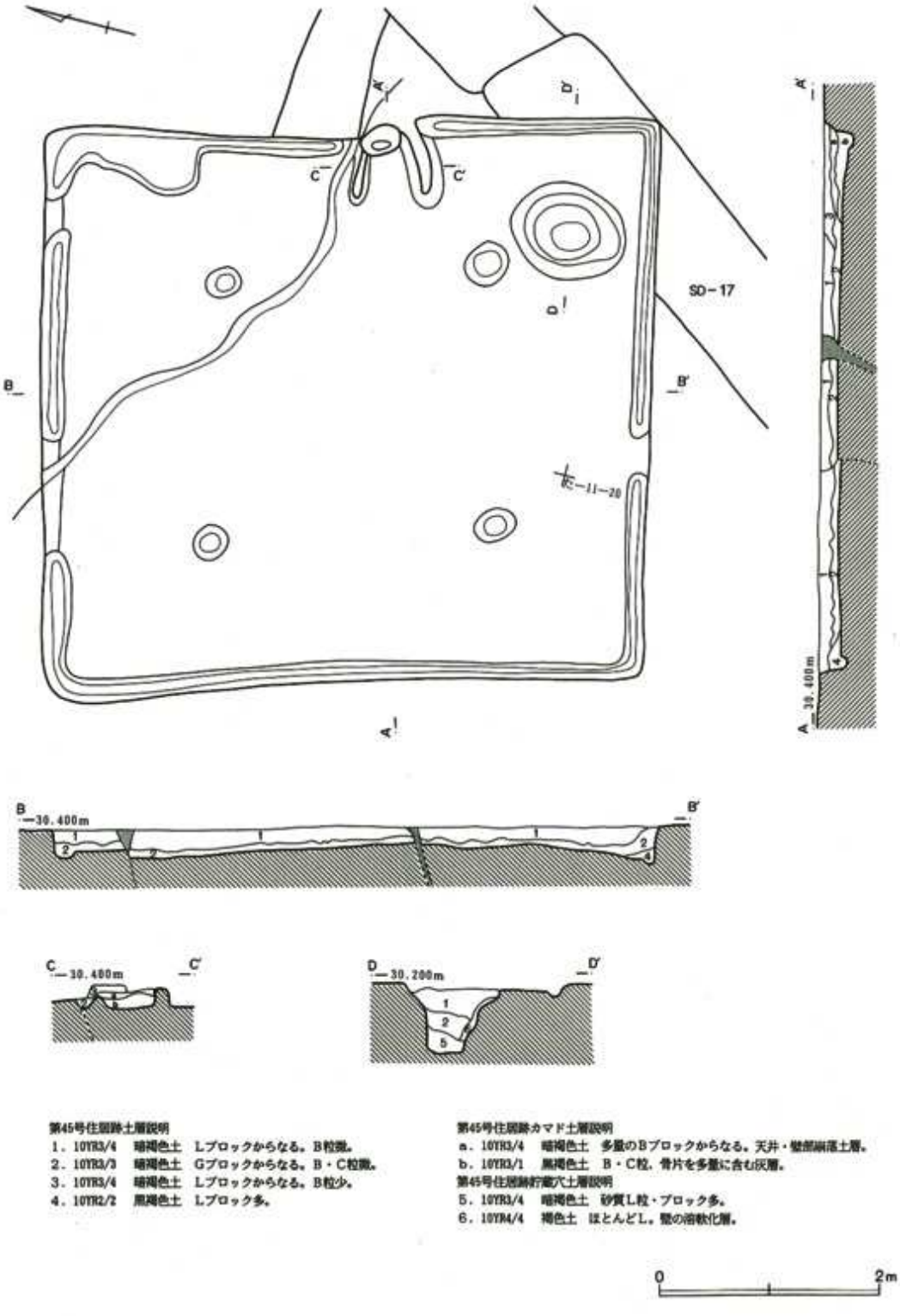
第215図　第44号住居跡出土遺物(3)

第45号住居跡(第216図)

た―11―19グリッドを中心に位置する。南東部に第17号溝が乗るほか、地割れによって切断されている。全体は隅部の鋭い長方形で、軸長4.9×5.55m、面積約27.2㎡を測る。主軸方向はほぼN―75°―Eを示す。

覆土は主に地山の粘質土で構成されている。壁の立ち上がりは急であるが、地震による崩落で乱れた部分も認められる。壁溝は大部分で認められ、幅約16cm、深さ約5cmで一定している。床面は硬質で、本来は中央部が高かったものと思われる。しかし地割れによる段差のため、確認面からの深さは15cm～25cmと開きがある。

カマドは東壁の中央からやや南に寄っている。燃焼部は「ハ」字状の袖により、半楕円形に成形さ



第45号住居跡土層説明
1．10YR3/4　暗褐色土　Lブロックからなる。B粒微。
2．10YR3/3　暗褐色土　Gブロックからなる。B・C粒微。
3．10YR3/4　暗褐色土　Lブロックからなる。B粒少。
4．10YR2/2　黒褐色土　Lブロック多。

第45号住居跡カマド土層説明
a．10YR3/4　暗褐色土　多量のBブロックからなる。天井・壁部崩落土層。
b．10YR3/1　黒褐色土　B・C粒、骨片を多量に含む灰層。

第45号住居跡貯蔵穴土層説明
5．10YR3/4　暗褐色土　砂質L粒・ブロック多。
6．10YR4/4　褐色土　ほとんどL。壁の溶軟化層。

0　2m

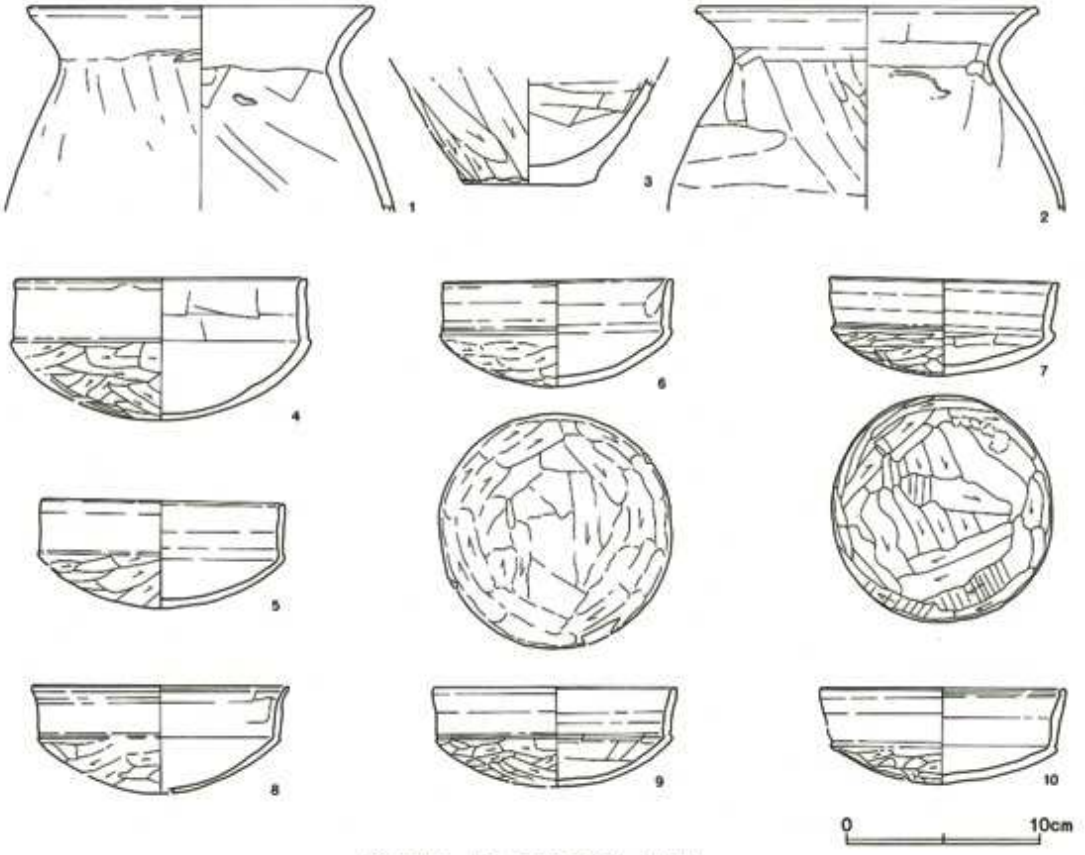
第216図　第45号住居跡

れている。焚き口部の幅は54cmほどで、火床面は床面との高低差がない。ただし、壁部はピット状に窪んでいる。カマド内には厚く灰が堆積し、多量の骨粒を含んでいる。

柱穴は住居跡の対角線上に4本検出された。いずれも深さ5cm以下で、浅い皿状の「へこみ」程度である。底面も特に硬くなったような傾向はない。

貯蔵穴は南東隅部、わずかに西へ寄る。平面は径106cm×90cmほどの楕円形で、深さも64cmと大型である。横断面は漏斗状を呈し、底面は平坦となっている。

遺物は破片状態で、しかも二次火熱を受けたものが多い。3～5・7・9・10はカマド内出土である。



第217図　第45号住居跡出土遺物

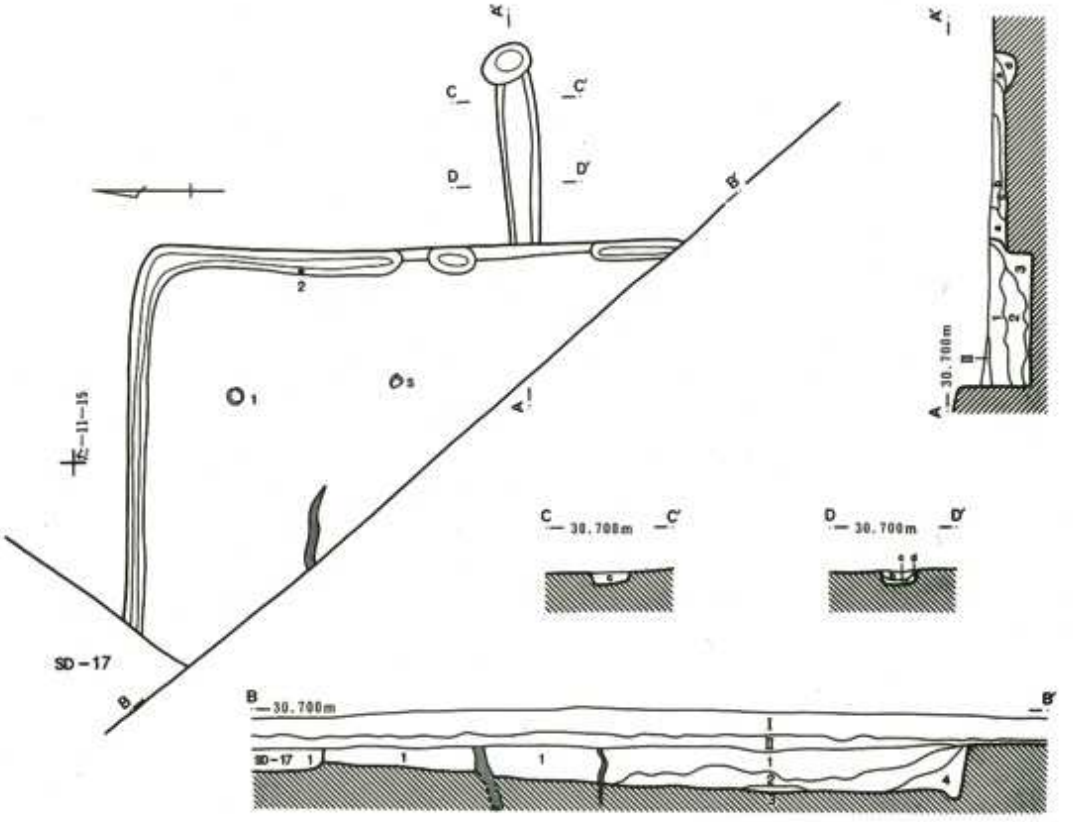
第46号住居跡(第218図)

た—11—9グリッドを中心に位置する。北壁を第17号溝に切られるほか、半分以上は調査区外へ出ている。このため全体の形状や規模は不明である。本跡は建て直しが行なわれており、東壁には古い段階のカマド煙道が残る。この時の主軸方向は、およそN—89°—Eを指す。

覆土は上位の地山を中心とするが、砂質でザラザラする。壁の立ち上がりは急で、床からの高さは約32cmを有する。軟質な床面は起伏が多いほか、北から南へ強く傾斜している。壁溝は古カマド部分で切れるほかは、幅15cm、深さ10cm程度で一定して巡る。東壁部の壁溝中からは、手捏ねの土器(2)が出土している。

第45号住居跡出土遺物（第217図）

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	甕	(18.0)×(10.9)× —	口縁	粗(W+W′+B+B′)	にぶい黄橙	
2	〃	(17.8)×(10.5)× —	口縁	W′+R+B′	〃	
3	〃	— ×(5.7)× 6.6	底部	粗W′多+R+B′	にぶい橙	
4	坏	(15.6)×(7.1)× —	60%	W+W′+R+B′	橙	二次火熱受ける。破片状態
5	〃	(12.6)×(5.7)× —	50%	W+W′+R+B′	〃	〃
6	〃	12.1 × 5.6 × —	95%	(W+R+B′)少+W′多	にぶい橙	二次火熱受ける
7	〃	12.0 × 5.1 × —	90%	W+W′+粗R多+B′	橙	
8	〃	13.2 × 5.6 × —	70%	W+W′+R+B′	にぶい橙	二次火熱受ける
9	〃	12.8 × 5.2 × —	70%	W′+粗R多+B′少	明赤褐	二次火熱受け煤ける
10	〃	13.2 × 4.9 × —	70%	W+W′+R+B′	橙	二次火熱で亀裂、剥落生じてる



表土層説明
Ⅰ．現耕作土。浅間A軽石粒多。
Ⅱ．現耕作土層の床土。浅間A軽石粒多。
第46号住居跡土層説明
1．10YR3/4　暗褐色土　砂質L粒多。B・C粒含む。
2．10YR4/4　褐色土　主に砂質Lブロックからなる。
3．10YR3/4　暗褐色土　基本は2。古カマド煙道からの流入土。
4．10YR3/4　暗褐色土　L粒・ブロック少。C粒微。

第46号住居跡カマド土層説明
a．10YR4/4　褐色土　Lブロックからなる。煙道天井部崩落土層。
b．10YR4/4　褐色土　基本はa。多量のBブロックを含む。
c．10YR4/3　にぶい黄褐色土　Bブロック、C粒多。
d．10YR4/3　にぶい黄褐色土　ほとんどL。
第17号溝土層説明
1．10YR3/3　暗褐色土　L・B粒多。しまり強い。

0　2m

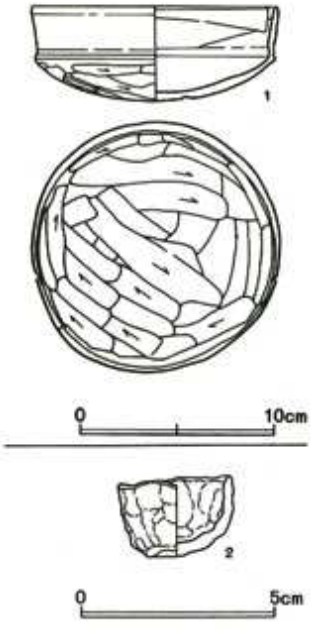
第218図　第46号住居跡

第46号住居跡出土遺物(第219図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	坏	12.8 × 4.9×—	80%	W多+W′+粗R+B′	橙	磨耗著しい
2	手捏ね	2.8 × 1.9×—	完形	W多+W′+B	〃	

本跡が廃絶する直前のカマドは不明である。建て直し前のカマドは東壁に存在したものと思われ、幅約30cm、長さ約127cmの煙道が残存している。煙道と新住居跡の覆土は完全に分かれるため、新住居跡の機能時には、この煙道が埋没状態にあったことは明らかである。煙道と住居跡の方向は別個のものが偶然に一致した可能性もないではないが、第47号住居跡もこれと同じ状態であるため、カマドの付け替えを伴う建て直しと判断した。

壁溝中以外の遺物としては、床面上より検出された坏(1)がある。



第219図　第46号住居跡出土遺物

第47号住居跡(第220図)

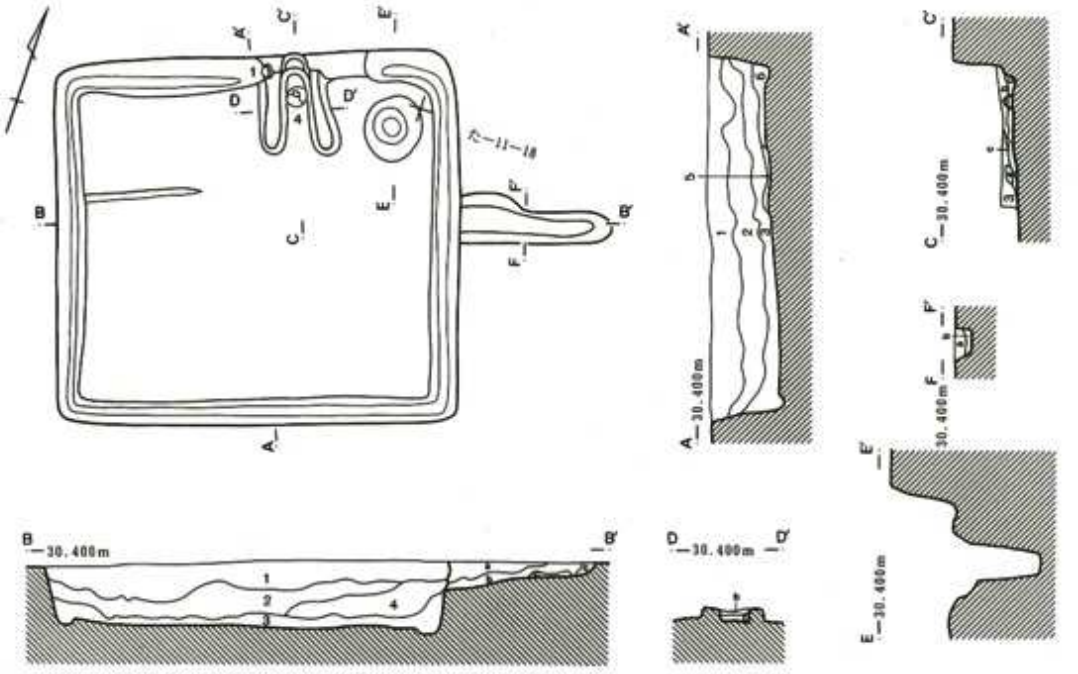
埋没河川の肩部から約6m南、た—11—13グリッドを中心に位置する。本跡も第46号住居跡と同様、建て直しが行なわれている。現状の住居跡は2.84m×3.12mほどの小型長方形を呈し、面積は約8.9m²を測る。主軸の方向はおよそN—18°—Wを指す。

壁は部分的に地震による崩落が見られるものの、おおよそ立ち上がりは急である。遺構確認面から床までは約48cmの深さを有している。壁溝はカマド部分を除き、幅20cm、深さ8cmほどできれいに全周している。床面は硬く踏みしまっており、やや起伏が多い。特に北西部は壇状の高まりとなっている。

カマドは北壁中央からわずかに東に寄る。袖は「ハ」字状に削出されるが、旧住居跡の床を掘り下げているため、上面は平らで、高さは10cmほどしかない。燃焼部は溝状となり、長さ約80cm、焚き口部の幅約30cmである。火床面はほぼ床面と同一高で、中央部が盛り上がっている。ここに積もる骨片をよく含む灰は、左袖の脇にも多く堆積している。カマド内から掻き出されたものなのであろう。燃焼部の灰中には小型甕(4)が伏せられ、支脚となっている。また、左袖の上には坏(1)が乗っている。

立て替え前のカマドは、東壁の中央に設けられていたと思われる。しかし、残存するのは煙道のみで、カマドの本体は完全に削除されている。煙道は幅約25cm、長さ約117cmの溝状で、だらだらと立ち上っている。覆土は住居跡のものとは明確に分かれ、新住居跡の機能時には埋没していたことが分かる。

新住居跡の貯蔵穴は、北東の隅部に備わる。カマドの右袖によって画されるため、ほとんど独立した空間になっている。全体は径52cm×45cmの円形で、深さは約70cmを測る。断面形は細い円筒状である。



第47号住居跡カマド（古）土層説明
a．10YR3/4　暗褐色土　L・B・C粒多。焼道天井部崩落土層？。
b．10YR3/4　暗褐色土　基本はa．Bブロック・C粒多。
c．10YR4/4　褐色土　ほとんどし．底部崩軟化層。
第47号住居跡カマド（新）土層説明
a．10YR4/4　褐色土　焼土化した砂質Lブロック。天井・壁部崩落土層。
b．2.5YR5/8　明赤褐色土　Bブロックからなる。天井・壁部崩落土層。
c．10YR2/1　黒色土　B・C粒．骨片多。単純灰層。

第47号住居跡土層説明
1．10YR3/4　暗褐色土　砂質Lブロック・C粒多。
2．10YR4/3　にぶい黄褐色土　Lブロックからなる。
3．10YR3/3　暗褐色土　L＋G．C粒微。
4．10YR3/3　暗褐色土　B・C粒多。
5．10YR4/4　褐色土　3との境にB・Cの薄層。
6．10YR2/2　黒褐色土　B・C粒多。骨片を含む灰層。新カマドの灰捨て場？。

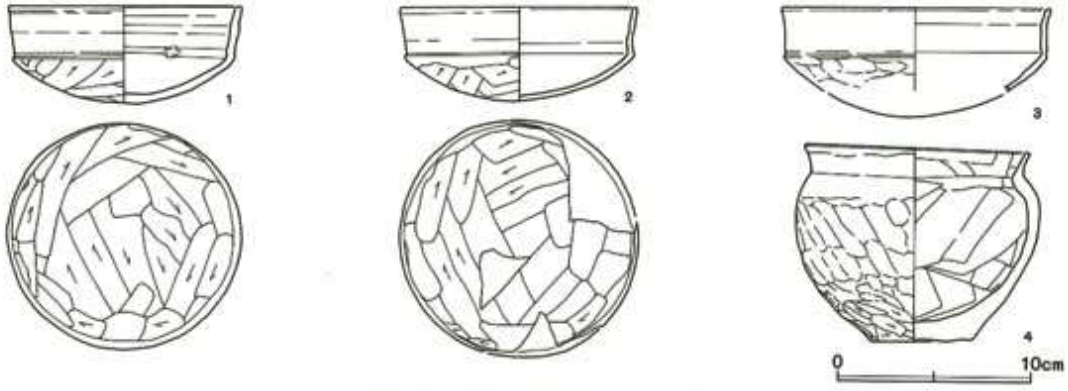
0　2m

第220図　第47号住居跡

カマドの袖の状況から見れば、少なくとも北壁部に拡張の様子は認められない。なぜなら、袖は壁際まで同じ高さで、しかもその上面は一律に硬くしまっているからである。これは旧床面を掘り下げた結果にほかならない。もし壁を拡張したならば、より高く削り出された部分や、軟質な部分が観察されてもよいはずである。壁溝もカマドをよけていることから、旧住居跡のこの部分には、当初より存在しなかったものと判断される。

第47号住居跡出土遺物（第221図）

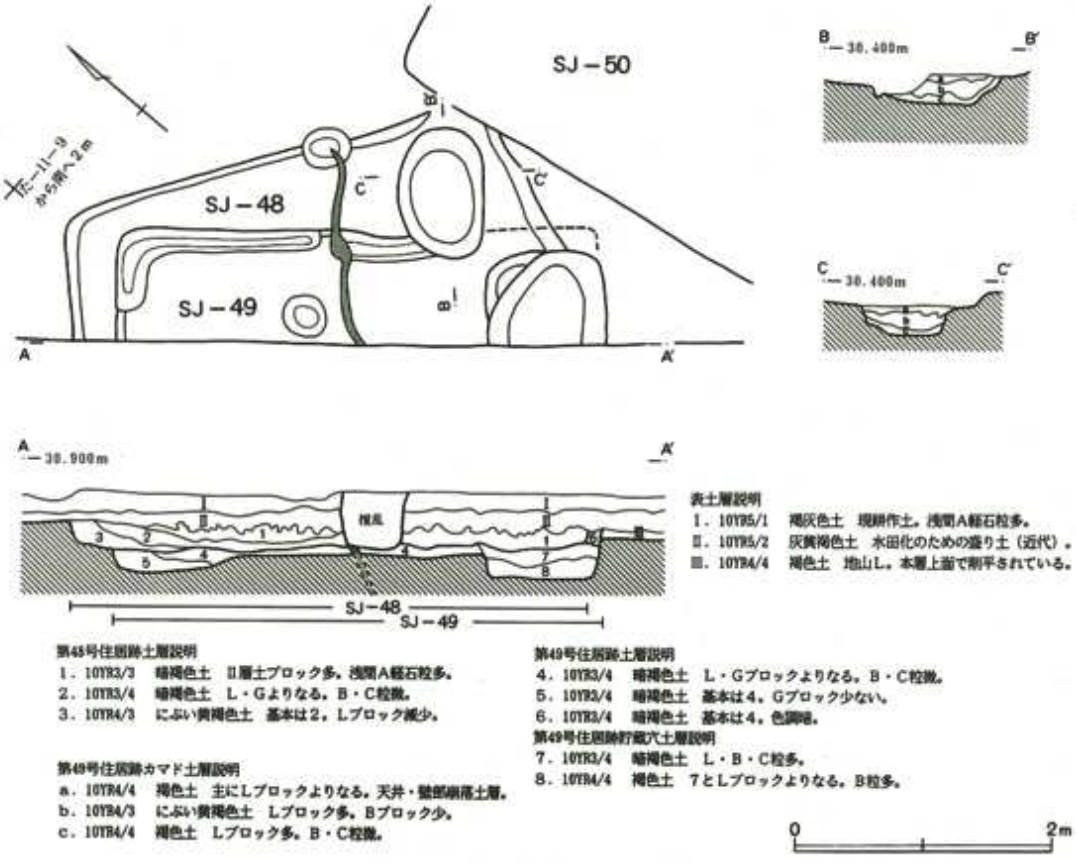
No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	坏	11.8 × 4.9 × —	完形	W＋W′＋R＋B′	橙	
2	〃	12.3 × 4.9 × —	70%	W′＋R＋B′	〃	
3	〃	(14.0)×(4.1)× —	30%	W少＋粗R＋B′	〃	
4	小型甕	11.8 × 10.1 × 5.2	完形	W＋W′＋R＋B′	にぶい橙	



第221図　第47号住居跡出土遺物

第48号住居跡(第222図)

た—11—3グリッドを中心に位置する。本跡自身は第49号住居跡の上に乗るが、西側は調査区外になるため、1/3程度が検出されたにすぎない。また、削平のため新旧は不明ながら、東の隅部では第50号住居跡と重複している。北東壁に平行する軸長は3.8mほどである。



第222図　第48・49号住居跡

遺構確認面から床まではおよそ10cmで、床面はさほど硬化していない。第49号住居跡にあたる部分も貼り床が施された様子はなく、単に覆土が掘り込まれているだけである。

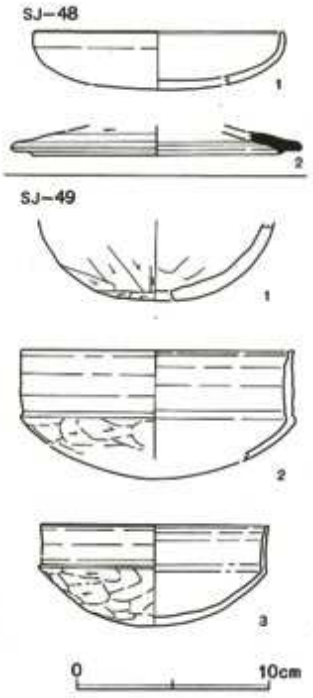
カマドや貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は覆土中より坏(1)、須恵器の蓋(2)の小片が出土している。

第49号住居跡(第222図)

た—11—3グリッドを中心に位置する。大部分は調査区外となっているほか、上には覆土を切り込んで第48号住居跡が重複している。南北方向の軸長は現状で約3.8mを測る。主軸の方向はN—50°—Eほどとなろう。

覆土はすべて自然堆積を示し、第48号住居跡の床面形成にあたっても、埋め戻されたりした様子は認められない。ただし、1層は床面となっていたため、かなり強くしまっている。遺構確認面から床までは約15cmである。床面はやや軟質で、北寄りが一段低い。壁溝は幅16cm、深さ8cmほどで巡り、カマドに取り付いている。



第223図
第48・49号住居跡出土遺物

カマドは東壁の南寄りに設けられている。削平のために燃焼部のみの残存となっており、袖などは不明である。燃焼部は径100cm×66cmの楕円形を呈し、大きく壁外に突出している。火床面は概ね平坦となり、深さは22cmを測る。覆土は填圧で硬くしまり、明確な灰層などは観察されない。

本跡の南東隅に相当するであろう部分には、幅約90cm、深さ30cmほどの土坑状の掘り込みが検出されている。貯蔵穴かとも思われるが、形状やカマドとの位置関係が不自然である。

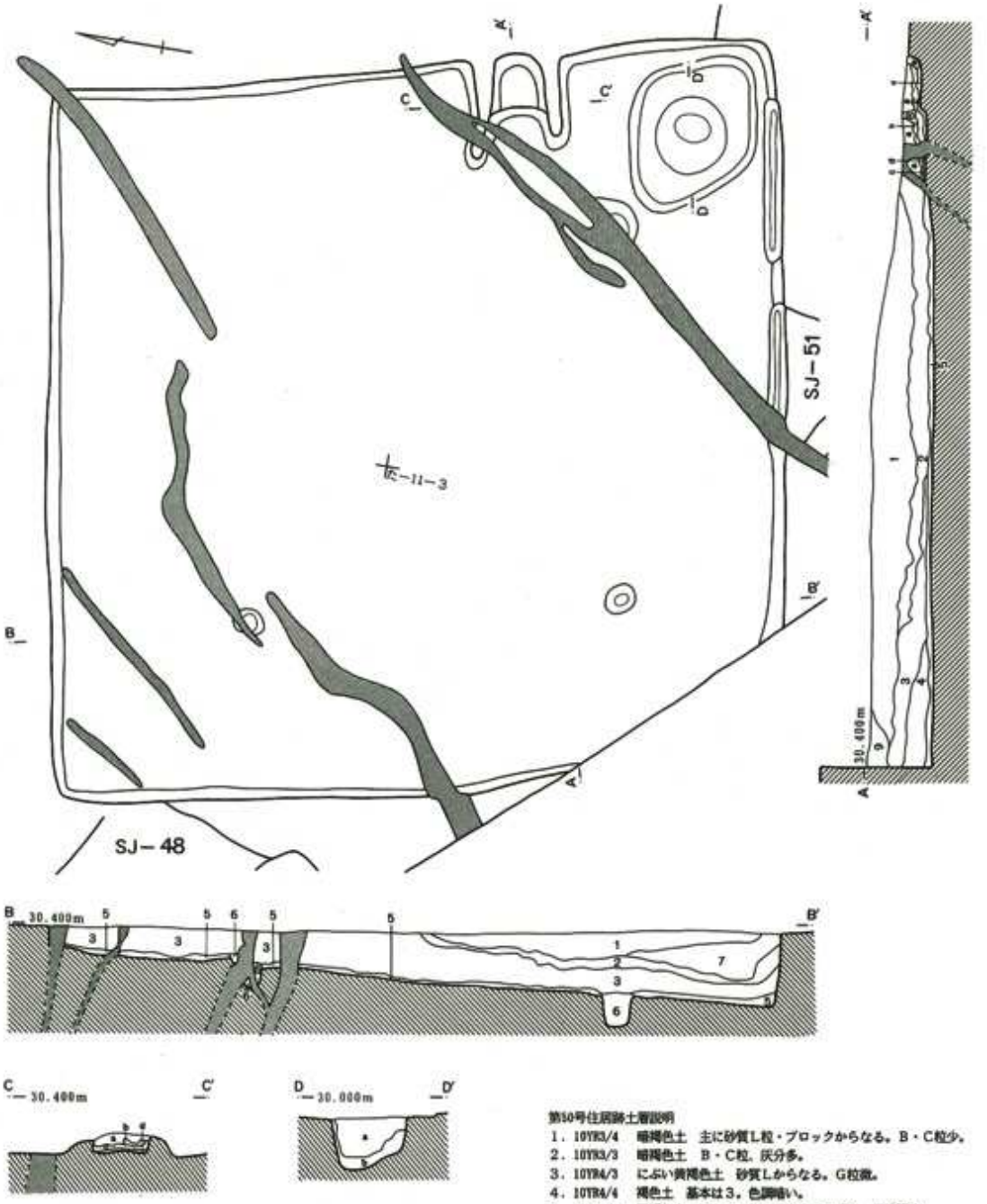
遺物は少なく、覆土中より甑(1)と坏(2・3)の破片が出土したのみである。

第48・49号住居跡出土遺物(第223図)

No.	器種	法量	残存率	胎土	色調	備考
第48号						
1	坏	(13.0)×(2.7)×—	破片	W′+B′	橙	
2	蓋(須恵)	—×15.0×(1.2)	小片	W+W′+R	灰白	
第49号						
1	甑	—×(4.1)×孔2.0	底部破片	W′+B′多	にぶい黄橙	
2	坏	(14.3)×(5.6)×—	40%	W+W′+粗R+B′	橙	
3	〃	12.0×5.5×—	60%	W′+R多+B′	〃	

第50号住居跡(第224図)

そ—11—22グリッドを中心に位置する。南東隅部に第51号住居跡が乗るほか、噴砂の亀裂が壁や床を分断している。南西隅部が調査区外となるものの、全体は各隅の鋭い方形を呈している。軸長は6.16m×6.4m、面積は約39.4m²を測る。主軸方向はおよそN—82°—Eで、かなり東へ傾いている。



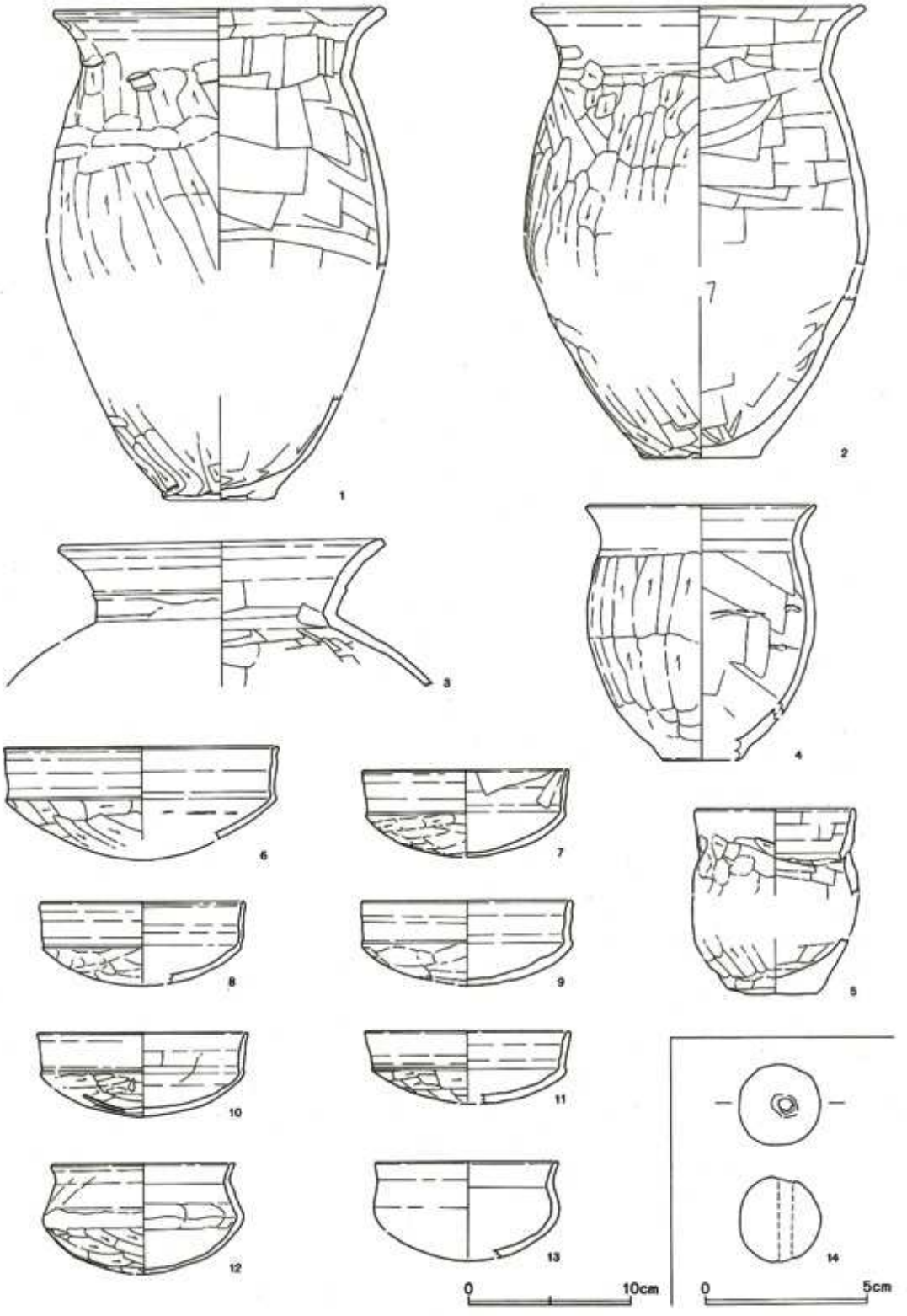
第50号住居跡カマド土層説明
a．10YR5/4　にぶい黄褐色土　砂質L・Gブロックからなる。天井・壁部崩落土層。
b．5YR5/6　明赤褐色土　Bブロックからなる。天井・壁部崩落土層。
c．5YR4/6　赤褐色土　小型Bブロック粗含。
d．10YR3/3　暗褐色土　B・C粒多。粘質化した灰層。
e．10YR4/4　褐色土　ほとんどL。住居廃絶後の流入。

第50号住居跡貯蔵穴土層説明
a．10YR4/3　にぶい黄褐色土　主にGからなる。Lブロック多。C粒微。
b．10YR3/4　暗褐色土　砂質Lからなる。C粒微。

第50号住居跡土層説明
1．10YR3/4　暗褐色土　主に砂質L粒・ブロックからなる。B・C粒少。
2．10YR3/3　暗褐色土　B・C粒。灰分多。
3．10YR4/3　にぶい黄褐色土　砂質Lからなる。G粒微。
4．10YR4/4　褐色土　基本は3。色調暗い。
5．10YR3/2　黒褐色土　灰・Cの薄い層が床面に乗る。廃棄層？
6．10YR3/4　暗褐色土　B・C粒少。柱穴覆土。
7．10YR4/4　褐色土　Lブロック・Bツブ微。
8．攪乱
9．10YR3/4　暗褐色土　L・Gブロックからなる。

0　2m

第224図　第50号住居跡



第225図　第50号住居跡出土遺物

覆土は砂質の地山粘質土を主体とし、全体的にザラついている。ただ、床面直上の5層は灰状の粘土で、柱穴や貯蔵穴部分には分布していない。感じとしては農家の土間が想起される。住居使用時に堆積した塵埃、あるいは足についてきた泥が落ちたものであろうか。

壁の立ち上がりは垂直であり、床からは最大64cmの高さを有する。壁溝は南壁の一部に検出されたのみである。床面は中央部が特に硬化し、北から南へ強く傾斜している。地震による段差も生じているため、傾斜は後天的なものと考えられる。

カマドは東壁の南寄りに設けられている。袖は「ハ」字状に開き、焚き口部での幅は約55cmとなっている。火床面は床面と同じ高さに揃えられているが、奥部は5cmほど高くなっている。

柱穴は3本確認されており、位置的に主柱穴と思われる。しかし、北東に予想されるものは検出できなかった。3本は直径25cm、深さ30cmほどの小穴で、柱痕などは観察されなかった。

貯蔵穴は南東隅部に備わる。上面は約120cm×110cmの菱形状で、深さ2cm程度の浅い窪みとなっている。内面は約65cm×60cmの円形となり、深さは42cmを測る。覆土はかなり粘土化が進行している。

遺物は5・8・12がカマド内、他はいずれも覆土中からの出土である。

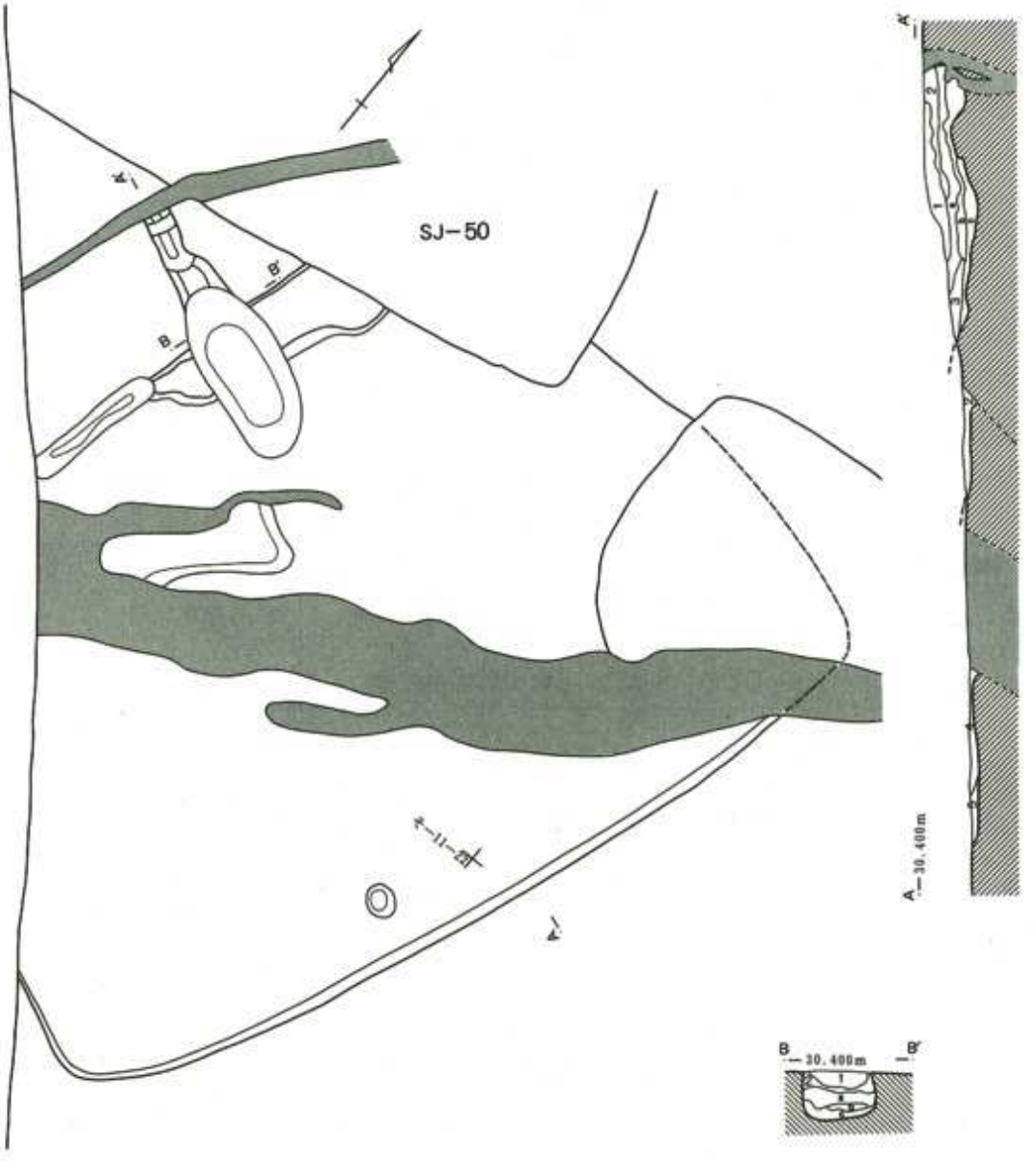
第50号住居跡出土遺物(第225図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	甕	21.0 × 30.0 × 6.6	60%	W+W′+粗R+B′微	明赤褐	口縁に歪み
2	〃	16.8～18.0 × 26.7 × 7.0	60%	W+粗(W′+B′)多	橙	口縁～胴部に歪み強い
3	壺	20.3 ×(9.2)× —	口縁～肩部破片	細W微+W′多+R+B′	〃	口縁歪み強い 外面ヘラヨコナデ不明瞭
4	小型甕	(14.2)×(15.5)× —	35%	粗(W′多+B+B′)	明赤褐	
5	小型甕?	(10.0)×(15.6)×(5.4)	口縁	W+粗W′多+B′	橙	
6	坏	(17.0)×(6.1)× —	40%	W+W′+粗R多+B′	〃	
7	〃	(12.8)×(5.3)× —	40%	W′+R+B′	〃	
8	〃	(12.7)×(5.1)× —	30%	W+W′+R+B′微	にぶい橙	
9	〃	13.0 × 5.2 × —	70%	W′+粗R多+B′	橙	
10	〃	(12.8)× 5.0 × —	50%	(W+W′)微+R多+B′	〃	
11	〃	12.4 ×(4.3)× —	70%	W+W′+粗R多+B′	〃	
12	甕	(11.4)×(7.0)× —	50%	W+W′多+R+B′	〃	
13	〃	11.4 ×(5.8)× —	60%	W+W′+R+B′	明赤褐	剥落著しい

第51号住居跡(第226図)

そ—11—22グリッドを中心に位置する。北西隅部は第50号住居跡に乗るが、平面的にはプランを確認できなかった。また、南東部が攪乱坑に切られるほか、中央部には住居跡を二分するように、大規模な噴砂の亀裂が走っている。全体に形は崩れているものの、ほぼ長方形の姿をとどめている。現状での軸長は約5.1m×7.1m、面積にして約36.2m²となる。ただし、噴砂によって引き裂かれた分を除けば、軸長は約3.4m×6.1m、面積は約20.7m²ということになる。主軸の方向はカマドを優先させれば、概ねN—74°—Wである。

グリッド・ライン［そ］以南では再び削平が激しくなるため、本跡も壁や床の多くを失っている。最も残存状態のよい西壁部では、遺構確認面から床までは約44cmが測れる。床面は非常に硬く踏み



第51号住居跡土層説明
1．10YR3/4　暗褐色土　砂質・粘質Lブロック多。
2．10YR3/3　暗褐色土　B・C粒多。
3．10YR3/4　暗褐色土　B・C粒微。粘性強い。
4．10YR3/4　暗褐色土　砂質L粒多。C粒微。
5．10YR4/6　ほとんど砂質L。Gブロック少。

第51号住居跡カマド土層説明
a．10YR3/3　暗褐色土　B・被火熱L粒多。C粒少。
b．2.5YR3/4　暗赤褐色土　下部にBブロック多。天井・壁部崩落土層。
c．10YR5/3　にぶい黄褐色土　灰白色の灰層。

0　2m

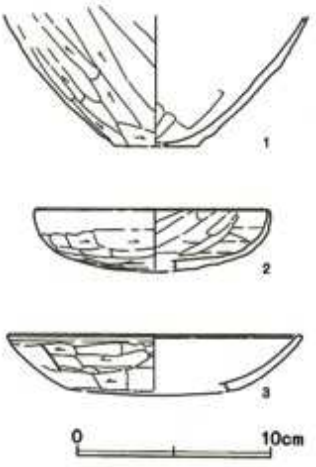
第226図　第51号住居跡

しまり、バリバリとなっている。地震のために細かい段差も生じており、面的には洗濯板のようにでこぼこである。

カマドは西壁やや北寄りに付くと思われる。袖は明瞭ではないが、壁の前面が壇状の高まりとなっており、それに類するものと考えられる。特に右側は隅部の方まで広がり、棚のように見える。燃焼部は径150cm×66cmの楕円形で、横断面は箱形を呈している。火床面は床よりいくぶん低くなるようで、厚く灰が堆積している。煙道も噴砂で裂かれるものの、およそ幅45cm、長さ84cm、深さ26cmである。先端の煙り出し部分はピット状となり、深さは34cmを測る。

貯蔵穴や柱穴の検出は見られなかった。

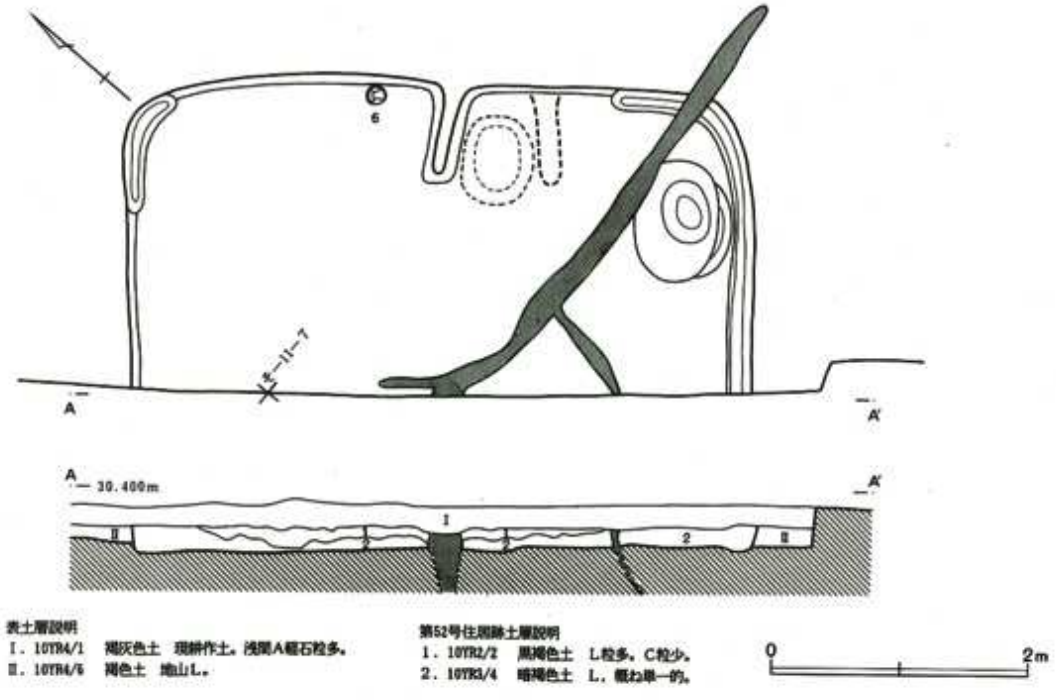
遺物はわずかに残存する覆土中より、甕(1)と坏(2・3)の破片が出土しているにすぎない。



第227図　第51号住居跡出土遺物

第51号住居跡出土遺物(第227図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	甕	—　×(6.8)×(4.5)	底部破片	W+W′多+R+B′微	にぶい黄橙	
2	坏	(12.6)×(3.1)×　—	30%	細(W+W′+B′)	〃	
3	〃	(15.2)×(2.9)×(3.0)	口縁破片	W+W′微+R+B′	明赤褐	



第228図　第52号住居跡

第52号住居跡(第228図)

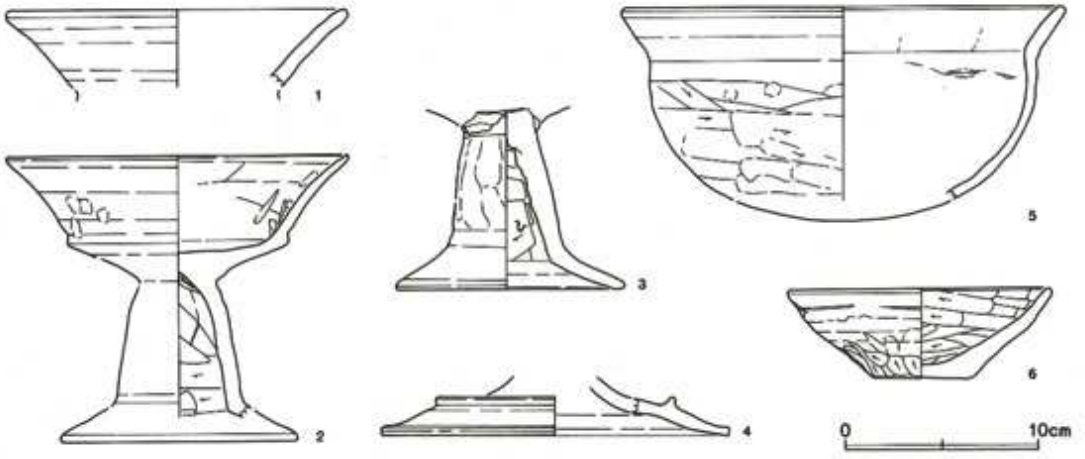
そ—11—11グリッドを中心に位置する。南西側は調査区外となるため、1/2程度の検出にとどまった。軸長は4.84m×？で、主軸方向はおよそN—48°—Eを指す。

削平が激しいため、遺構確認面から床までは最大で約15cmである。床面は軟質で、噴砂の亀裂により段差が生じている。壁溝は部分的に検出され、幅約12cm、深さ約3cmを測る。

カマドはほとんど削平され、左袖がわずかに残存するのみである。燃焼部は浅く窪んでいたようで、焼土化した部分に火床面の名残りが認められる。

貯蔵穴は東隅部、カマドの右側に掘り込まれている。径92cm×66cmほどの楕円形を呈し、一部は噴砂に切られている。深さは約47cmである。

遺物はカマド左脇の床面直上より、完形の坏(6)が出土している。図示した他の遺物はすべて破片で、覆土中に散乱していた。



第229図　第52号住居跡出土遺物

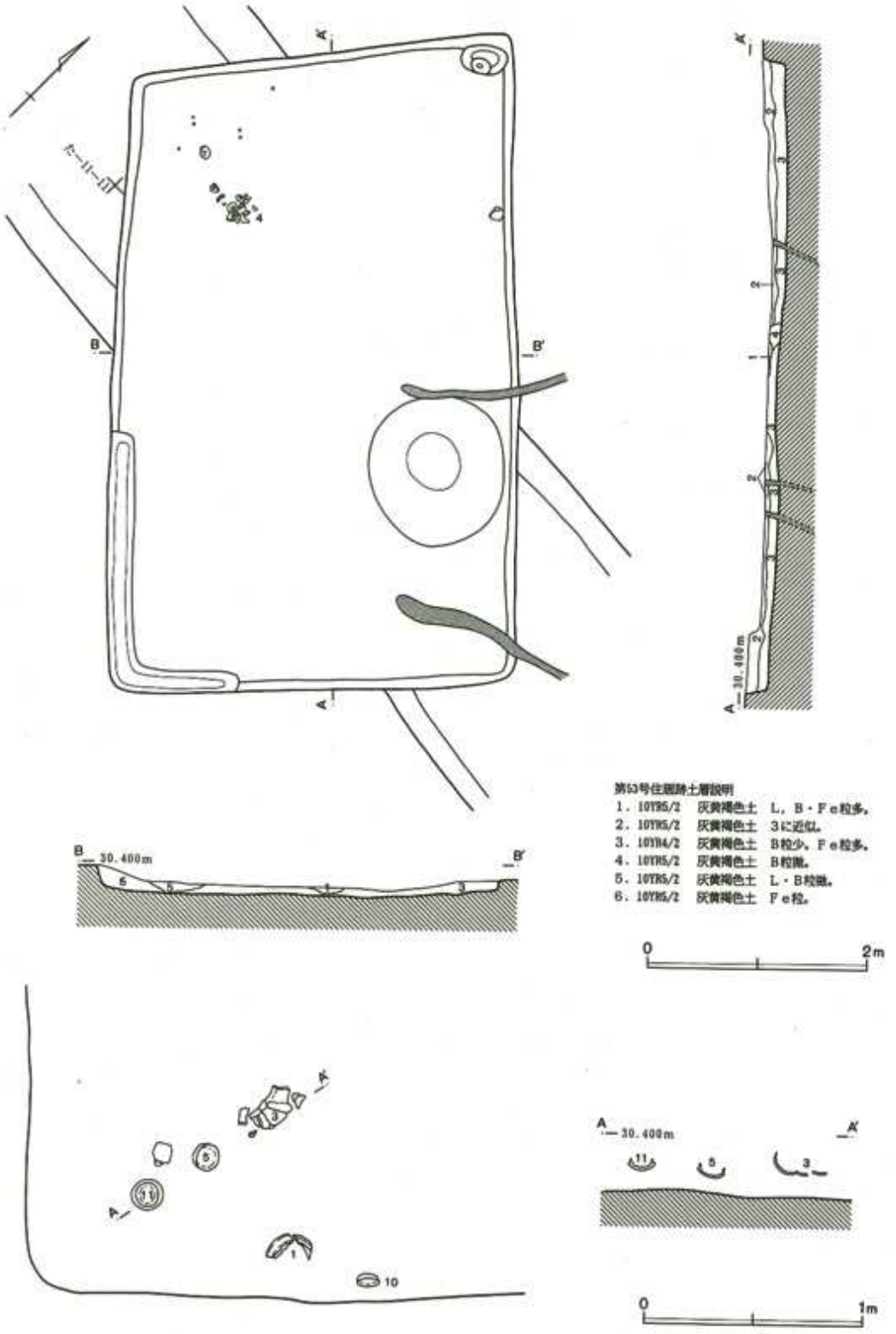
第52号住居跡出土遺物(第229図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	壺	17.8 ×(3.9)× —	口縁破片	W+W′多+R+B′	橙	
2	高坏	17.8 ×(13.5)× —	70%	細(W+W′)+R多	明赤褐	
3	〃	— ×(9.3)×裾12.2	脚部60%	W+W′+B′少	〃	
4	〃	— ×(7.2)×裾18.0	裾破片	細(W+R)少+(W′+B′)多	橙	
5	鉢	(23.0)×(10.0)× —	坏破片	W多+W′+R少+B′	明赤褐	
6	坏	15.8 × 5.0 × 5.0	完形	細(W+W′+B′)	橙	

第53号住居跡(第230図)

た—10—15グリッドを中心に位置する。全体は5.75m×3.7m長方形を呈し、面積は約21.3m²を測る。長軸の方向はN—45°—Wである。

層位として捉えられるほどではないが、住居跡の中央部には焼土が、南隅には灰が散っていた。いずれも床に直接乗るものではなく、やや浮いて存在する。壁は急角度で立ち上がり、床までの深さは約20cmである。壁溝は南側の隅部検出された。幅約20cmで、深さは3cmと浅い。床面は非常に

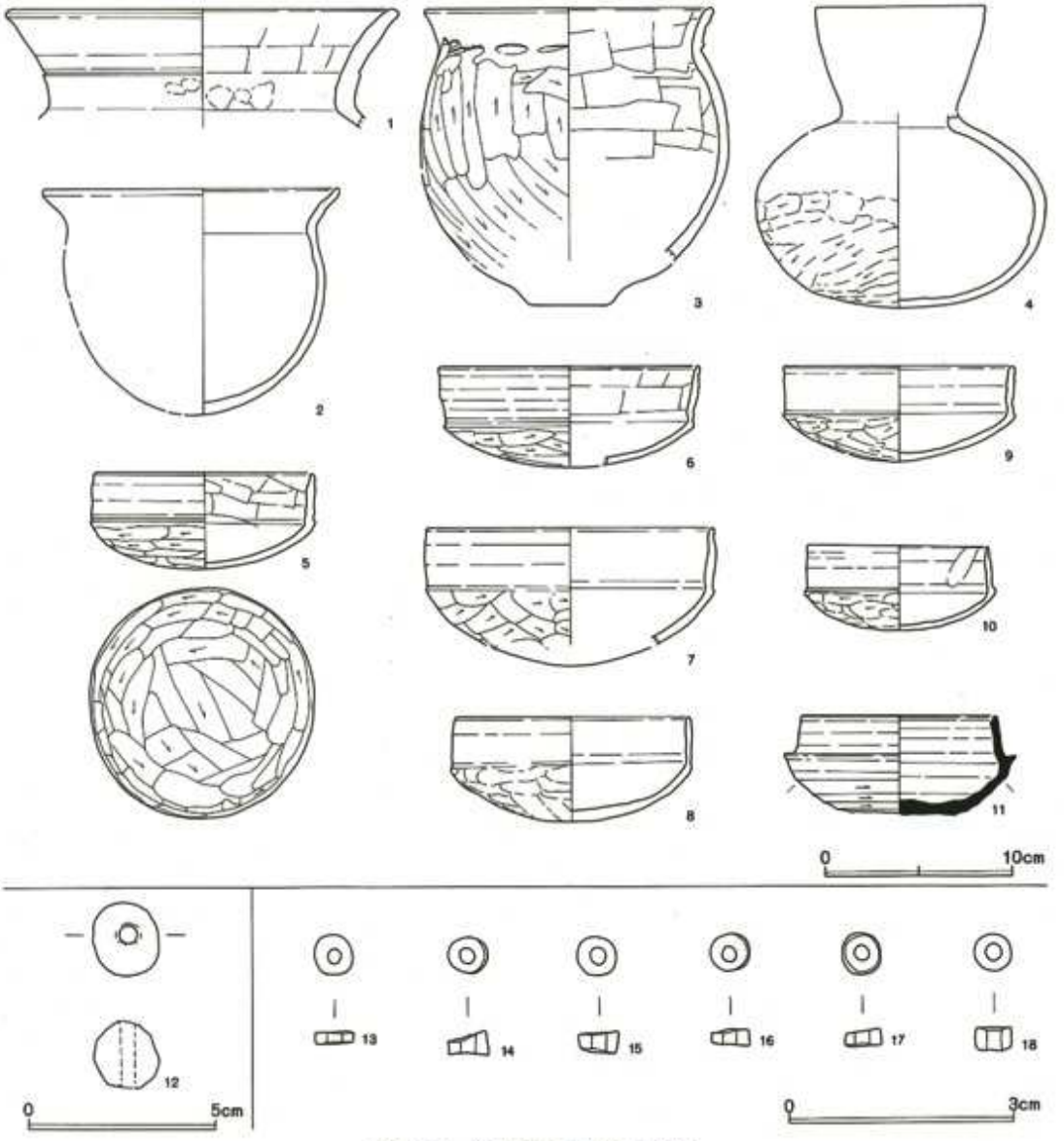


第230図　第53号住居跡・同遺物出土状態

軟質で、中央部がやや膨んでいる。

カマドや貯蔵穴、柱穴などはまったく検出されなかった。しかし、床の北東壁寄りには直径約65cm、深さ約3cmの浅い窪みが見られる。明瞭な掘り込みではないが、上述の焼土はこの部分でも多く分布している。

遺物はおおよそ二つのブロックに分けられる。一つは住居跡の西隅を中心に分布し、床面に直接乗っているブロックである。内容は坩1(4)、土玉1(12)、臼玉4(13~18)である。もう一つは南隅に集中しているブロックで、いずれも床からは10cmほど浮いている。完形の須恵器(11)と土師器(5)の坏、壺(1)と小型甕(3)の破片などがある。



第231図　第53号住居跡出土遺物

本跡は長方形の度合が強く、カマドなどの施設が伴わない点など、住居跡とする根拠に乏しい。遺物としては、搬入品と思しきＴＫ―23型式の須恵器坏の出土が注目される。柳町遺跡をはじめ、上部道路関係の遺跡では須恵器自体の出土が希であり、しかも完形品という点で特異である。あるいは、本跡には祭祀的な性格を付与してよいのかもしれない。

第53号住居跡出土遺物(第231図)

No.	器種	法　　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	壺	(21.0)×(6.4)×―	口縁破片	W多＋W′＋R＋B′	橙	
2	小型壺	(17.0)× 11.9 ×―	50%	粗砂粒(W′)多＋B＋B′	にぶい橙	
3	小型甕	15.4 ×(13.7)×―	60%	粗W′＋小礫(W′＋片岩)＋B′	〃	
4	坩	― ×(10.5)×―	胴部90%	細(W＋W′＋B′)	橙	
5	坏	12.0 × 5.1 ×―	完形	W＋W′微＋R多＋B′	〃	
6	〃	(14.0)×(5.3)×―	30%	W＋W′＋B′	明赤褐	
7	〃	(15.4)×(6.2)×―	30%	W＋W′＋R＋B′	橙	
8	〃	12.6 × 5.5 ×―	95%	W＋W′＋B′	明赤褐	磨耗、剝落が著しい
9	〃	(12.2)×(5.2)×―	50%	粗W微＋W′＋R＋B′	橙	
10	〃	9.7 × 4.6 ×―	70%	W微＋W′＋R＋B′	〃	
11	須恵器坏	10.4 × 5.2 ×―	完形	W	灰白	

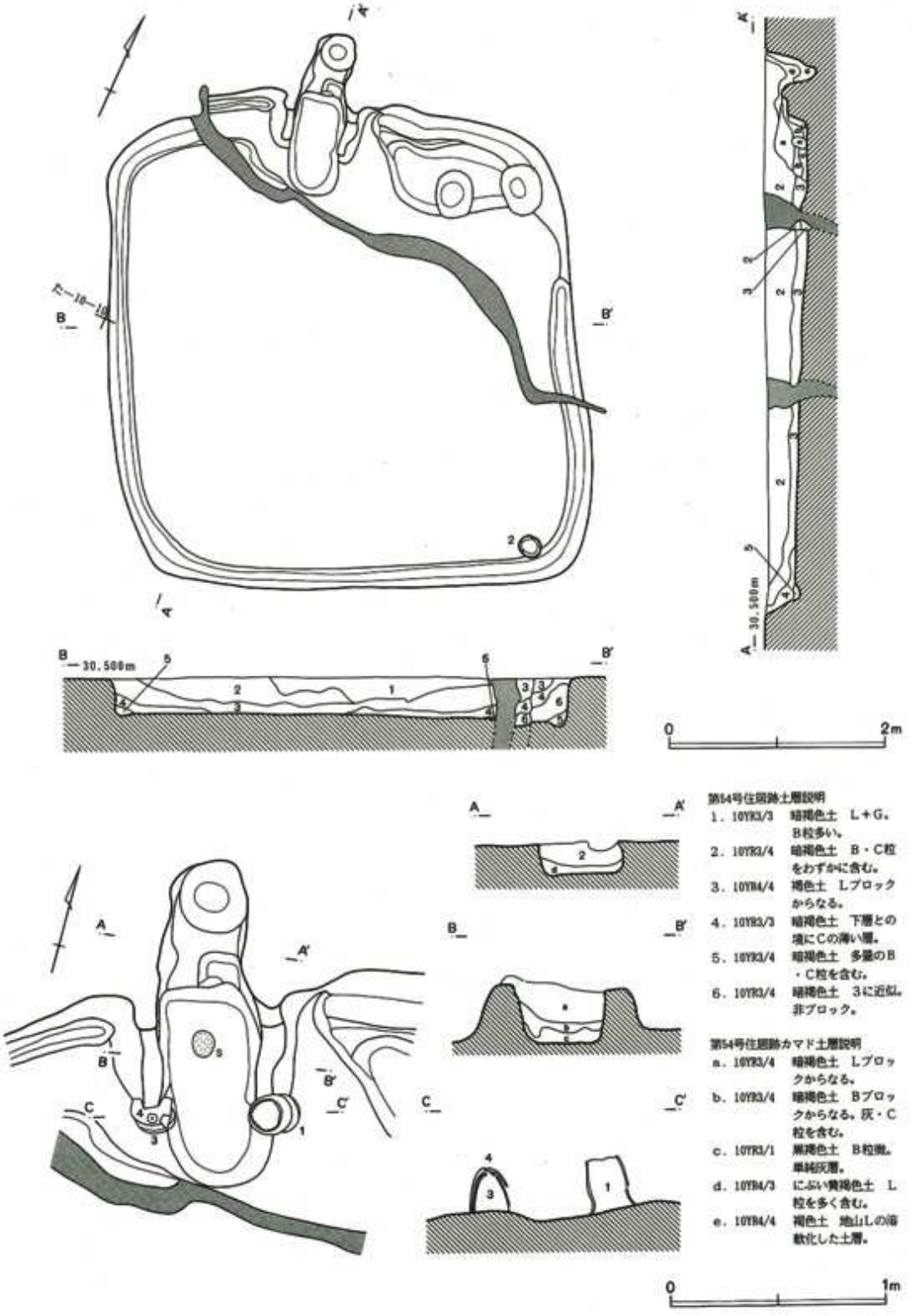
第54号住居跡(第232図)

た―10―９グリッドを中心に位置ずる。地震による崩落および噴砂のため、カマド周辺はかなり乱れている。平面は隅丸の方形を呈し、軸長4.4m×4.36m、面積約19.2m²をそれぞれ測る。主軸の方向はおよそＮ―25°―Ｗを指す。

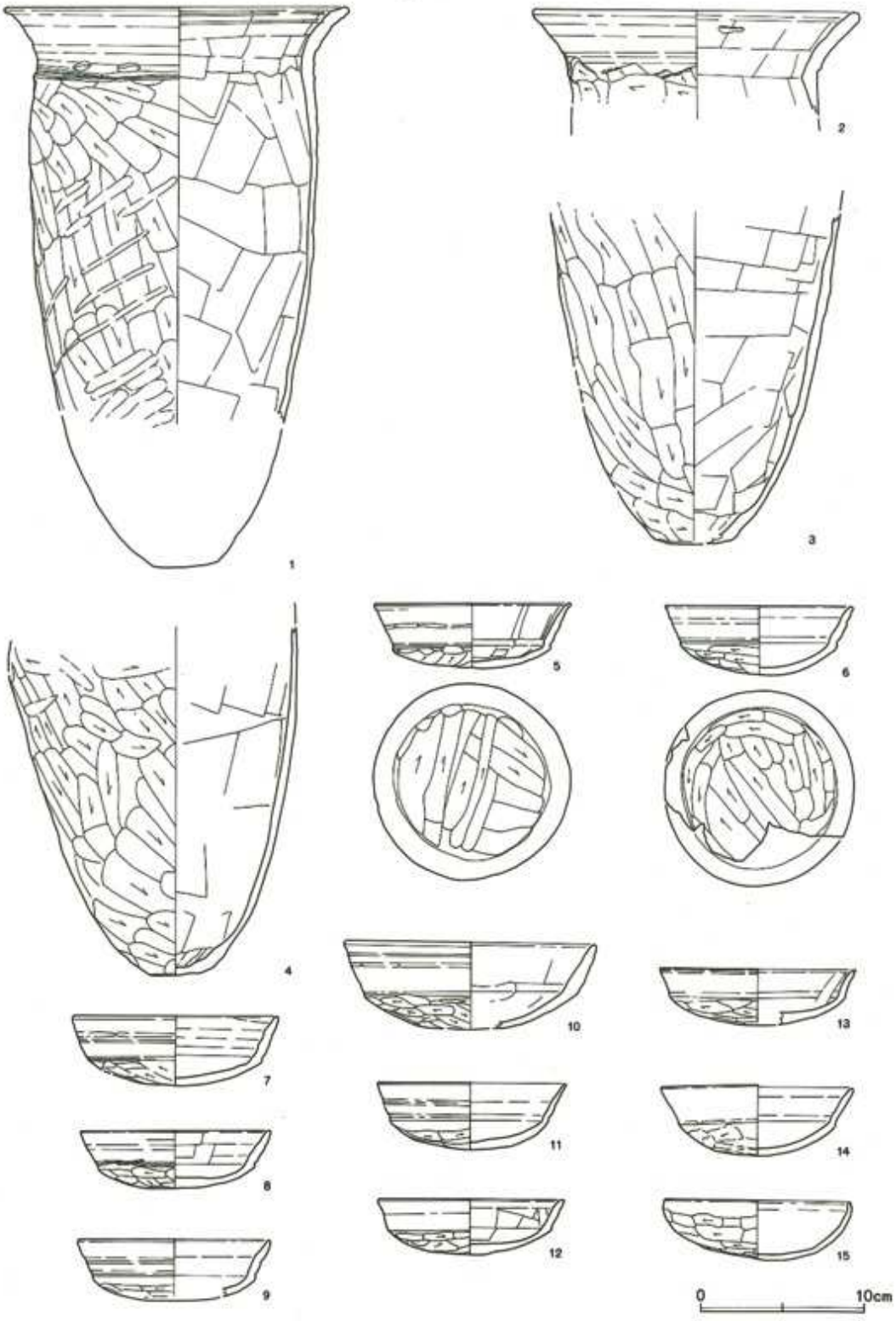
壁はカマド側で崩落が激しいものの、他はおおよそ垂直を保っている。遺構確認面から床までは約36cmの深さを有する。比較的軟質な床面は噴砂で断裂し、各所で段差を生じている。本来的には中央部がわずかに高くなっていたものと思われる。地震による捻転で北隅は不明確であるが、壁溝はほぼ全周するようである。検出部分での幅は約20cm、深さは５cmで一定している。

カマドは北西壁の中央に設けられている。袖の削り出しは約45cmと短く、壁から焚き口へ向けて低くなっている。先端の焚き口部には倒立させた甕が置かれ、袖と甕は地山の粘質土で接合される。甕は左袖が２個体を重ねたもの(下３・上４)、右袖が底部を欠損したもの(１)である。燃焼部は93cm×37cmほどの長方形となり、横断面は箱形を呈している。火床面は床面より５cmほど深く掘られ、底面は平坦に仕上げられている。内部にはきれいな灰が堆積し、壁よりの中央には自然礫の支脚が立てられている。煙道は幅約40cm、長さ約55cmの楕円状で、煙り出しの部分は直径32cm、深さ46cmほどのピット状となっている。

遺物はカマド袖の甕以外に、東隅部の床面上から甕の口縁部(２)、覆土中から坏(５～15)が出土している。



第232図　第54号住居跡

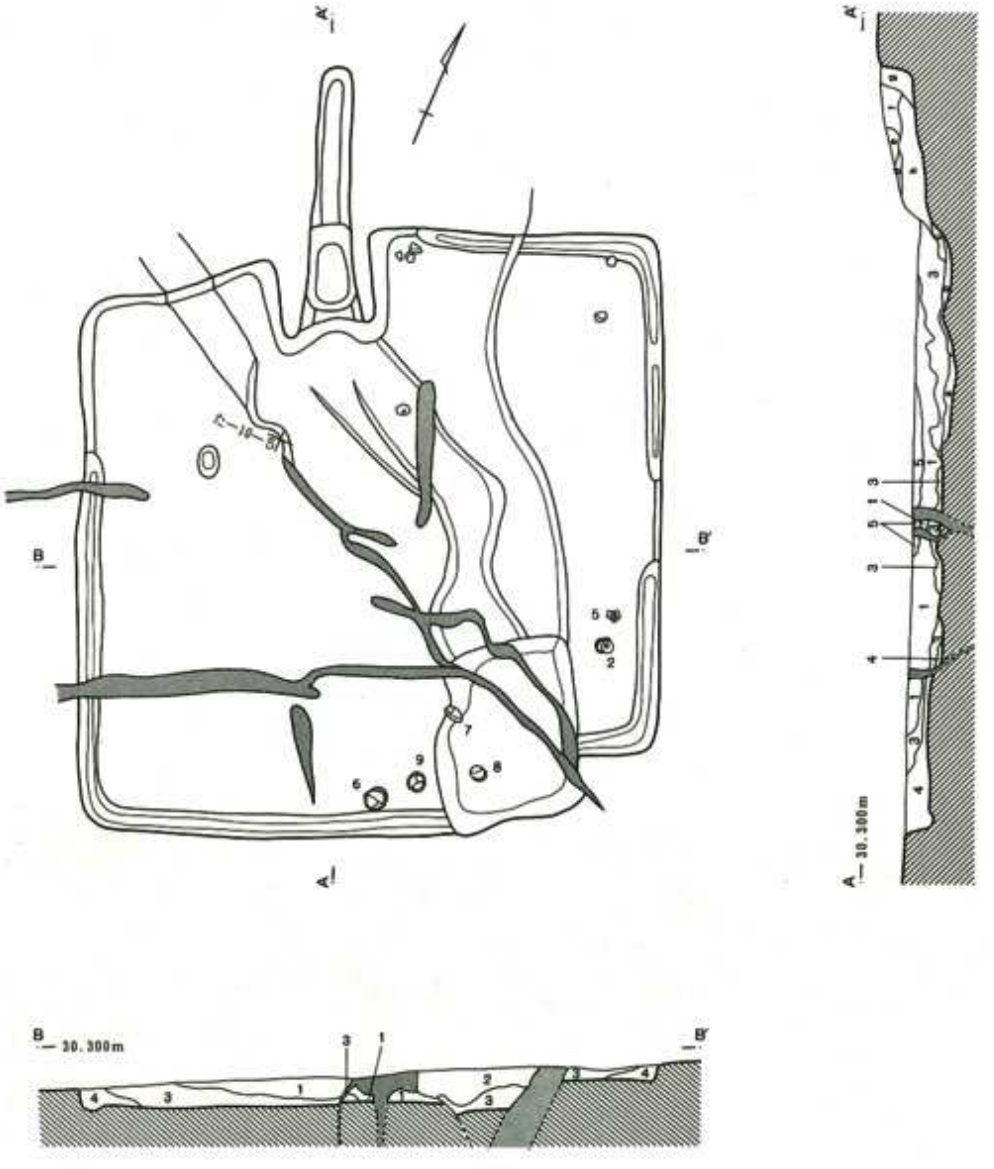


第233図　第54号住居跡出土遺物

第54号住居跡出土遺物(第233図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	甕	21.0 ×(25.3)× —	70%	(W+W′+B′)多	にぶい橙	カマド袖芯
2	〃	20.8 ×(6.4)× —	口縁全周	W+W′+B′	〃	
3	〃	— ×(21.6)×(4.4)	下半部	(W+W′)多+R少+B′	橙	カマド袖芯
4	〃	— ×(20.9)× 3.4	下半部	W+W′+粗R+B′少	〃	〃
5	坏	12.0 × 4.0 × —	完形	W+W′+B′	〃	二次焼成
6	〃	11.7 × 4.4 × —	80%	W+W′+B′多	〃	〃
7	〃	12.6 × 4.2 × —	80%	W+W′+B′多	〃	〃
8	〃	11.6 × 3.7 × —	60%	W+W′+B′	〃	
9	〃	(11.8)×(3.5)× —	30%	W+W′多+B′	明赤褐	
10	〃	15.6 × 5.3 × —	70%	W微+W′+R+B′多	橙	
11	〃	11.7 × 3.9 × —	80%	W+W′+B′多	にぶい橙	二次焼成、剥落著しい
12	〃	11.6 × 3.4 × —	80%	W+W′+粗R+B′少	明赤褐	
13	〃	(12.0)×(3.4)× —	40%	W′+R+B′多	〃	
14	〃	11.6 × 4.3 × —	ほぼ完形	W′+R+B′	にぶい橙	磨耗著しい
15	〃	11.7 × 3.6 × —	70%	W+W′微+B′少	橙	〃

水没した住居跡の排水作業



第55号住居跡カマド土層説明

a．10YR6/1　褐灰色土　B粒・灰を含む。
b．10YR7/1　灰白色土　B粒をわずかに含む灰層。
c．10YR6/2　灰黄褐色土　B粒微。
d．10YR5/2　灰黄褐色土　L，しまり良い。煙道天井。
e．10YR6/2　灰黄褐色土　B粒多。煙道天井。
f．10YR7/1　灰白色土　L，B粒微。
g．10YR6/2　灰黄褐色土　L，Fe粒を良く含む。
h．10YR6/4　にぶい橙色土　Bブロック多。
i．10YR4/1　褐灰色土　L，B粒を含む。
j．10YR6/2　灰黄褐色土　灰層。

第55号住居跡土層説明

1．10YR5/1　褐灰色土　B・C粒少。
2．10YR5/2　灰黄褐色土　B粒微。しまり良い。
3．10YR6/1　褐灰色土　Bブロック多。
4．10YR6/1　褐灰色土　Fe粒多。
5．10YR6/1　褐灰色土　Fe粒多。

0　2m

第234図　第55号住居跡

第55号住居跡(第234・235図)

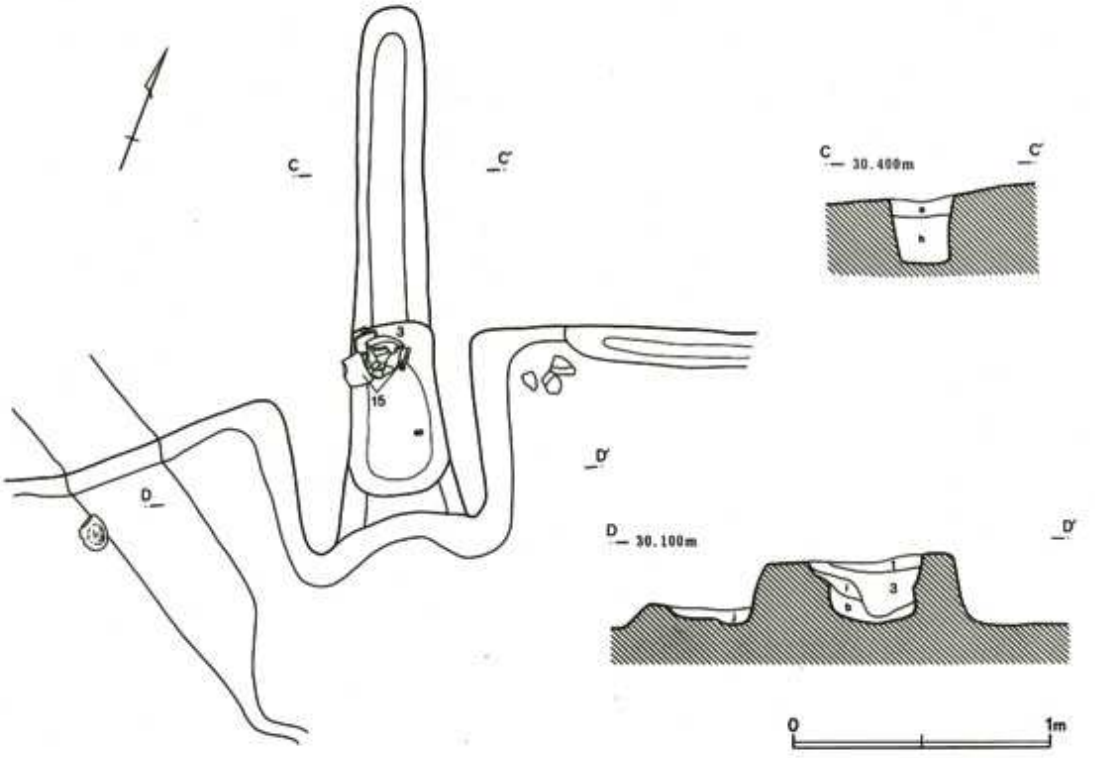
そ—10—24グリッドを中心に位置する。本跡は地震による地盤の水平移動により、東西方向の対角線を境に60cmほどずれている。これを復元すれば、軸長約4.16m×4.4m、面積約18.3m²の方形となる。主軸の方向はおよそN—24°—Wを指す。

壁の崩落はあまり見られず、概ね垂直を保っている。最も遺存状態のよい北隅部では、床面から約48cmの高さを有している。壁溝は西隅部を除き、幅約20cm、深さ約5cmでほぼ全周する。床面は硬質であるが、地割れによって凹凸が激しく、波を打ったようになっている。

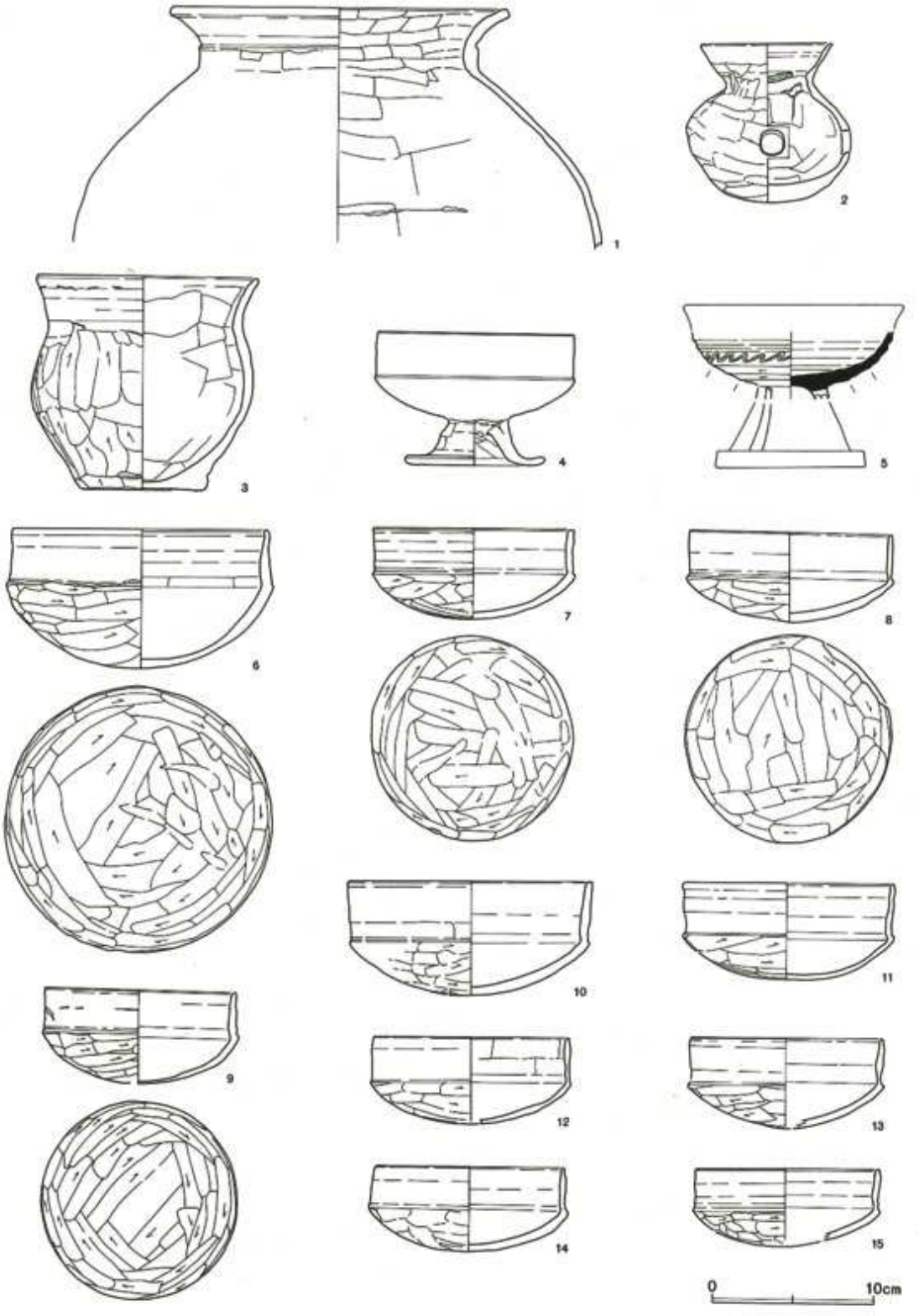
カマドは北壁やや西寄りに備わる。袖は「ハ」字状に削出され、焚き口部の幅は約50cmとなっている。焚き口部は床よりも6cmほど低く、足場状で硬化している。火床面は框状の高まりを境に、長さ約66cm×35cmの長方形に成形されている。ここに堆積する灰は、左袖の脇にも存在する。煙道は幅約25cm、長さ128cmの溝状で、かなりの傾斜で立ち上がっている。燃焼部内からは小型甕(3)や坏(15)、多量の土玉(25～38)が出土している。

貯蔵穴は東隅部の方形の掘り込みかであろうか。地震による崩落が激しく、明らかとしえない。

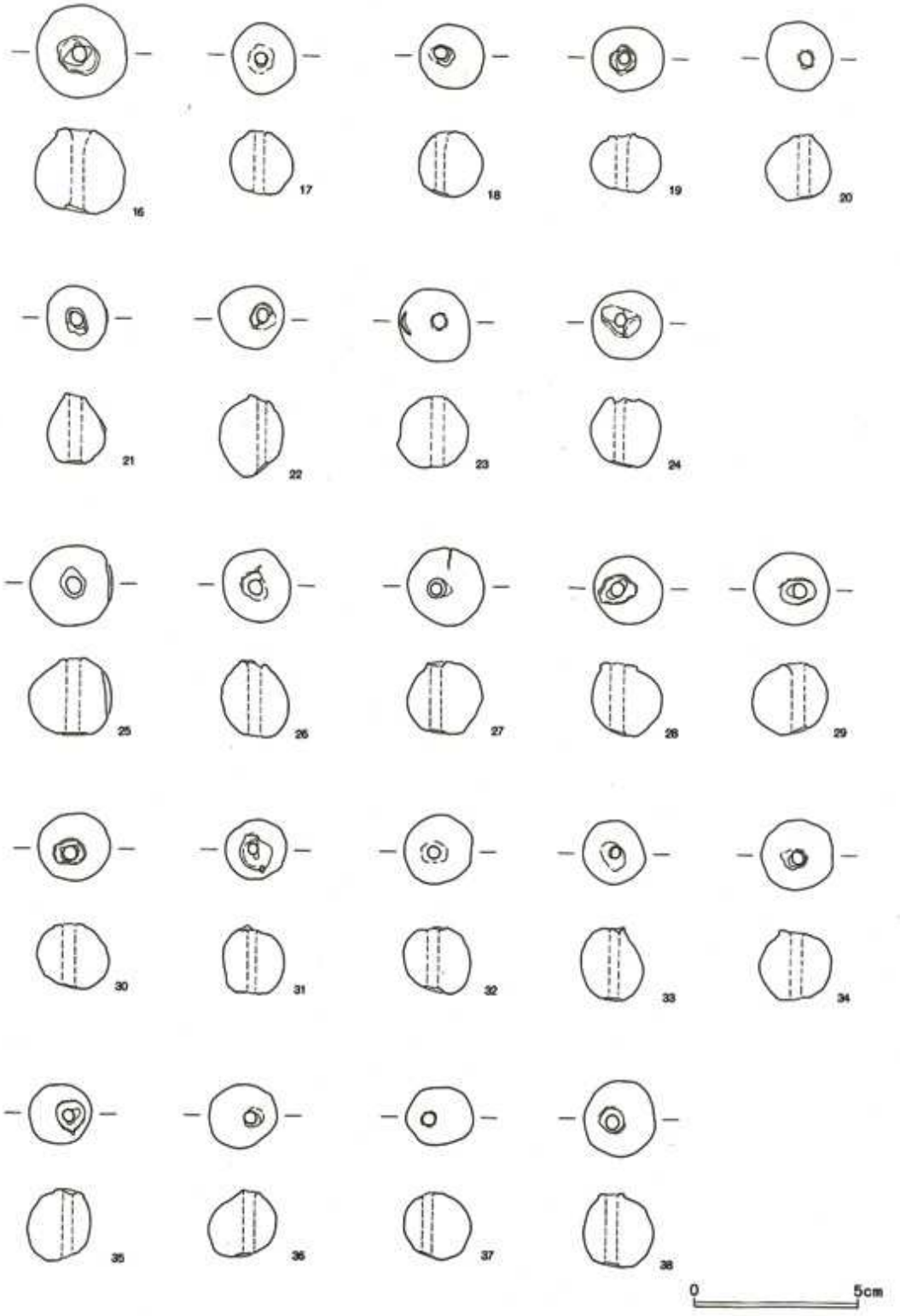
遺物は東隅部の周辺より土師器の甑(2)、坏(6～9)、須恵器の無蓋高坏片(5)が出土している。7・8以外はすべて床面の直上に見いだされている。



第235図　第55号住居跡カマド



第236図　第55号住居跡出土遺物(1)



第237図　第55号住居跡出土遺物(2)

第55号住居跡出土遺物(第236図)

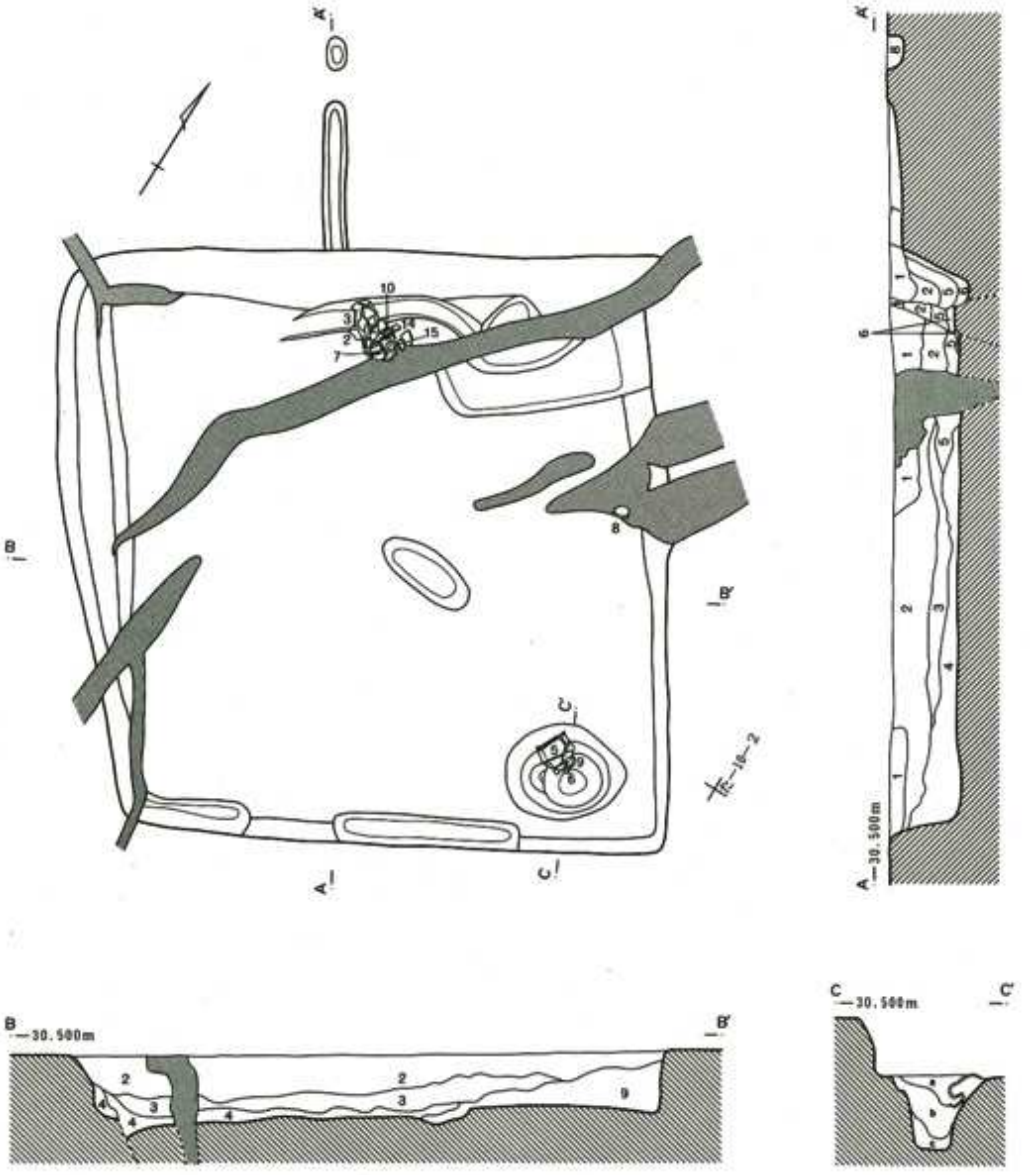
No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	壺	(21.0)×(14.4)× —	口縁破片	W+R+B+B′	橙	
2	鉢	8.8 × 9.8 ×孔1.4	80%	W+W′+R+B+B′微	にぶい黄橙	
3	小型甕	13.4 × 13.3 × 7.4	95%	粗(W+W′+B′少)	橙	磨耗著しく口縁歪む
4	高坏	— ×(2.8)×脚8.7	脚部	W微+R+B′	〃	
5	〃(須恵)	— ×(4.2)× —	破片	粗W′	灰	
6	坏	15.2 × 8.6 × —	80%	W+W′+R+B′	橙	
7	〃	12.6 × 5.5 × —	95%	W+W′+R+B′多	明赤褐	
8	〃	12.4 × 5.5 × —	80%	W+W′+R+B′	橙	
9	〃	11.9 × 5.8 × —	95%	W+W′+R+B′	〃	
10	〃	(15.2)× 7.0 × —	30%	W′+B+B′	〃	
11	〃	(13.6)× 5.9 × —	50%	W+W′+R+B′	〃	
12	〃	(12.2)×(5.3)× —	40%	W+W′+R+B′	〃	
13	〃	11.9 ×(5.7)× —	50%	W+W′+R+B′	〃	
14	〃	11.7 × 5.2 × —	80%	W微+W′+R+B′	〃	磨耗著しい
15	〃	11.4 ×(4.7)× —	50%	W+W′多+R+B′多	〃	

第56号住居跡出土遺物(第239・240図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	壺	(20.8)×(8.4)× —	口縁～頸部破片	W+W′+R微+B′	橙	
2	〃	11.5 ×(23.1)× 5.0～5.4	胴部～底部	細(W+W′)+粗R多	明赤褐	磨耗著しい
3	甕	18.6 × 35.4 × 6.7	90%	W少+粗W′多+R+B′	にぶい橙	
4	甑	22.8 × 28.9 ×孔(5.6)	70%	W′+粗R多+B′	橙	
5	〃	22.8 × 24.5 ×孔 8.0	完形	粗(W+W′)多+R+B′	〃	
6	高坏	(22.0)× 15.3 ×裾13.1	坏部30%脚部95%	W+W′+R+B′	〃	
7	坩	8.6 × 15.6 × —	完形	細(W微+W′多+B′)	〃	
8	坏	12.5 × 5.3 × —	〃	W微+W′+R+B′	〃	磨耗著しい
9	〃	12.2 × 5.4 × —	〃	W微+粗W′+R+B′	〃	
10	〃	12.4 × 5.9 × —	90%	W微+W′+粗R多+B′多	明赤褐	
11	〃	13.0 × 5.7 × —	95%	W微+W′+粗R多+B′	橙	
12	〃	12.4 ×(5.5)× —	60%	W+W′+B′	〃	
13	〃	(12.6)×(5.5)× —	40%	W+W′+R+B′多	〃	
14	〃	13.0 ×(5.4)× —	50%	W微+W′+粗R+B′	〃	
15	〃	12.8 ×(5.9)× —	70%	W多+W′+粗R少+B′	〃	
16	〃	11.8 ×(5.3)× —	60%	W+W′+R少+B′少	〃	

第56号住居跡(第238図)

た—10—8グリッドを中心に位置する。本跡も地震による損壊は著しく、西半部の歪みや崩落はかなり激しい。全体は方形を呈し、軸長はおおよそ4.42m×4.35m、面積にして19.2㎡ほどの規模を有する。主軸方向はN—24°—Wとなる。



第56号住居跡土層説明

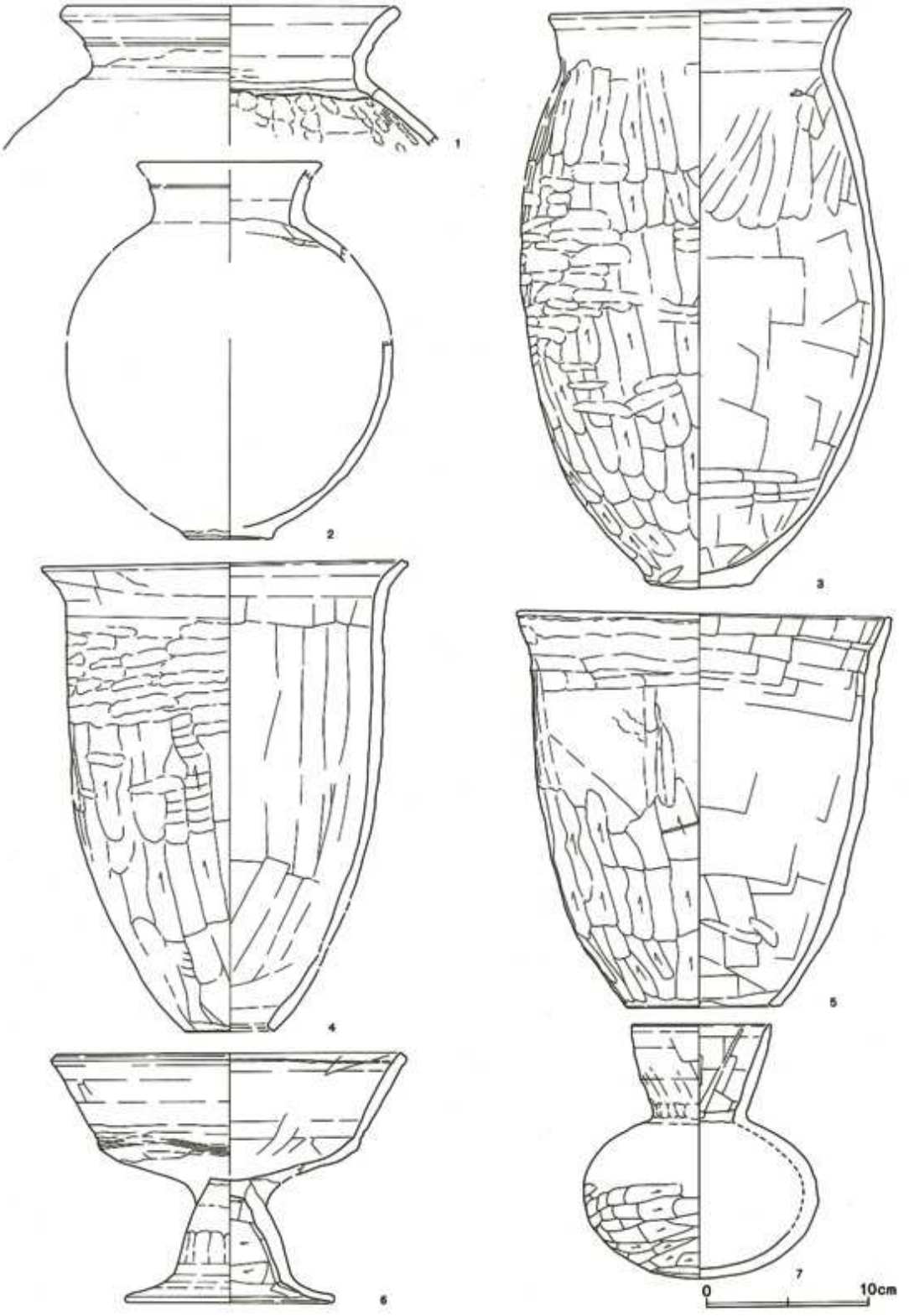
1．10YR3/3　暗褐色土　B・C粒少。L粒多。
2．10YR4/4　褐色土　B・C粒少。L粒多。
3．10YR3/3　暗褐色土　B・C粒．FAブロック多。
4．10YR4/4　褐色土　L．単一的。
5．10YR3/4　暗褐色土　B・C粒を良く含む。
6．10YR3/4　暗褐色土　5に準ずる。灰ブロックを含む。
7．10YR4/4　褐色土　L．B粒微．焼道。
8．10YR3/4　暗褐色土　B・C粒多。焼道。
9．10YR4/3　にぶい黄褐色土　4に近似。

第56号住居跡貯蔵穴土層説明

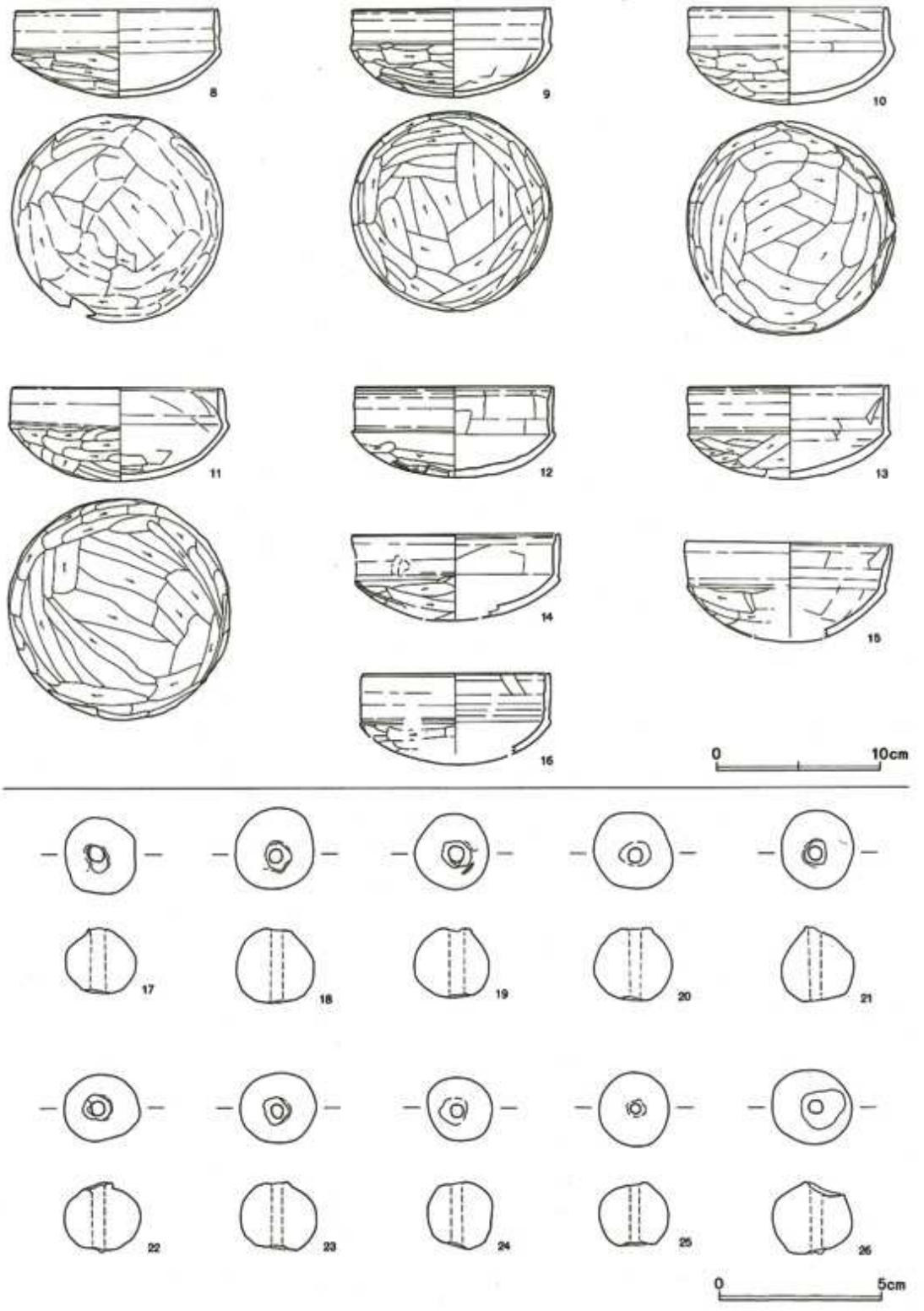
a．10YR3/4　暗褐色土　B・C粒少。L粒多。
b．10YR3/4　暗褐色土　B・C粒多。Gブロック含む。
c．10YR4/4　褐色土　ほとんどL。砂質。

0　2m

第238図　第56号住居跡



第239図　第56号住居跡出土遺物(1)



第240図　第56号住居跡出土遺物(2)

覆土は自然堆積を示し、３層の下部にはブロック状のＦＡが多量に含まれている。壁は遺存状態のよい東半部では垂直であり、床までは約50cmを測れる。床面は軟質で、地震による段差が多く生じている。特に南西壁際では、最大20cmの高低差が観察された。

カマドは北西壁の中央部分に想定されるが、やはり地震のために崩壊したようである。袖らしき地山のブロックや焼土などもあまり存在せず、構造はまったく不明である。５・６層などがカマドの覆土に相当しようか。燃焼部にあたると思われる部分には壺(２)、甕(３)、坩(７)、坏(10・14・15)が密集して出土している。煙道は長さ116cm、幅18cmの溝状で、先端部は深さ10cmほどのピットとなっている。

貯蔵穴は東隅に設けられている。上面は径95cm×74cmほどの楕円形となり、深さは約60cmを測る。断面は漏斗状で、底面は平坦である。覆土の上位からは完形の甑(５)、高坏(６)、坏(９)が検出された。

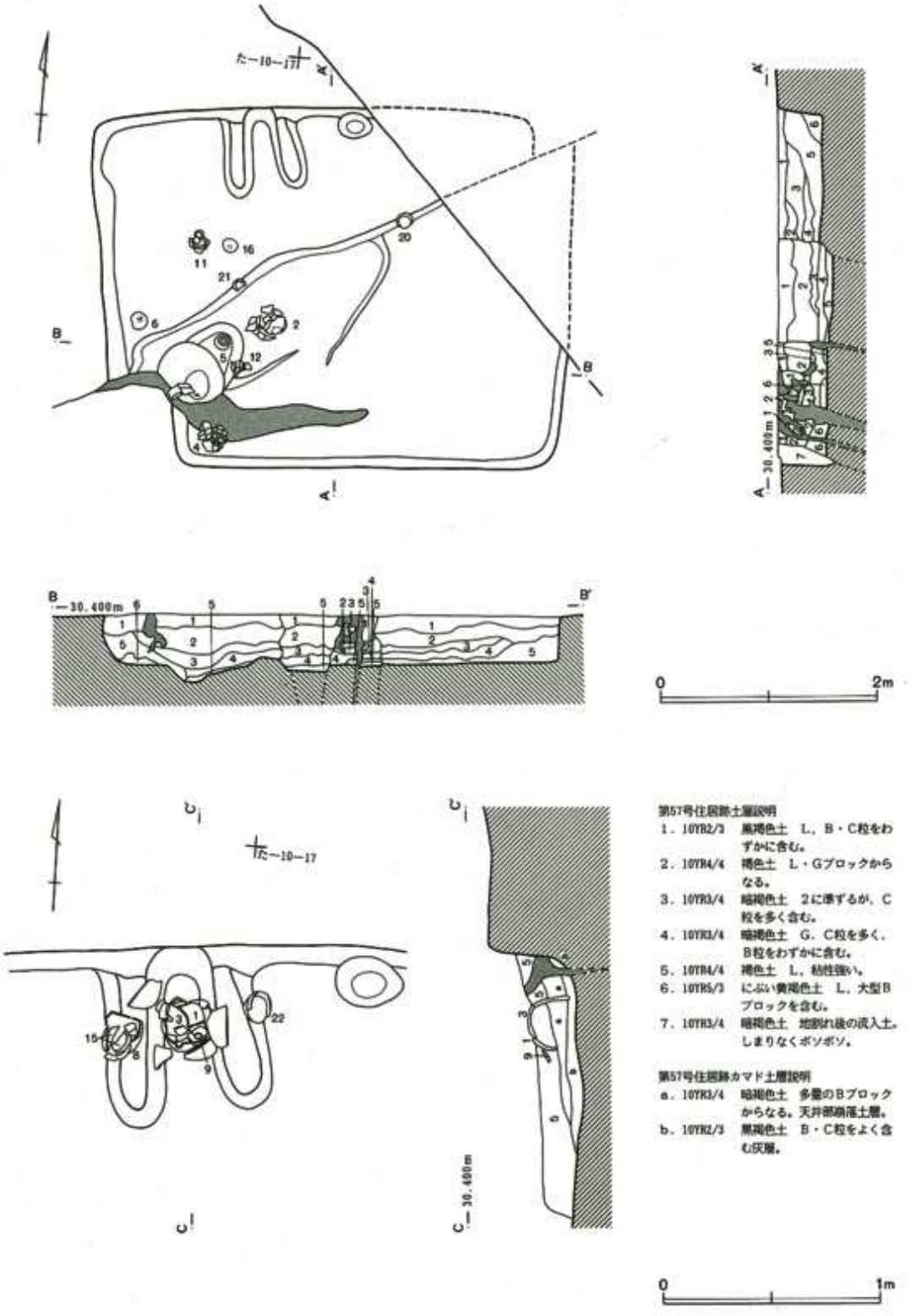
上記以外の遺物はすべて覆土中からの出土である。

第57号住居跡出土遺物(第242・243図)

No.	器種	法量	残存率	胎土	色調	備考
1	甕	19.6 × 31.1 × 7.6	90%	粗(W+片岩)多+R+B′	にぶい橙	
2	〃	17.6 × 29.9 × 6.0	95%	W多+W′+R+B′	橙	外面―ヘラ削り→ヘラナデ 内面―ヘラ削り+ヘラナデ+指ナデ
3	〃	18.4 × 29.5 × 7.0	90%	W+W′+R+B+B′	にぶい黄橙	胴部に歪み
4	〃	17.4 × 28.7 × 6.5	90%	W+W′+R+B′	橙	
5	坩	8.8 × 14.2 × 4.5～5.0	95%	W+W′+R+B′	〃	磨耗著しい
6	甑	16.6 × 9.1 ×底径4.8 孔 2.1	ほぼ完形	W+粗W′多+B′微	〃	口縁歪む
7	〃	18.8 × 27.8 ×孔9.2	70%	W+W′+粗R+B′	明赤褐	
8	小型甕	14.9～15.9× 19.6 × 5.8	95%	W+粗W′多+粗片岩	橙	口縁歪む
9	高坏	― ×(8.1)×裾11.6	脚部のみ完	W+W′多+B′	〃	
10	〃	19.2 × 11.3 ×裾11.6	70%	W′少+粗R多+B′多	〃	
11	〃	― ×(11.2)×裾18.2	60%	W+W′+R多+B′微	〃	
12	脚付瘤	14.0 × 13.0 ×裾10.8	90%	W′+粗R+B′	〃	
13	坏	14.2 × 5.1 × 3.7	90%	粗W微+W′+粗R多+B′	〃	
14	〃	14.0 × 6.0 × ―	90%	W+W′+R少+B′	〃	全体に歪む
15	〃	12.8 × 4.8 × ―	80%	W+W′+粗R+B′多	〃	
16	〃	15.6～16.2× 5.7 × ―	完形	W+W′+粗R+B′	〃	外面―ヘラ削り→ナデ? 磨耗著しい
17	〃	13.0 × 5.1 × ―	60%	W′+R+B′	明赤褐	
18	瘤	14.0 × 5.7 × ―	90%	細(W+W′+B′微)	橙	
19	〃	13.0 × 5.4 × ―	90%	W多+W′+R多+B′	〃	全体に歪む
20	〃	12.9 × 6.3 × ―	90%	W多+W′+R+B′	〃	磨耗著しい
21	〃	13.4 × 7.9 × ―	ほぼ完形	W+W′+粗R少+B′多	〃	
22	坏	14.0 × 6.0 × ―	80%	細(W+W′+R+B′多)	明赤褐	

第57号住居跡(第241図)

た―10―11グリッドを中心に位置する。本跡の場合も地震による被害は甚大で、水平方向では亀裂を境に約60cmもずれてしまっている。調査区外となった北東部を含め、これを復元するならば、



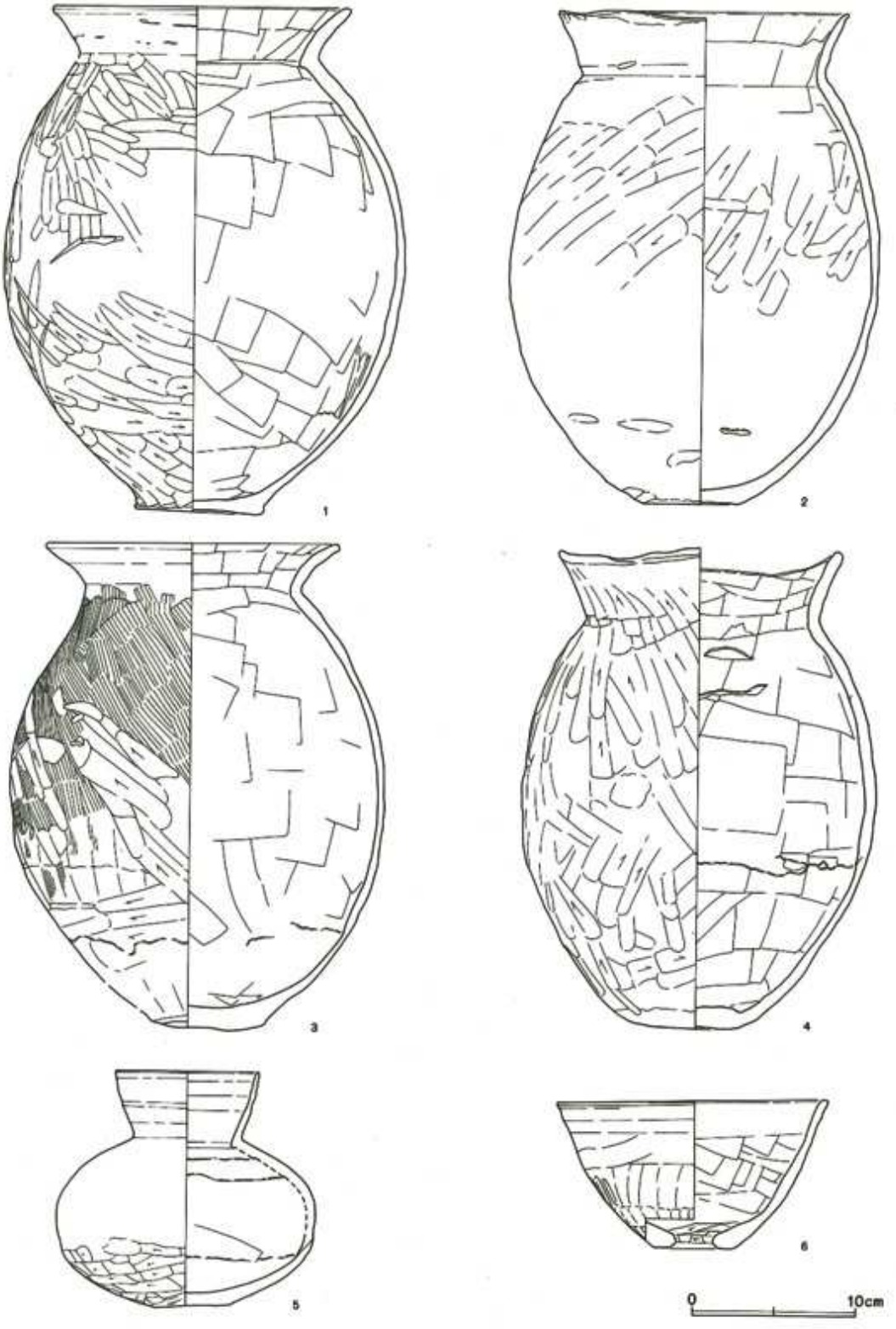
第57号住居跡土層説明

1．10YR2/3　黒褐色土　L，B・C粒をわずかに含む。
2．10YR4/4　褐色土　L・Gブロックからなる。
3．10YR3/4　暗褐色土　2に準ずるが，C粒を多く含む。
4．10YR3/4　暗褐色土　G，C粒を多く，B粒をわずかに含む。
5．10YR4/4　褐色土　L，粘性強い。
6．10YR5/3　にぶい黄褐色土　L，大型Bブロックを含む。
7．10YR3/4　暗褐色土　地割れ後の流入土。しまりなくボソボソ。

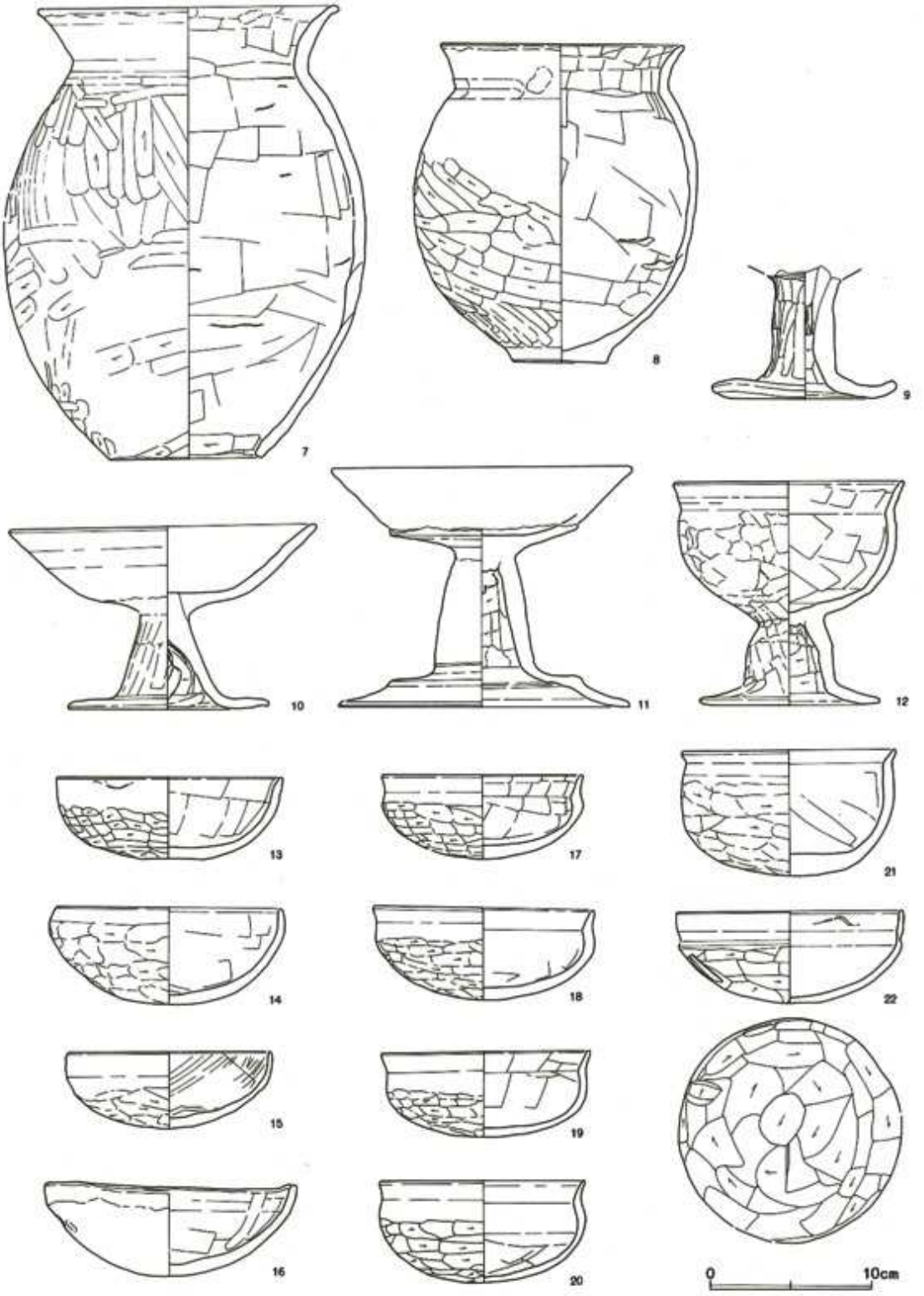
第57号住居跡カマド土層説明

a．10YR3/4　暗褐色土　多量のBブロックからなる。天井部崩落土層。
b．10YR2/3　黒褐色土　B・C粒をよく含む灰層。

第241図　第57号住居跡



第242図　第57号住居跡出土遺物(1)



第243図　第57号住居跡出土遺物(2)

住居跡は軸長約3.28m×3.65mの長方形で、面積は約12.0㎡となる。主軸の方向はおよそN－7°－Wを指す。

地山の粘質土を主体とする覆土は、至る所で地震による断層が観察される。壁は南西部で崩落が起こり、かなり立ち上がりが乱れている。他の部分はほぼ垂直が保たれ、遺構確認面から床までは約42cmの高さを有する。床面は硬質でありながらも、地割れのため凹凸が激しくなっている。

カマドの位置は北壁でも西寄りと思われる。「ハ」字状に削出される袖の高さは、壁部で35cm、焚き口部で15cmを測る。燃焼部は長さ82cm、焚き口部での幅約40cmである。火床面は床面よりも3cmほど深く、厚く灰が堆積している。この中央右側には支脚として高坏の脚部(9)が置かれ、その上に甕(1)が据えられる。さらに、左袖との間にも甕(3)が架けられる。また、右袖の上には坏(22)、左袖の上には小型甕(8)と坏(15)が各々乗っている。

南西隅部には貯蔵穴らしき落ち込みが存在する。しかし、地震による破壊もいちばん激しい部分であり、床が陥没したものである可能性も高い。

遺物の分布は西半部に集中し、床面よりわずかに浮いている。大半は形を保ったままの出土である。

第58号住居跡(第244図)

た－10－6グリッドを中心に位置し、第59号住居跡の西壁を切断している。逆に、東西の隅部は第一次調査時のトレンチにより失っている。全体は4.0m×3.32mの長方形を呈し、面積は約12.3㎡を測る。主軸方向はN－129°－Eとかなり南向きである。

覆土は他住居跡と同様、噴砂によって上端まで切られている。ところが本跡の場合、この事実は極めて重要である。なぜなら、本跡から出土した遺物の年代観が、噴砂をもたらした古代地震の年代推定に大きな影響を及ぼすからである。この点に関しては既に「遺跡群の立地と環境」で述べたが、遺物の年代がほぼ9世紀の第2四半期位置づけられることから、覆土を切る噴砂はそれ以降の地震によるものということになる。

遺構確認面から床までは約22cmを測り、床面は軟質である。中央には地割れに沿い、大きく陥没した部分が見られる。

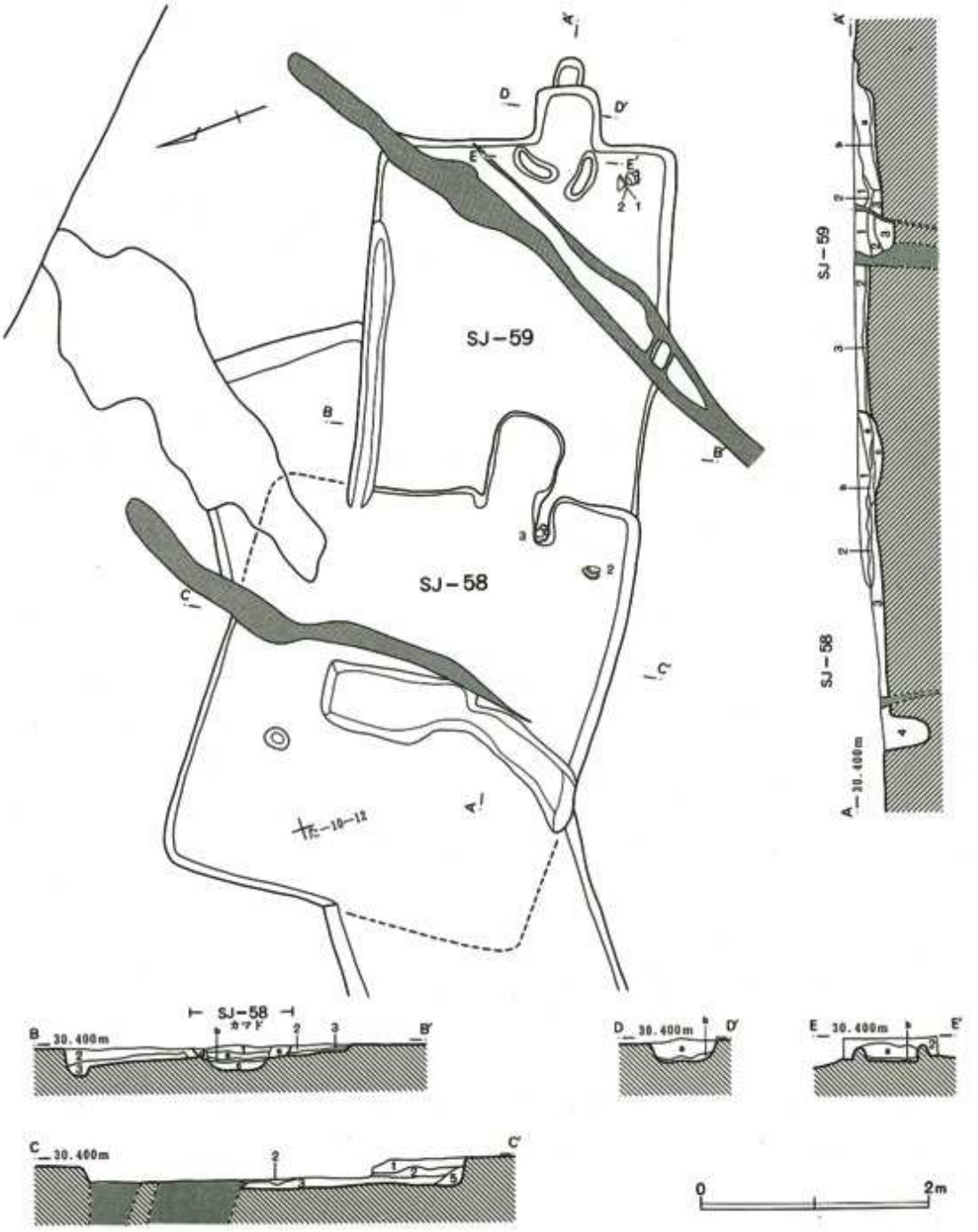
カマドは南東壁の南寄りに設けられている。袖は地山の粘質土で構築され、右袖の上には土師器の坏(3)が乗って(機能時には袖の中)いる。燃焼部は幅約42cm、長さ約102cmで、壁外に大きく突出している。火床面は全体に赤く焼け、床面からは12cmほど低く掘られている。

遺物は少ないものの、南隅部の床面上からは須恵器の坏(2)が出土している。

第59号住居跡(第244図)

た－10－6グリッドを中心に位置する。北西壁を第58号住居跡に切られるため、全体の規模は不明である。現状は軸長(3.5m)×2.62mの長方形であり、主軸方向はおよそN－115°－Eを指す。

軟質な床面は平坦であったと思われるが、地震により大きく西から東へ傾くほか、カマド前面では15cmも陥没している。遺構確認面からの深さは約10cmである。壁溝は北東壁のみに検出された。幅は約20cm、深さは約5cmである。

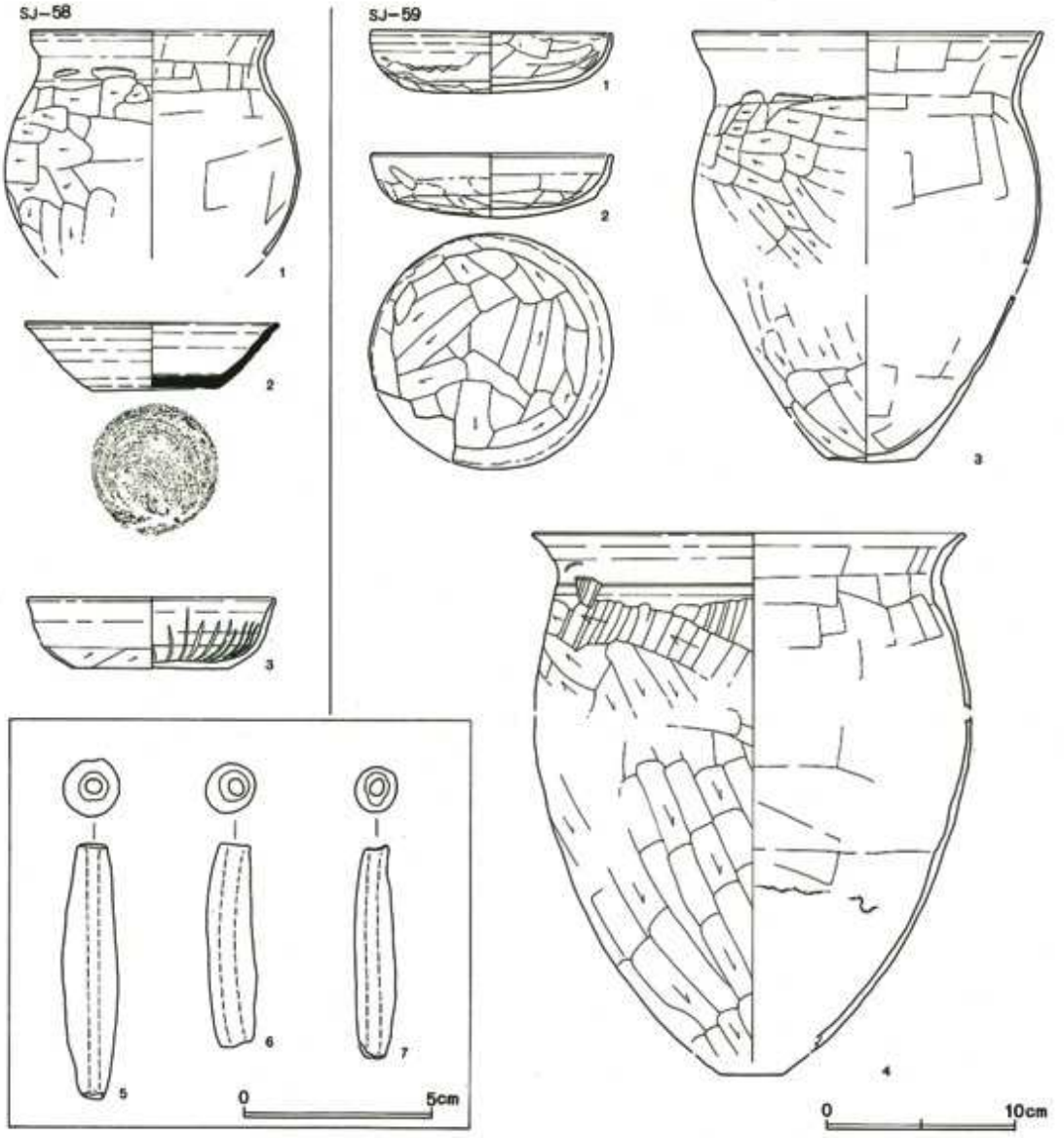


第58号住居跡土層説明
1．10YR5/2　灰黄褐色土　基本は2．Bブロック多。
2．10YR5/2　灰黄褐色土　L．Fe粒を含む。
3．10YR5/1　褐灰色土　Lブロック少。
4．10YR5/2　灰黄褐色土　B粒微。
5．10YR5/1　褐灰色土　Fe・L粒を含む。

第58号住居跡カマド土層説明
a．10YR4/1　褐灰色土　B粒少。
b．10YR4/1　褐灰色土　B粒少。灰層。
c．10YR5/1　褐灰色土　L粒少。
d．10YR5/2　灰黄褐色土　B粒微。
e．10YR6/2　灰黄褐色土　Fe粒多。

第59号住居跡土層説明
1．10YR4/1　褐灰色土　L粒微。
2．10YR5/1　褐灰色土　B粒微。
3．10YR6/2　灰黄褐色土　Fe粒多。
第59号住居跡カマド土層説明
a．10YR6/1　褐灰色土　Bブロック・L粒多。天井・壁部崩落土層。
b．10YR5/1　褐灰色土　B・C粒少。灰層。

第244図　第58・59号住居跡



第245図　第58・59号住居跡出土遺物

第58・59号住居跡出土遺物(第245図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
第58号						
1	甕	(13.0)×(12.1)× —	口縁～胴部破片	W+W′+R+B′	橙	
2	坏(須恵)	13.4 × 3.5 × 6.8	90%	小礫状(W+W′+B′)+R	〃	口縁は赤く焼けている 底部一回転糸切り
3	坏	(13.4)× 4.1 ×(8.4)	50%	W+W′+B′多	にぶい橙	暗文
第59号						
1	坏	12.2～13.2× 3.4 × —	80%	細(W+W′多+R+B′多)	にぶい橙	全体に歪みが強い
2	〃	12.6 × 3.5 × —	90%	細(W+W′+R+B′少)	〃	
3	甕	(18.6)×(22.8)× 4.8	30%	細(W微+W′+B′多)+R	橙	
4	〃	(22.6)× 9.6 × —	35%	W+W′+R+B′少	明赤褐	

カマドは南東壁のやや南寄りに備わる。袖は壁と繋がらず、形もやや特異である。それは土手状に粘質土が貼り付けられたもので、床からの高さは10cmが測れるにすぎない。燃焼部は箱形に壁外へと突出し、先端にはわずかに煙道が残っている。火床面は床面と同一高で、薄く灰層の形成が認められる。

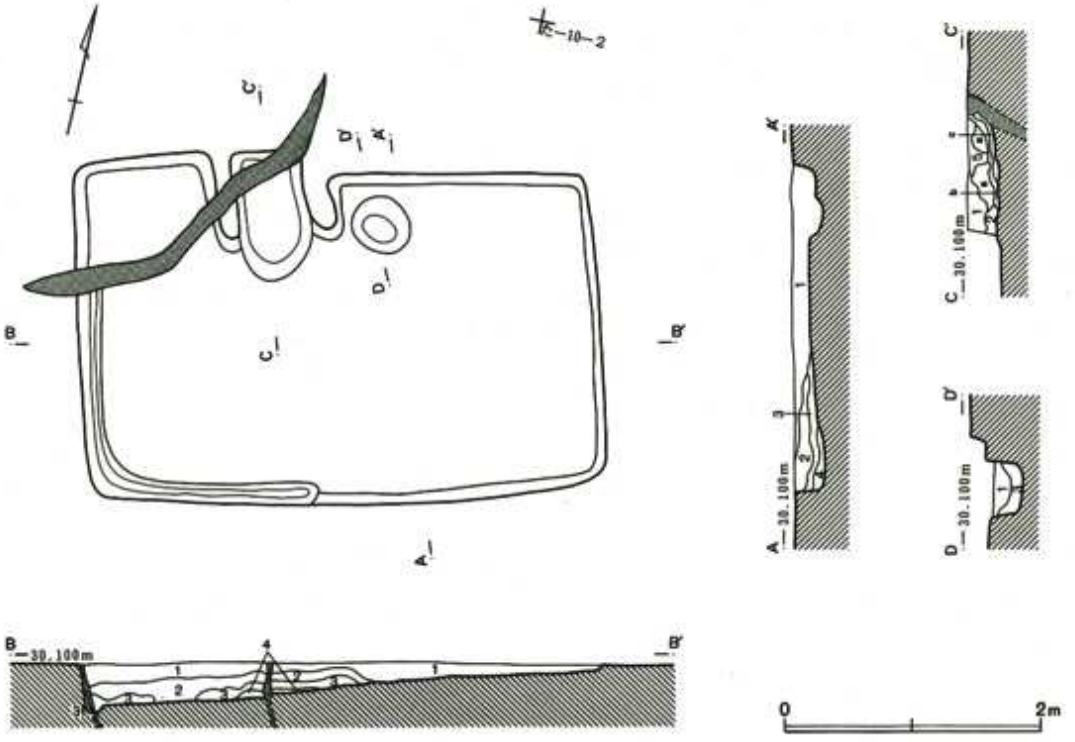
遺物はカマド右脇の床上から坏(1・2)、覆土中から甕(3・4)の破片が出土している。

第60号住居跡(第246図)

そ—10—22グリッドを中心に位置する。平面形はかなり横長の長方形で、軸長2.53m×4.06m、面積約10.3㎡を測る。主軸の方向はおよそN—15°—Wである。

床面は硬化の程度が高いにもかかわらず、担当調査員の不注意により東側を掘り抜いてしまった。床自体は地震による地盤変化のため、東から西へ大きく傾いている。ゆえに、遺構確認面からの深さは東壁部で5cm、西壁部で33cmと差が大きい。壁溝は南西隅部を中心に存在する。幅は約15cm、深さは約5cmである。

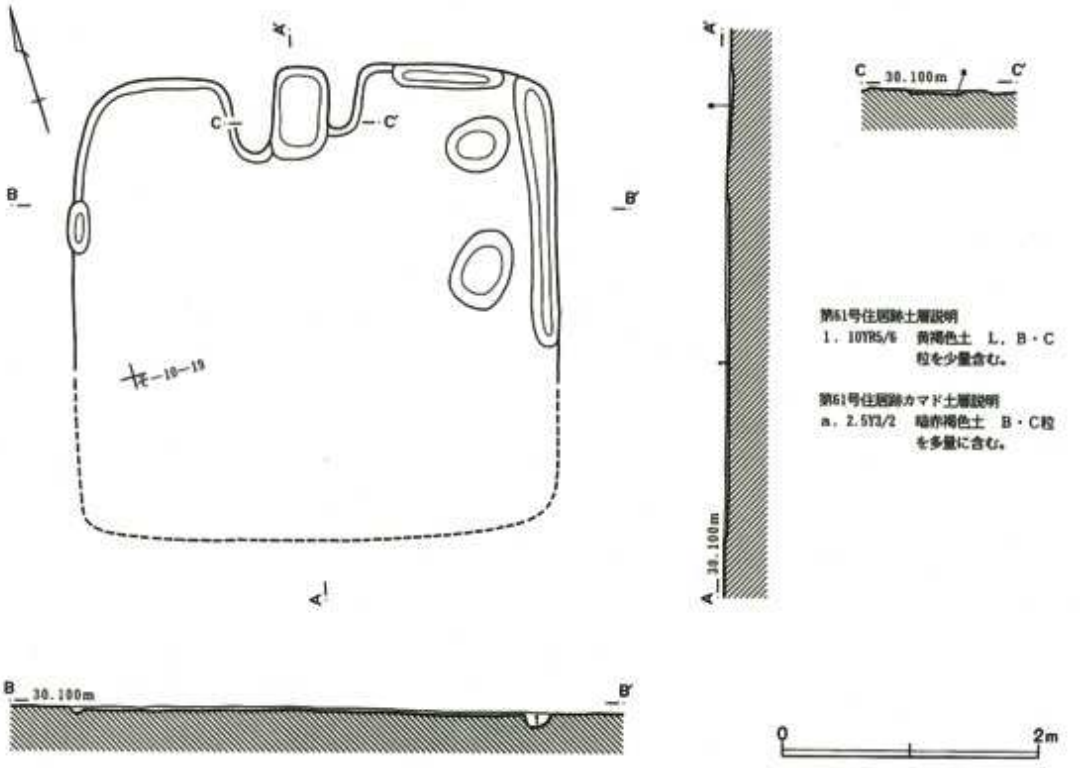
カマドは北壁の中央よりも西側に設けられている。袖は壁より垂直に削り出され、燃焼部を箱形に区画している。袖の長さは約70cmで、焚き口部の幅は約58cmと広い。火床面は床面とほぼ同じ高さである。



第60号住居跡土層説明
1. 10YR3/4　暗褐色土　砂質Lブロック多。
2. 10YR4/4　褐色土　主に砂質Lブロックからなる。B粒含。
3. 10YR3/3　暗褐色土　G, Lブロックを含む。
4. 10YR3/3　暗褐色土　G.
5. 10YR3/4　暗褐色土　1に準ずる。

第60号住居跡カマド土層説明
a. 10YR4/6　褐色土　L, 下層との境はBブロック。天井・壁部崩落土層。
b. 10YR3/1　黒褐色土　灰層。
c. 5YR3/6　Bブロックからなる。

第246図　第60号住居跡



第247図　第61号住居跡

貯蔵穴はカマドの右脇、北壁際に穿たれている。直径約45cmの円形を呈し、深さは25cmほどである。断面形は筒状であ、底面は平坦となっている。

本跡からは甕や暗文の施された坏が少量出土しているが、いずれも小片で図示できなかった。

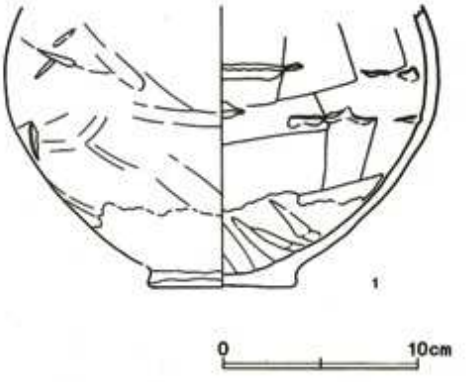
第61号住居跡(第247図)

そ―10―18グリッドを中心に位置する。削平と風化のため大部分は失われている。遺構確認時の所見では、軸長3.66m×3.74mを測る方形の住居跡である。面積は約13.7m²となり、主軸方向はおよそN―15°―Eを指す。

床面は薄皮のようになった覆土を乗せるものの、耕作による攪乱を受けたため残りは悪い。概ね全体は平坦で、カマド前面がやや高まっていたようである。壁溝は幅20cm、深さ15cmほどで、削平部を除いても部分的な存在である。

カマドは北壁中央に付設されている。燃焼部は70cm×42cmほどの長方形を呈し、火床面は平坦となっている。

貯蔵穴は北東隅部に見られ、径51cm×42cm、深さ約54cmを測る。



第248図　第61号住居跡出土遺物

遺物はほとんどなく、床面に潰れた状態で壺(1)が検出されたにすぎない。

第61号住居跡出土遺物(第248図)

No.	器種	法　　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	壺	―　×(14.4)× 7.0	胴部～底部	W+W′多+R+B′	橙	

第62号住居跡(第249図)

そ―10―12グリッドを中心に位置する。第63号住居跡に大きく切られているほか、噴砂や削平のために遺存状態は極めて悪い。確認できたのは、南東の壁部分とカマドの煙道のみである。このため、規模や全体の形状はほとんど不明である。もし煙道の方向と一致するならば、主軸方向はN―38°―Eとなる。

残存する煙道は幅約27cm、長さ約59cmの溝状で、その位置から見れば、カマド本体は北東壁のやや北寄りに付くものと思われる。

貯蔵穴は検出されなかった。第63号住居跡内には小穴が3個見られるが、どちらの住居跡に伴うものかは明らかでない。いずれも浅く、柱穴とは思われない。

遺物はなんら出土していない。

第63号住居跡(第249図)

そ―10―12グリッドを中心に位置する。第62号住居跡を切る長方形の住居跡で、西半部はほとんど削平されている。遺構確認時の所見では、軸長3.35m×4.83mであった。この時の面積は約16.2㎡となる。主軸方向はおよそN―36°―Eを指す。

覆土は単一で、耕作による塡圧や攪乱を受けている。床面は地震による地盤変化のため、西から東へ不自然に傾いている。壁は最も残存する部分でも、高さはわずか10cmである。

カマドは北東壁の南寄りに設けられている。袖は第62号住居跡の床を削り出したものであるが、それより上位の構造については削平のため不明である。燃焼部は80cm×45cmほどの長方形状となり、焼土層や灰層が形成されている。火床面は床より4cm程度深く、概ね平坦である。

遺物は少量の甕破片が出土しているものの、小片のため図示できなかった。

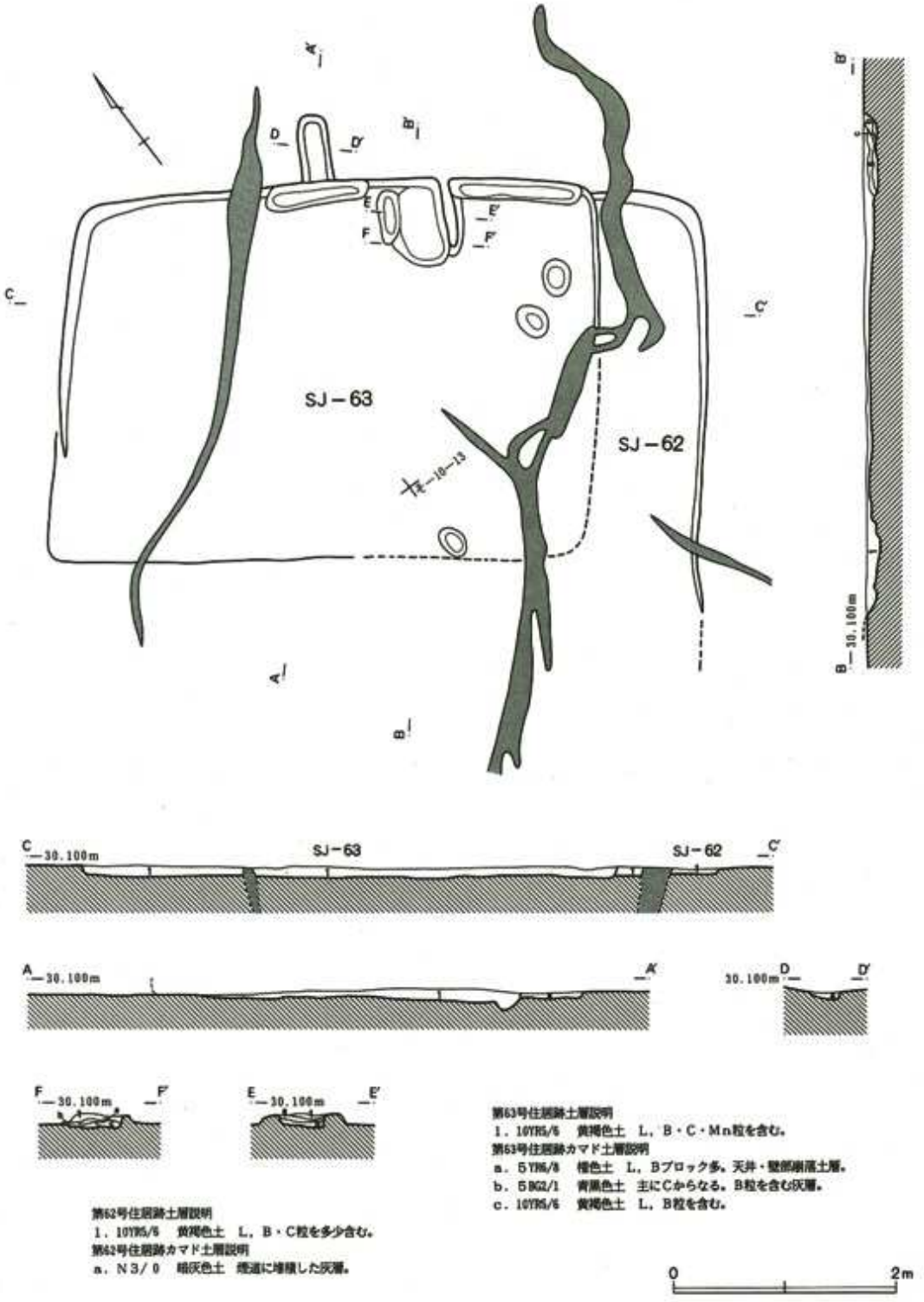
第64号住居跡(第250図)

そ―10―16グリッドを中心に位置する。本跡もまた、噴砂の亀裂によってズタズタに引き裂かれている。平面は軸長3.3m×3.6mの方形を呈し、面積は約11.9㎡を測る。主軸の方向はおよそN―42°―Wを指す。

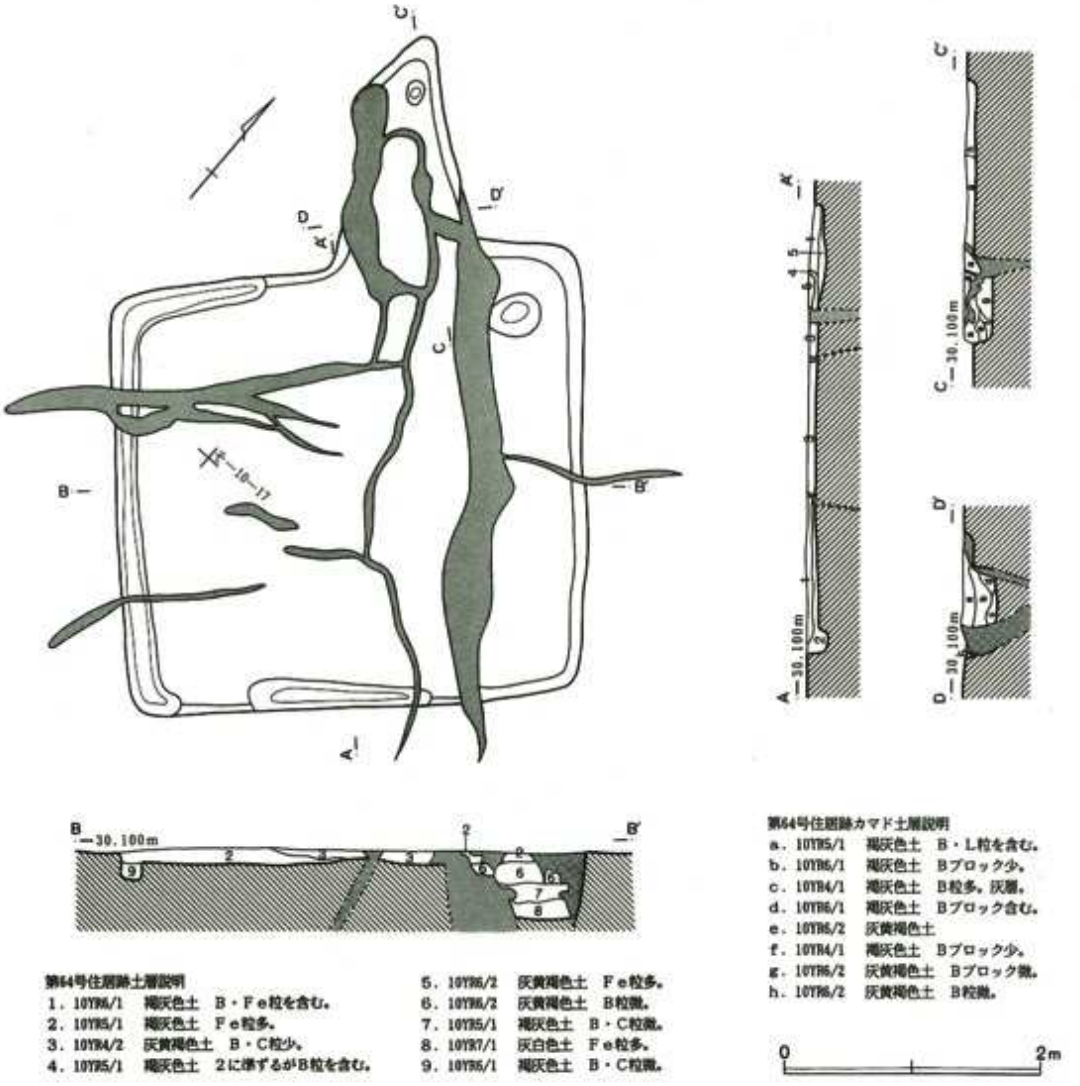
壁はほぼ垂直を保つものの、床は噴砂を境に激しい陥没が起きている。特に、北東壁部は中央部と40cm以上の高低差が生じている。床面の状態も極めて悪く、至る所に凹凸が生じている。壁溝は南西部を中心に検出された。幅は約20cm、深さは約5cmである。

カマドは北西壁のやや北寄りに付く。しかし、この部位での地割れは一段と激しく、カマドについての記述を不可能にさせるほどである。袖はついに確認できず、燃焼部と煙道の区別も付けられない。断面観察により、火床面が床よりも低いことがわずかに想定されるのみである。

遺物は坏や甕の小片が少量出土している。図示はできなかった。



第249図　第62・63号住居跡

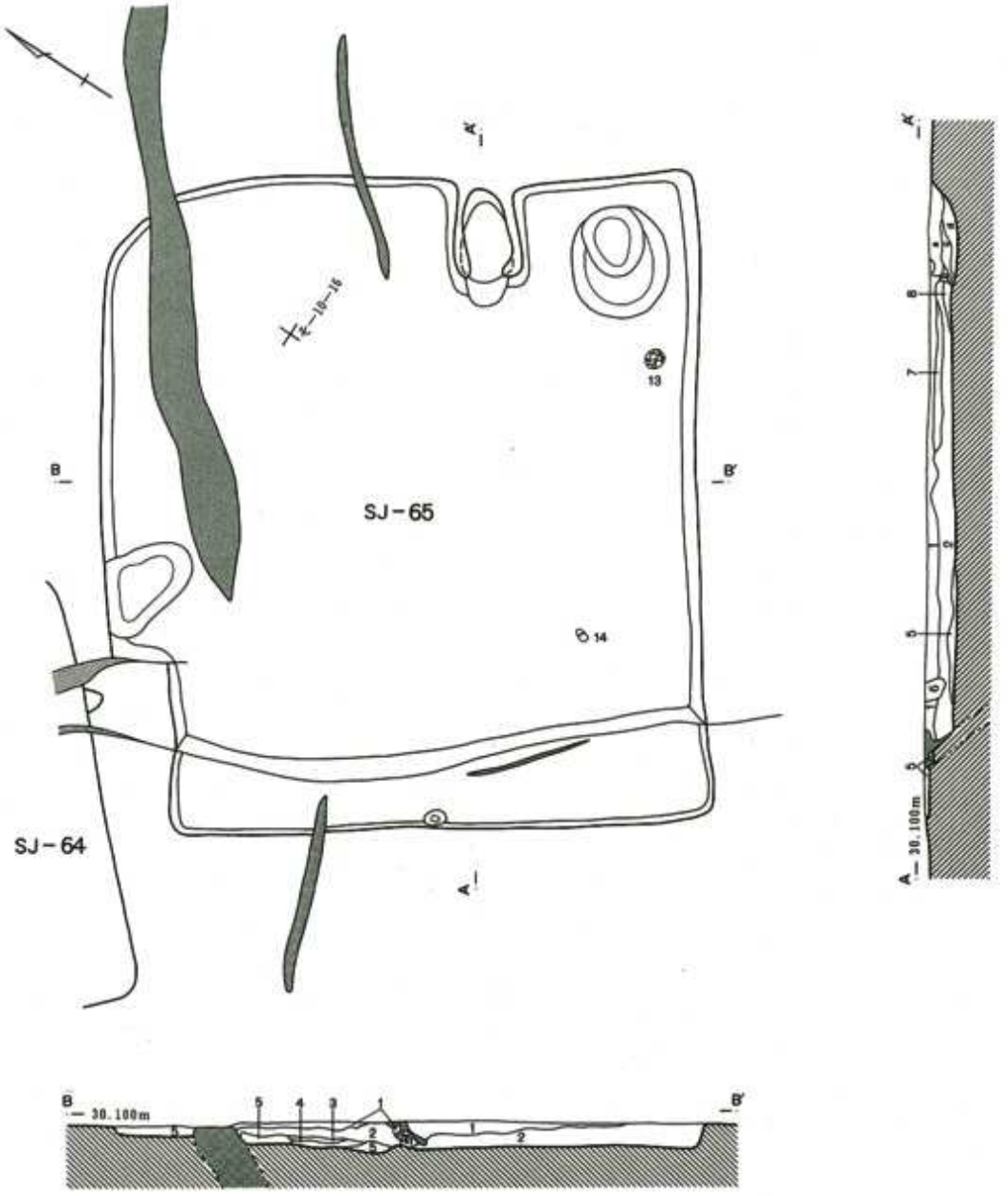


第250図　第64号住居跡

第65号住居跡(第251・252図)

そ―10―11グリッドを中心に位置する。全体は長方形を呈しながらも、南西壁が短いため西隅は鉤の手状となっている。これは同部分が地震により隆起し、その後削平されたためと考えられる。軸長5.31m×4.82m、面積約25.6m²をそれぞれ測る。主軸方向はおよそN―35°―Wである。

覆土は自然堆積を示している。床面上には全面にわたり、焼土(下)と炭化物(上)が分布している。床面自体も焼けていることから推して、本跡は焼失住居であると考えられる。床面は地震のために波打っているほか、南西の壁部分は10cmほどの段差が生じている。遺構確認面からの深さは平均20cm程度である。

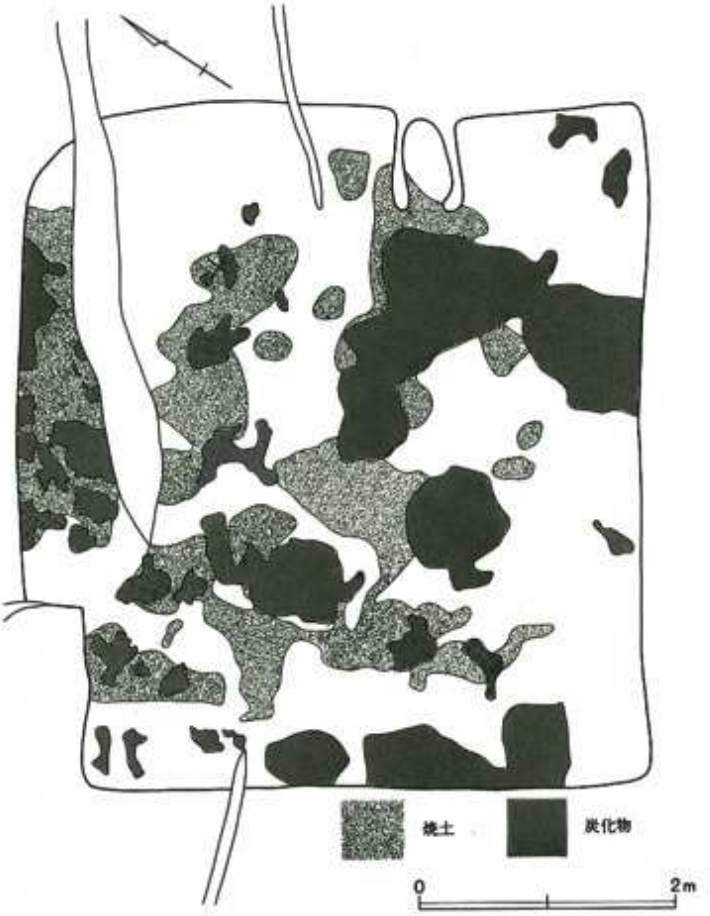


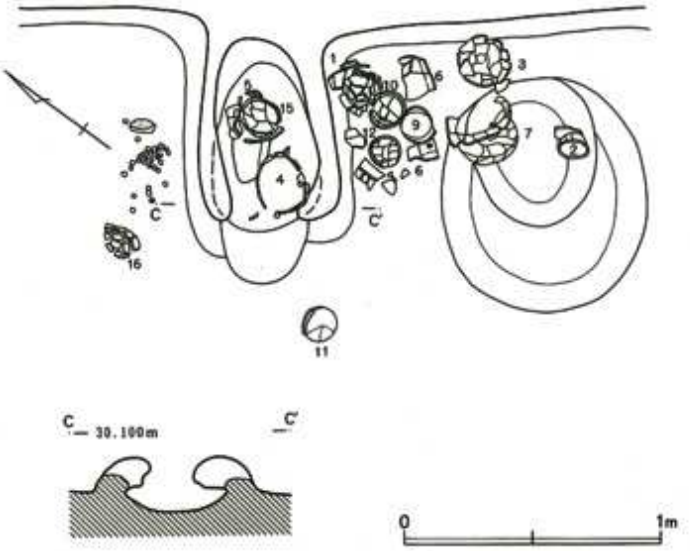
第65号住居跡土層説明
1．10YR5/2　灰黄褐色土　L・Fe粒多。
2．10YR6/1　褐灰色土　L，B・C粒多。
3．10YR6/1　褐灰色土　2に準ずるが色調暗い。
4．10YR6/1　褐灰色土　2に準ずるが色調暗い。
5．10YR5/1　褐灰色土　Bブロック，C粒を良く含む。
6．10YR5/2　灰黄褐色土　白色砂，Fe粒多。
7．10YR6/1　褐灰色土　L，B・C粒微。
8．10YR5/1　褐灰色土　B粒多。

第65号住居跡カマド土層説明
a．5YR5/4　にぶい赤褐色土　G，Bブロックを多量に含む。
b．5YR6/6　橙色土　G，Bブロックを多量に含む。
c．10YR5/1　褐灰色土　Bブロックを多量に含む灰層。
d．5YR6/6　橙色土　G，Bブロックを多量に含む。

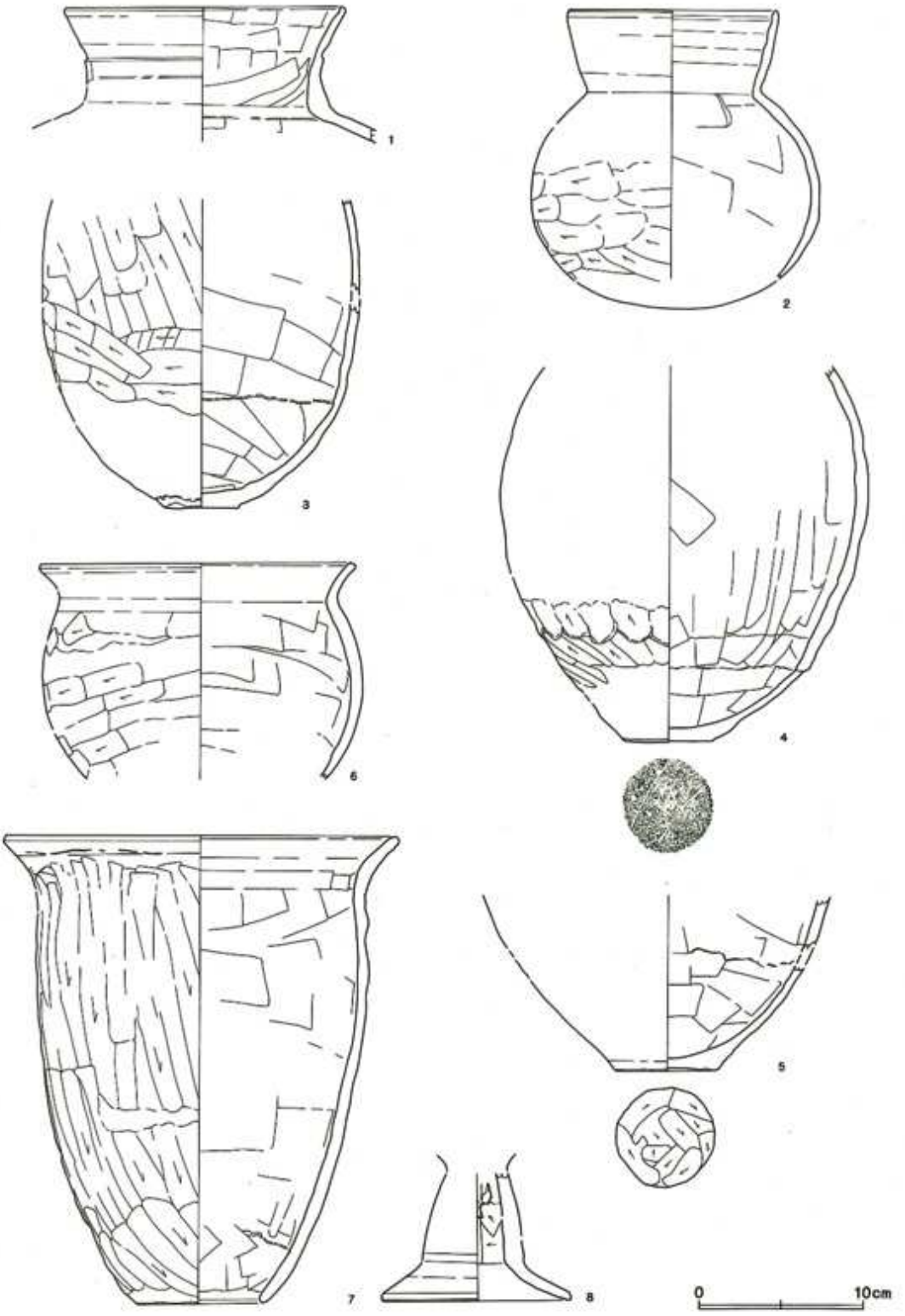
0　2m

第251図　第65号住居跡





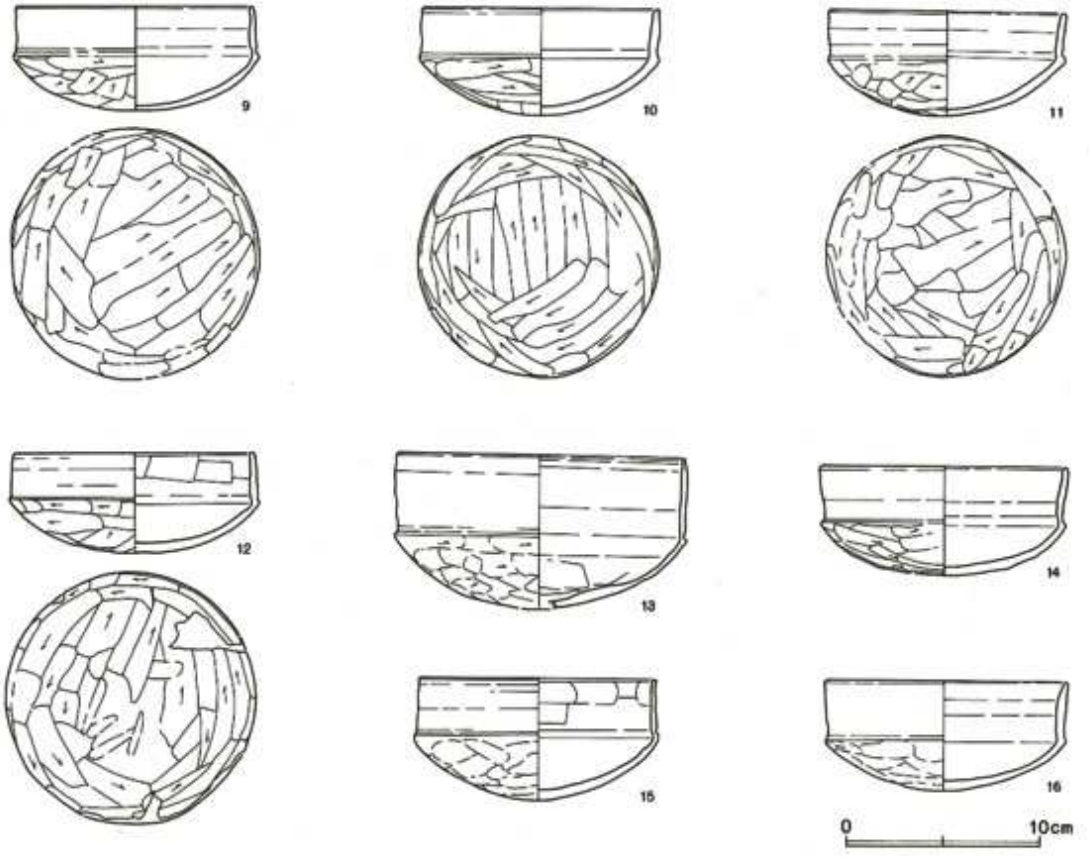
第252図　第65号住居跡　上：炭化物・焼土分布状態
下：遺物出土状態



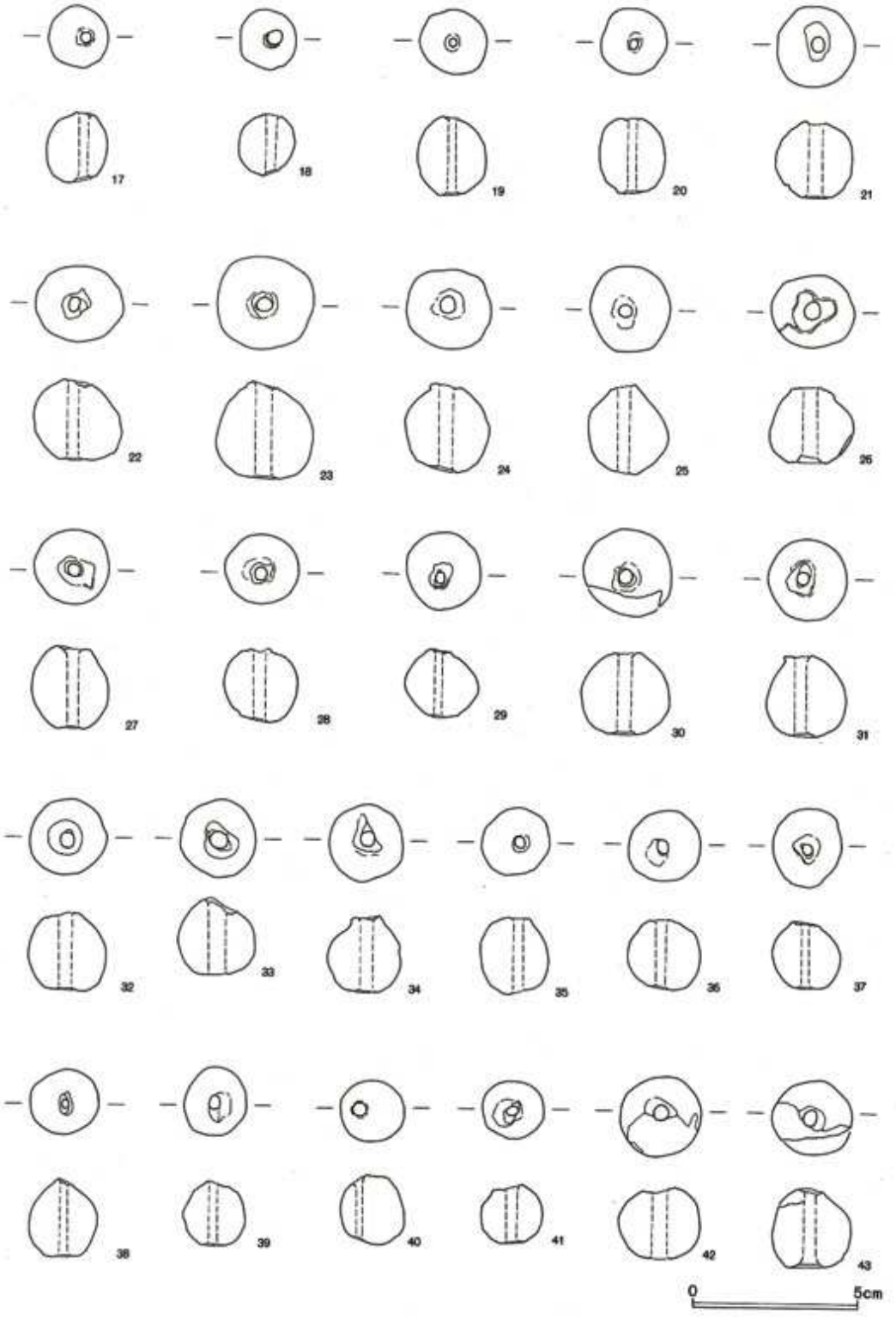
第253図　第65号住居跡出土遺物(1)

カマドは北東壁の中央部よりもやや南に寄っている。袖は高さ6cmほどが「ハ」字状に削出され、その上は両袖とも粘質土が被せられている。粘質土は大部分が焼土化し、燃焼部に向けてかなり傾いている。その状態は崩落したものとは思われず、ほぼ旧状が保たれているようである。この場合の焚き口部を想定すると、開口部は高さ約20cm、幅40cmほどとなる。天井部は削平のため明らかではないものの、遺物の状態から見てもさほど高くはなかったと思われる。燃焼部は90cm×40cmほどの楕円形で、床面よりも約5cm深い。火床面は丸みを有し、壁外への立ち上がりも緩やかである。カマド周辺からの遺物出土は多い。燃焼部内には自然礫の支脚上に甕(5)が乗せられ、その内部には坏(15)が落ち込んでいる。甕の手前、焚き口部にも甕(4)が置かれる。2つの甕は口を焚き口に向け、斜めになっている。また、火床面と左袖の脇からは多量の土玉が検出された。しかし調査途中で盗難に合い、その多くは持ち去られてしまった。図示できたものは半数ほどであろう。さらに、カマドと貯蔵穴の間には壺(1)や甕(3・6)、坏(9・10・12)が床面上より出土している。

貯蔵穴は東の隅部に備わる。北側はカマドによって区画されるため、床面に対する空間的な占有性は高くなっている。上面は径約90cm×80cmの楕円形を呈し、深さ20cmほどで稜が付く。この部分は径約58cm×48cmほどとなり、底面までは約60cmを測る。覆土の最上部からは壺(2)と甑(7)、南側の床面上からは坏(13)が出土している。



第254図　第65号住居跡出土遺物(2)



第255図　第65号住居跡出土遺物(3)

第65号住居跡出土遺物(第253・254図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	壺	17.0 ×(8.6)× —	口縁	W+W′+R+B′	にぶい橙	
2	小型壺	12.8 ×(16.5)× —	60%	W+W′多+R少+B′多	橙	
3	甕	— ×(19.4)× 4.2	胴中～底部	W′+R+粗砂多	〃	
4	〃	— ×(24.0)× 5.2	胴部～底部	R+粗砂多	〃	底部に木葉痕
5	〃	— ×(10.6)× 6.0	胴下半部	粗砂(W+W′+B)多+R	にぶい赤褐	底部、ヘラ削り
6	〃	19.3 ×(13.9)× —	60%	W+W′+粗R	橙	
7	甑	22.8～24.2× 28.3 ×孔7.4	90%	W′+R+B′+粗砂(片岩含)多	にぶい橙	口縁歪む
8	高坏	— ×(7.7)×裾11.4	脚部破片	W+W′+粗R+B′	橙	
9	坏	12.6 × 5.3 × —	90%	W+W′+R+B′多	〃	
10	〃	12.2 × 5.7 × —	ほぼ完形	W+W′多+B′	〃	
11	〃	12.4 × 5.4 × —	〃	W+R多+B′	〃	
12	〃	12.6 × 5.2 × —	80%	W+W′+R+B′多	明赤褐	
13	〃	7.4～7.9×(8.0)× —	ほぼ完形	W+W′+B+B′	橙	全体に歪む
14	〃	(12.8)× 5.6 × —	40%	W微+R+B′	〃	磨耗著しい
15	〃	12.3 × 6.2 × —	90%	W+W′+R+B′	〃	〃
16	〃	12.4 × 5.8 × —	80%	W+粗R+B′	〃	〃

第66号住居跡(第256図)

そ－9－24グリッドを中心に位置する。本跡の南隅は第67号住居跡の北壁を切断している。全体は長方形となるが、やや北東壁が短いため台形状となっている。軸長2.65m×3.02m、面積約8.0m²を測り、主軸方向はおよそN－58°－Wを指す。

壁はほぼ垂直で、床とのなす角度も鋭い。遺構確認面から床までの深さは、最も残りのよい北隅で約36cmである。床面はかなり硬くしまり、中央部がわずかにへこんでいる。壁溝は住居跡の南側に巡り、幅約15cm、深さ約8cmで一定している。

カマドは北西壁の北寄りに設けられている。袖は壁からやや内傾するように削出され、横から見た形はL字形を呈している。燃焼部は約56cm×45cmの方形で、火床面は床よりも3cmほど低くなっている。煙道は幅40cm、長さ140cmほどの深い溝状で、横断面は箱形となる。底面は先端部へ向けて傾斜し、鋭い屈曲をもって垂直に立ち上がっている。

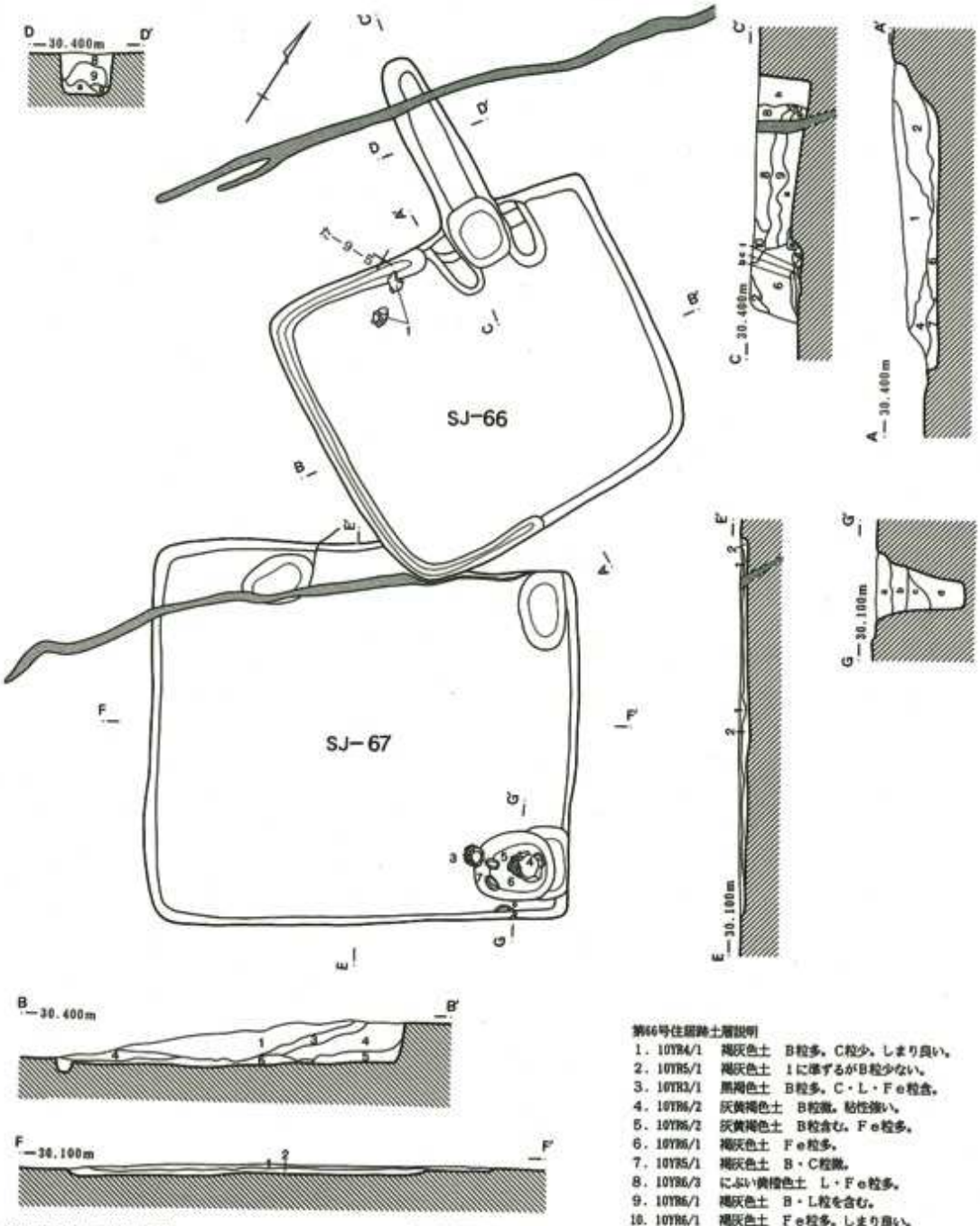
遺物はカマドの燃焼部から甕(2)、左袖の脇から壺(1)が出土している。図示した他の遺物はすべて覆土中からの検出である。

第67号住居跡(第256図)

そ－9－24グリッドを中心に位置する。床面直上まで削平されているほか、北壁の一部は第66号住居跡に切断されている。全体は3.7m×3.3mの長方形を呈し、面積約12.2m²を測る。長軸の方向はN－58°－Eを指す。

覆土は耕作機械による塡圧を受け、極度に硬化している。床までは4cm弱しかなく、塡圧の影響は床面にも及んでいる。このため床は覆土と同質化し、その境界は不明瞭となっている。

カマドもやはり削平と塡圧のため、所在を明らかとすることはできなかった。強いてカマドの位



第66号住居跡土層説明
1. 10YR4/1 褐灰色土 B粒多。C粒少。しまり良い。
2. 10YR5/1 褐灰色土 1に準ずるがB粒少ない。
3. 10YR3/1 黒褐色土 B粒多。C・L・Fe粒含。
4. 10YR6/2 灰黄褐色土 B粒微。粘性強い。
5. 10YR6/2 灰黄褐色土 B粒含む。Fe粒多。
6. 10YR6/1 褐灰色土 Fe粒多。
7. 10YR5/1 褐灰色土 B・C粒微。
8. 10YR6/3 にぶい黄橙色土 L・Fe粒多。
9. 10YR6/1 褐灰色土 B・L粒を含む。
10. 10YR6/1 褐灰色土 Fe粒多。しまり良い。

第66号住居跡カマド土層説明
a. 10YR6/2 灰黄褐色土 L・Bブロック多。煙道天井部崩落土層。
b. 10YR6/2 灰黄褐色土 Lブロック・B粒多。天井部崩落土層。
c. 10YR5/1 褐灰色土 B・L粒微。
d. 10YR6/2 灰黄褐色土 B・C・L粒を含む。
e. 10YR6/1 褐灰色土 Bブロック・L粒を含む。
f. 10YR6/3 にぶい黄橙色土 L粒多。
g. 10YR6/1 褐灰色土 B・L粒多。
h. 10YR6/1 褐灰色土 B・L粒を含む。粘性強い。

第67号住居跡土層説明
1. 10YR6/1 褐灰色土 Fe粒多。しまり良い。
2. 10YR6/2 灰黄褐色土 Fe粒多。粘性強い。

第67号住居跡貯蔵穴土層説明
a. 10YR6/2 灰黄褐色土 B・C・Fe粒多。
b. 10YR5/2 灰黄褐色土 B粒多。しまり良い。
c. 10YR4/2 灰黄褐色土 B粒少。粘性強い。
d. 10YR5/2 灰黄褐色土 cに準ずる。

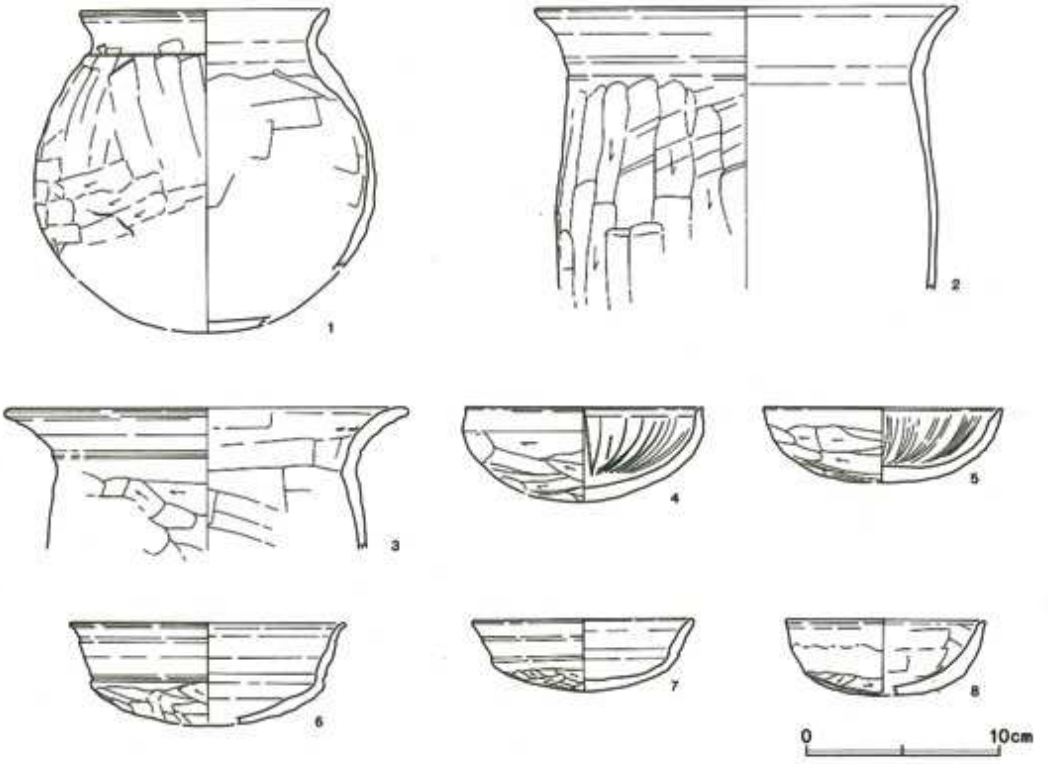
0 2m

第256図 第66・67号住居跡

置を推定するならば、焼土がいくぶん多く見られた北東壁の中央部、ということになろう。

貯蔵穴は東の隅部に備えられている。上面は楕円形、内部は70cm×58cmほどの長方形となっている。床からの深さは約75cmである。床から肩部にかけて小型壺(3)と甑(4)、底面上に坏2個体(5・7)が検出されている。

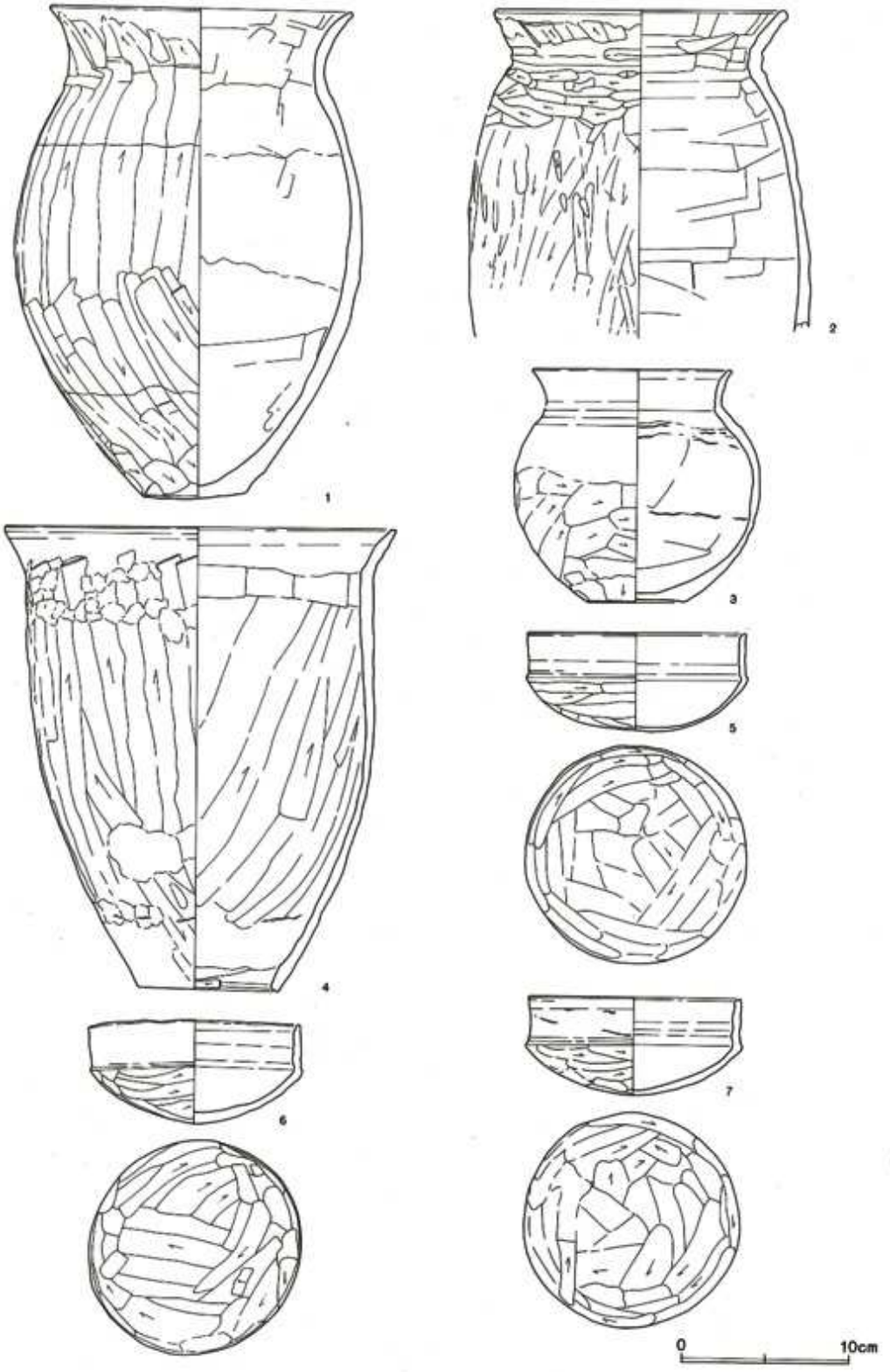
上記以外に図示したものは、すべて床面直上からの出土である。



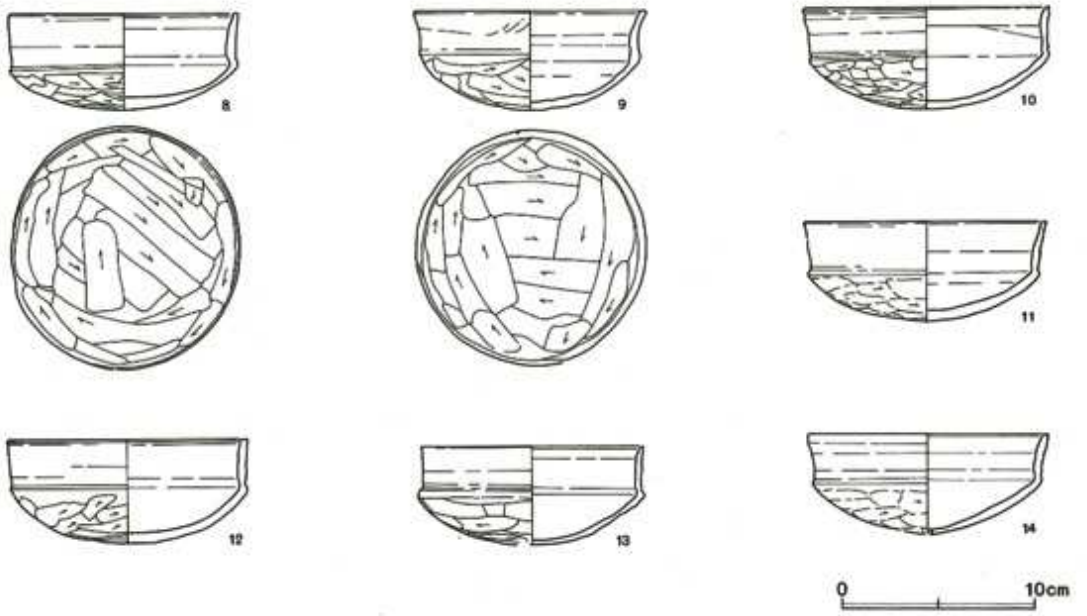
第257図　第66号住居跡出土遺物

第66号住居跡出土遺物(第257図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	壺	(13.6)×(17.0)×—	60%	W+W′多+R+B′	橙	丸底
2	甕	(22.0)×(14.7)×—	口縁破片	W+W′	〃	
3	〃	(21.0)×(7.9)×—	〃	粗(W+B)+W′+R+B′	にぶい橙	
4	坏	(12.6)× 4.9 ×—	30%	W+R+B′	〃	暗文
5	〃	(12.4)× 3.9 ×—	30%	W+W′+B′	橙	〃
6	〃	(14.4)×(5.2)×—	30%	W+W′多+B′	にぶい褐	
7	坏	(11.6)× 3.8 ×—	50%	W+W′微+B+B′多	明赤褐	
8	〃	(10.4)× 3.9 ×—	50%	W+W′+R+B′多	橙	



第258図　第67号住居跡出土遺物(1)



第259図　第67号住居跡出土遺物(2)

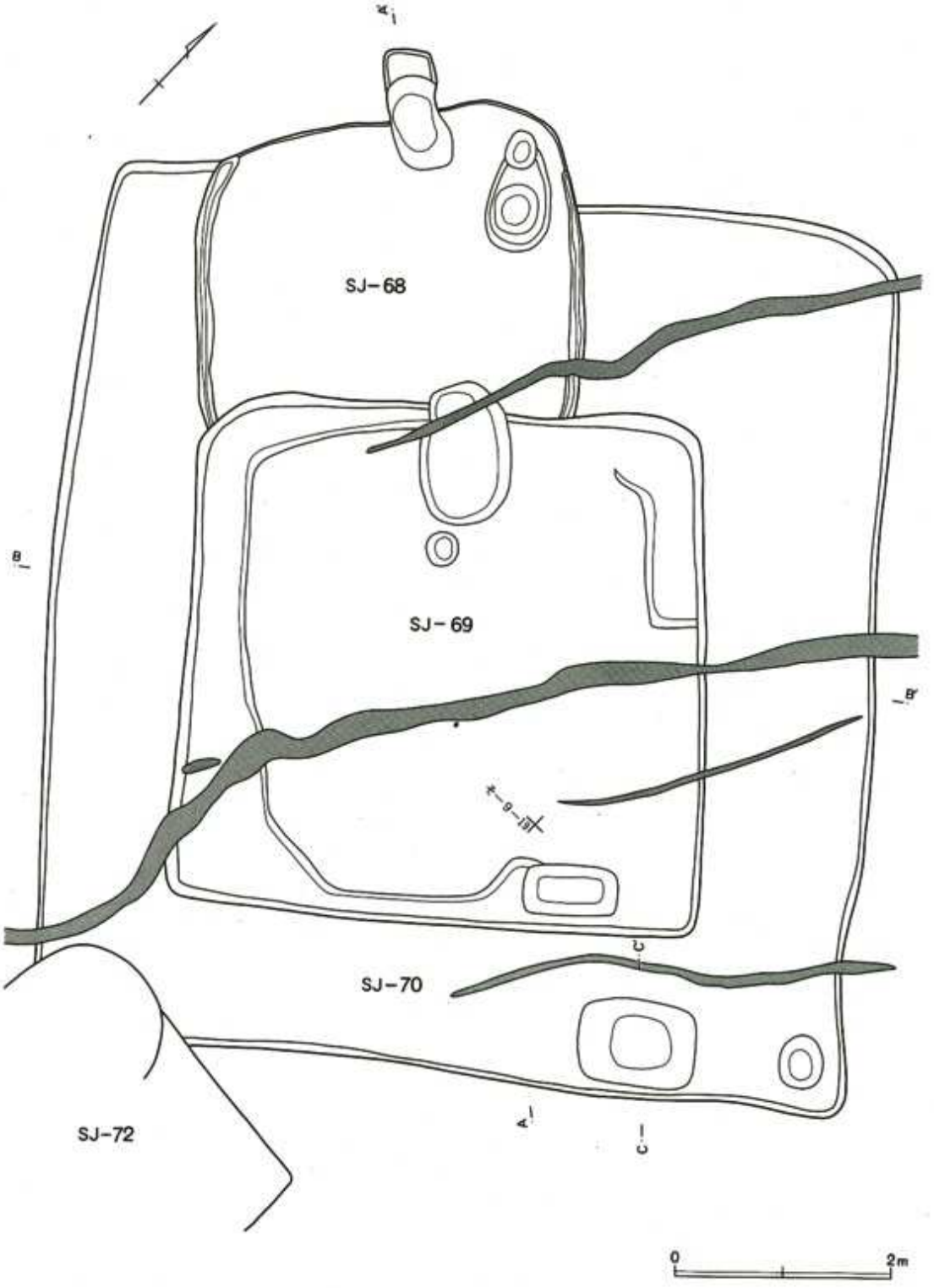
第67号住居跡出土遺物(第258・259図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	甕	18.0 × 28.8 × 6.3	70%	W+W′+砂B多+B′	明赤褐	
2	〃	17.4 ×(19.3)× —	口縁～胴中部	砂W多+(W′+B′)微+粗B	橙	口縁歪む
3	小型壺	(11.8)× 13.8 × 5.8	90%	微細(W+W′+B′)	明赤褐	
4	甑	23.3 × 27.4 ×孔8.4	70%	W+W′+R+B′	橙	
5	坏	12.8 × 5.8 × —	完形	W多+W′少+R+B′	〃	
6	〃	12.0～13.0× 6.1 × —	〃	W+W′+R+B′微	〃	口縁の歪みが強い
7	〃	12.6 × 5.8 × —	〃	W+W′+R+B′	〃	
8	〃	12.2 × 5.0 × —	90%	W+W′+R+B′	〃	口縁歪む
9	〃	12.1 × 5.0 × —	90%	W+W′+R+B′	〃	
10	〃	12.8 × 5.2 × —	ほぼ完形	W+W′+粗R+B′	明赤褐	外面―ヘラ削り→ナデ
11	〃	(12.8)× 5.2 × —	60%	W+W′+粗R多+B′	橙	
12	〃	12.6 × 5.5 × —	80%	W+W′+R+B′	明赤褐	内面―煤け
13	〃	11.8 × 5.0 × —	80%	W+W′+B′多	橙	
14	〃	12.2 × 5.2 × —	80%	W+W′+粗R多+B′	〃	磨耗著しい

第68号住居跡(第260～262図)

そ―9―19グリッドを中心に位置する。第69・70号住居跡を切り込んで設営される。平面は隅丸の長方形を呈し、規模は軸長3.18m×3.57m、面積約11.4㎡を各々測る。主軸方向はおよそN―46°―Wを指す。

壁はほぼ垂直を保っており、床までは約12cmである。壁溝は北西壁を除き、幅約15cm、深さ約10cmで3壁を巡る。南隅部の壁溝中からは、石製模造品の勾玉(5)が出土している。床面はさほど硬



第260図　第68～70号住居跡(1)

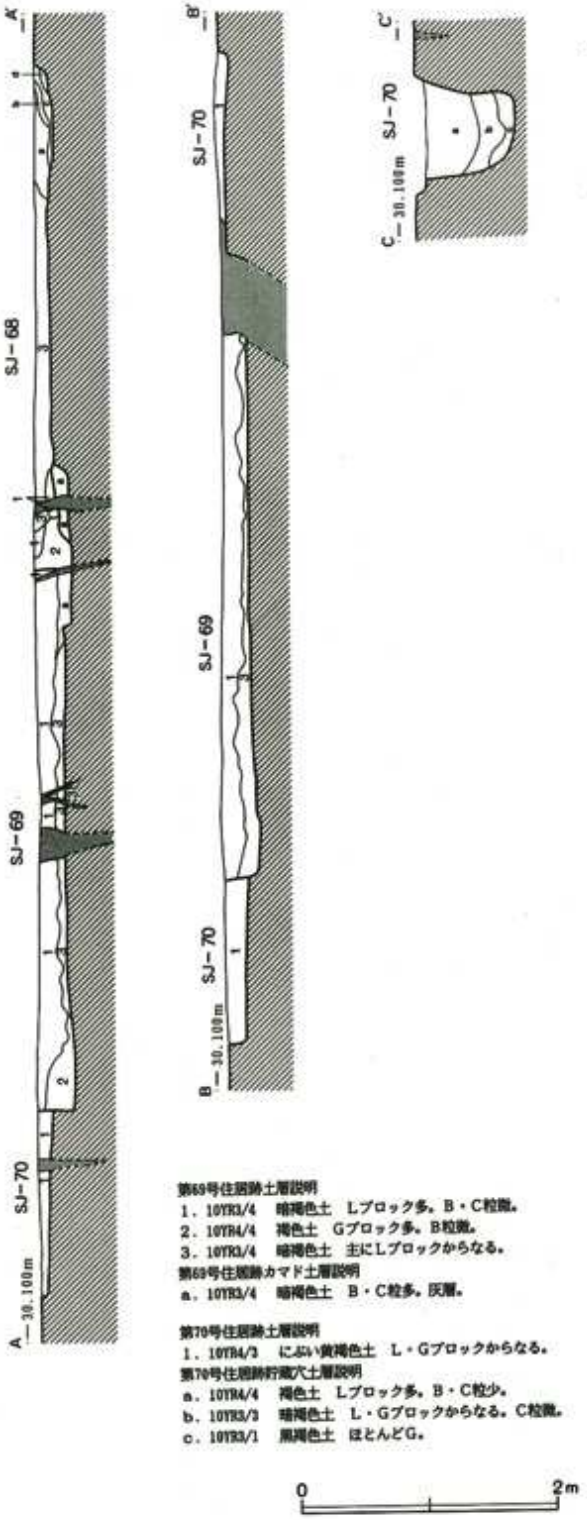
化せず、北から南へ緩やかに傾斜している。なお、第69号住居跡覆土上となる部分には、貼り床などは施されていない。

カマドは北西壁の中央からやや北へ寄る。袖は検出されず、右側の壁際には倒立させた甕(1)が置かれていた。粘土などは観察されなかったが、造り付けられた袖の補強材と思われる。燃焼部は87cm×44cmの長方形で、半分ほどは壁外へ突出している。先端部は一段高く、方形の張り出しとなっている。火床面は床よりも4cmほど深く、丸みを有している。燃焼部より甕の口縁(2)が出土している。

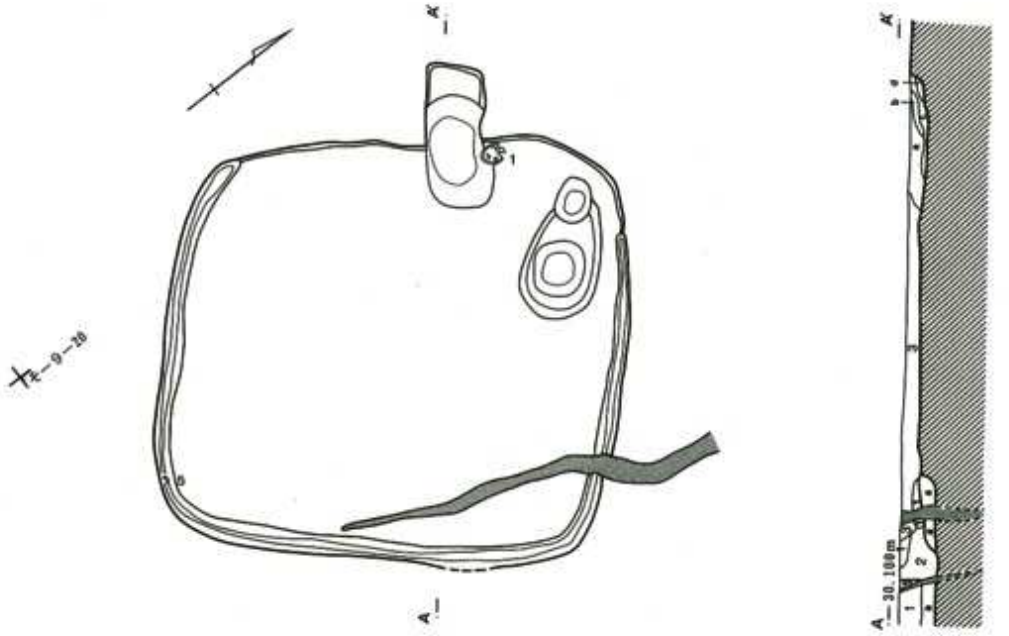
貯蔵穴は北隅に設けられている。上面は鶏卵状を呈し、内面に直径約44cm、深さ約53cmの掘り込みが存在する。鶏卵状の部分は第70号住居跡カマドの燃焼部であるかもしれない。

第69号住居跡(第260・261図)

そ—9—19グリッドを中心に位置する。北西部には本跡の埋没後、壁と覆土を掘り込んで第68号住居跡が構築されている。本跡自身は第70号住居跡の中央に設けられているが、その重複は以下の理由から見て、意識的になされたものと考えられる。まず第一に、方向の一致と入れ籠状に重複された様子。第二には、第70号住居跡の覆土が地山からなる単一土層で、人為的に埋め戻されたと判断される点である。これより導き出される両者の関係は、住居の縮小という形で捉えられる。出土遺物も時期的な差はほとんどなく、これを大きく否定するものではない。このように、両住居跡は1軒として扱うべきであるが、ここでは便宜上、個別に述べることとした。



第261図 第68～70号住居跡(2)

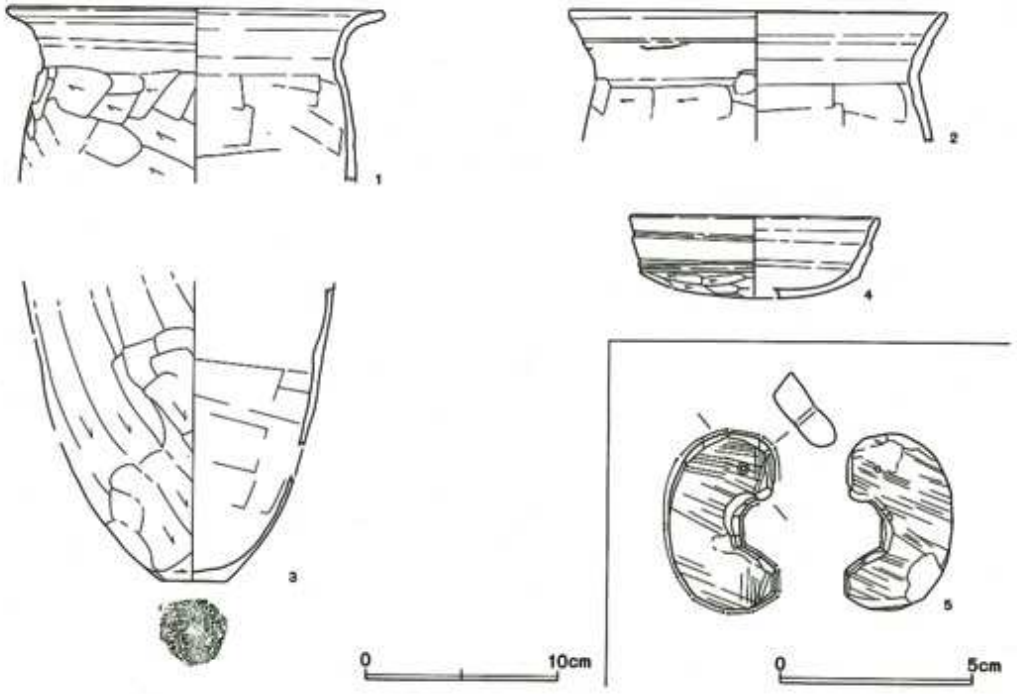


第68号住居跡カマド土層説明
a．10YR3/2　黒褐色土　B・C粒多。
b．10YR4/6　暗褐色土　Bブロックからなる。天井・壁部崩落土層。
c．10YR3/1　黒褐色土　B・C粒多。炭層。
d．10YR3/4　暗褐色土　Lブロックからなる。壁・床の溶軟化層。

第68号住居跡土層説明
1．10YR3/2　黒褐色土　B・C粒多。
2．10YR3/4　暗褐色土　L・Gブロックからなる。
3．10YR3/4　暗褐色土　L・Gブロックからなる。B・C粒微。

0　2m

第262図　第68号住居跡



第263図　第68号住居跡出土遺物

第69号住居跡は軸長4.75m×4.78mの方形を呈し、面積は約22.7㎡を測る。主軸方向はおよそN—42°—Wを指す。

壁の立ち上がりはほぼ垂直で、遺構確認面から床までは約20cm、第70号住居跡の床からは約8cmが掘り下げられている。床面は軟質であり、中央部がわずかに高まっている。壁溝は明らかにそれと確認されたわけではなく、南部を中心に幅25cm～50cm、深さ15cm～20cmにわたり、壁際の床面が落ち込むのが観察されたにすぎない。

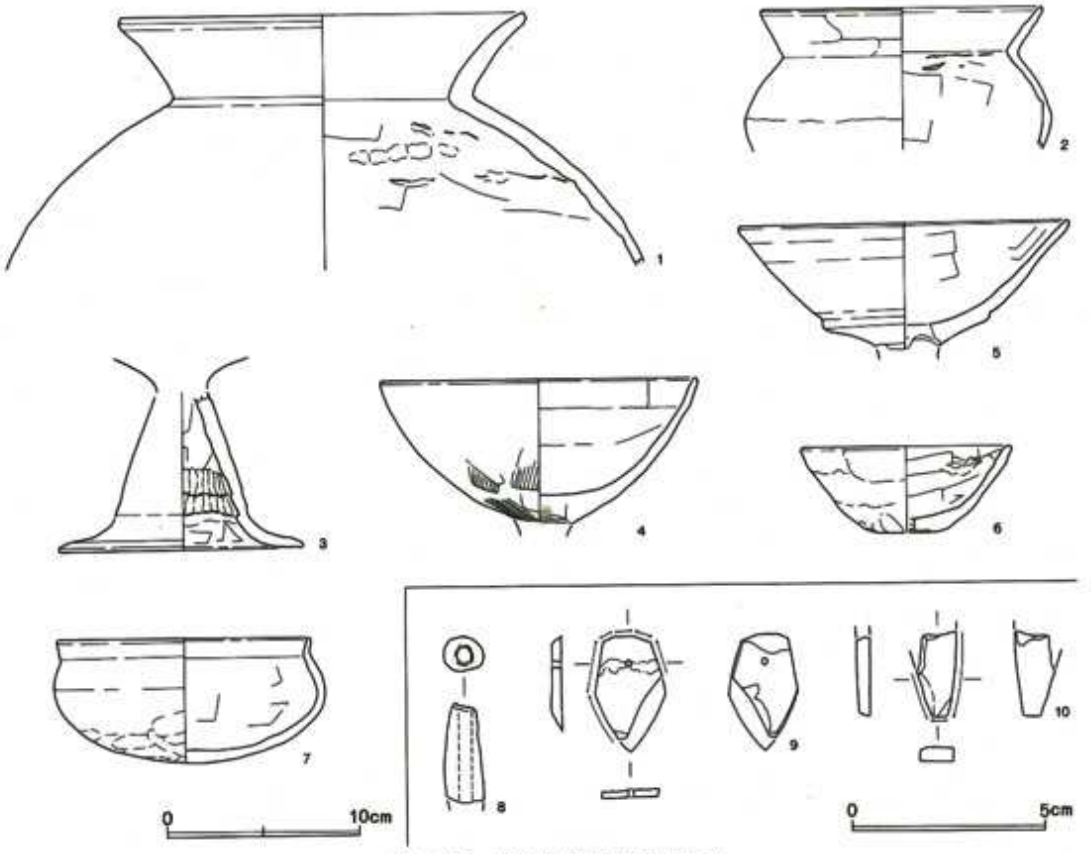
カマドは北西壁の中央部に設けられている。燃焼部は径約110cm×46cmの楕円形を呈し、一部は壁外へ突出している。火床面は床より5cmほど低く、概ね平坦である。袖は検出されなかった。

貯蔵穴は東隅部からやや南に寄っている。上面は86cm×46cmの長方形で、床面からの深さは約45cmを測る。横断面はきれいな箱形となり、底面は平坦である。

遺物はいずれも覆土中からの出土である。このなかには剣形の滑石製模造品が含まれる。

第68号住居跡出土遺物(第263図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	甕	19.2 ×(9.0)× —	口縁～胴上半部	W多+W′+B′	橙	
2	〃	19.8 ×(7.0)× —	口縁	粗W+B多+B′	〃	砂粒粗く磨耗著しい
3	〃	— ×(15.4)× 3.4	胴部～底部	W+B′多	にぶい黄橙	底部に木葉痕
4	坏	(13.2)×(4.4)× —	60%	W+W′+B′	灰黄褐	



第264図　第69号住居跡出土遺物

第69号住居跡出土遺物(第264図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	壺	(21.2)×(13.1)× —	口縁～肩部破片	W+W′+粗R多+B′	橙	
2	小型壺	(14.7)×(7.4)× —	〃	W+W′+R+B	明赤褐	
3	高坏	— ×(8.2)×裾(13.0)	脚部60%	W+W′+R+B+B′	橙	磨耗著しい
4	〃	16.8 ×(7.3)× —	坏部80%	W+W′+R+B	明赤褐	
5	〃	17.2 ×(6.8)× —	〃 70%	W+W′+粗R	橙	
6	坏	(11.0)× 4.2 ×(3.0)	30%	W+R+B′多	にぶい橙	外面ータテヘラ削り→ヨコナデ
7	甕	13.0 × 6.4 × —	80%	W+W′+R	明赤褐	剥落、磨耗著しく口縁歪む

第70号住居跡(第260・261図)

そ—9—19グリッドを中心に位置する。第69号住居跡構築のため埋め戻されているほか、第68号住居跡に北西壁を、第71・72号住居跡に南東の壁をそれぞれ切られている。軸長8.05m×7.64m、面積約61.5m²を測り、柳町遺跡では最大規模の住居跡となっている。建て替え後の第69号住居跡と比較すると、面積にして2.7倍ほどである。

覆土は埋め戻された地山の粘質土からなり、耕作による壙圧を差し引いても、しまりは第68号住居跡の覆土に比べてかなり強い。床面は覆土と同質化が進行し、特に硬化したような様子は窺えなかった。

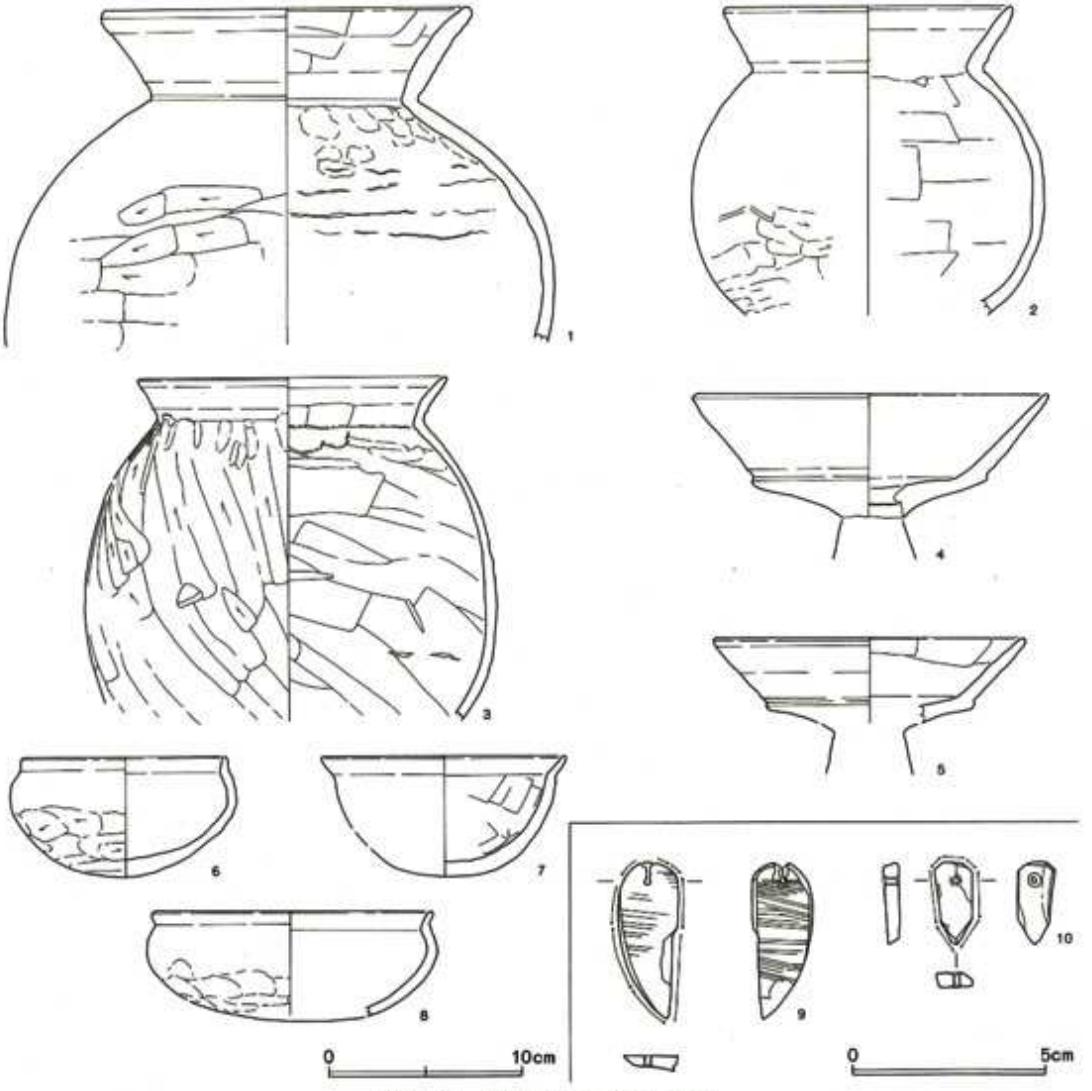
カマドは検出できなかった。可能性としては、焼土が多く散っていた北西壁の中央部分が考えられる。仮にそうであるとすれば、カマドは第68号住居跡によって切られてしまったことになる。調査時点では確定するに至らなかったものの、第68号住居跡の貯蔵穴上部に見られる鶏卵状の掘り込みは、本跡カマドの燃焼部であるかもしれない。これをカマドとすれば、第70号住居跡の主軸方向はおよそN—40°—Wとなる。

貯蔵穴は東隅からだいぶ南側へ寄っている。平面は110cm×88cmの長方形、断面は深さ約77cmの箱形を呈する。覆土中より壺(1・2)や甕(7)、高坏(5)が出土している。

他の特筆すべき出土遺物としては、南西の壁際から出土した滑石製の模造品(勾玉・剣形)が挙げられよう。

第70号住居跡出土遺物(第265図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	壺	(19.2)×(17.6)× —	口縁～胴部破片	W+W′+R多+B′	橙	
2	小型壺	15.0 ×(16.4)× —	破片	(W+R)多+W′+B′	にぶい橙	
3	甕	16.1 ×(17.8)× —	50%	W+粗R少+B′多	〃	
4	高坏	18.4 ×(6.5)× —	坏部90%	W+W′+B′	橙	
5	〃	(16.2)×(4.4)× —	〃 40%	W+W′+B′	〃	
6	甕	10.8 × 6.2 × —	70%	W+R+B′	橙	磨耗著しい
7	〃	12.8 × 6.2 × —	70%	粗W+W′+B微+B′	〃	磨耗著しく外面ーヘラ削り→ナデ
8	〃	14.6 ×(5.5)× —	70%	W+W′+粗R多+B′	明赤褐	磨耗著しい



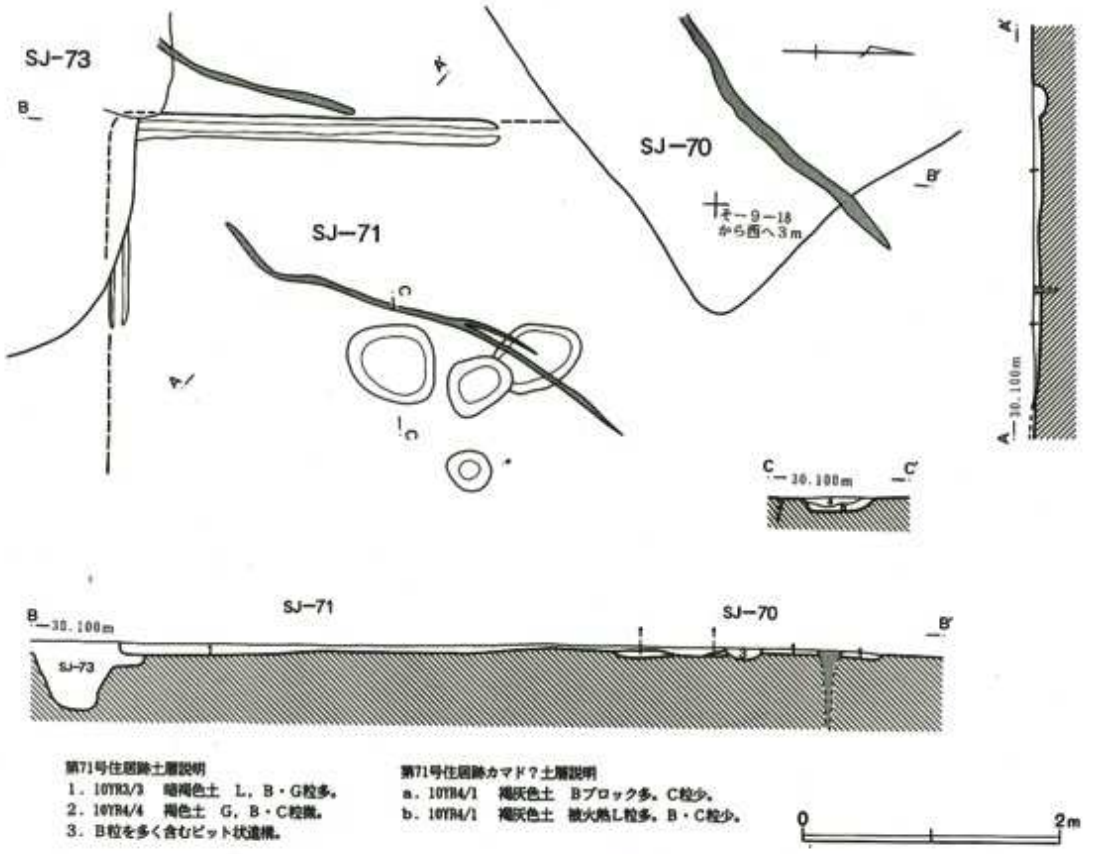
第265図　第70号住居跡出土遺物

第71号住居跡(第266図)

そ－9－13グリッドに位置する。本跡は削平により、その大半は既に失われている。遺構確認時の所見、および覆土の断面観察を援用すれば、西壁(南北方向)は4.9mほどになる。また、第70・73号住居跡より後出のものであることも確認された。

残存する床面は非常に硬質で、東から西へわずかに傾斜(東側は高いので削平されて存在しないが)している。壁溝は南西の隅部のみが検出された。幅約18cm、深さ約4cmである。

床面の中央にあたると思われる部分には、数個の浅い落ち込みが検出されている。このうち最南部にあるもの(G－G′)は焼土を多く含んでおり、カマドの燃焼部ではないかと考えらた。しかし位置的に不自然であり、かつこの部分の床が完全に削平されているため、本跡に伴うという確証は得られなかった。



第266図　第71号住居跡

遺物は床面直上より坏(1)が1点出土したにすぎない。

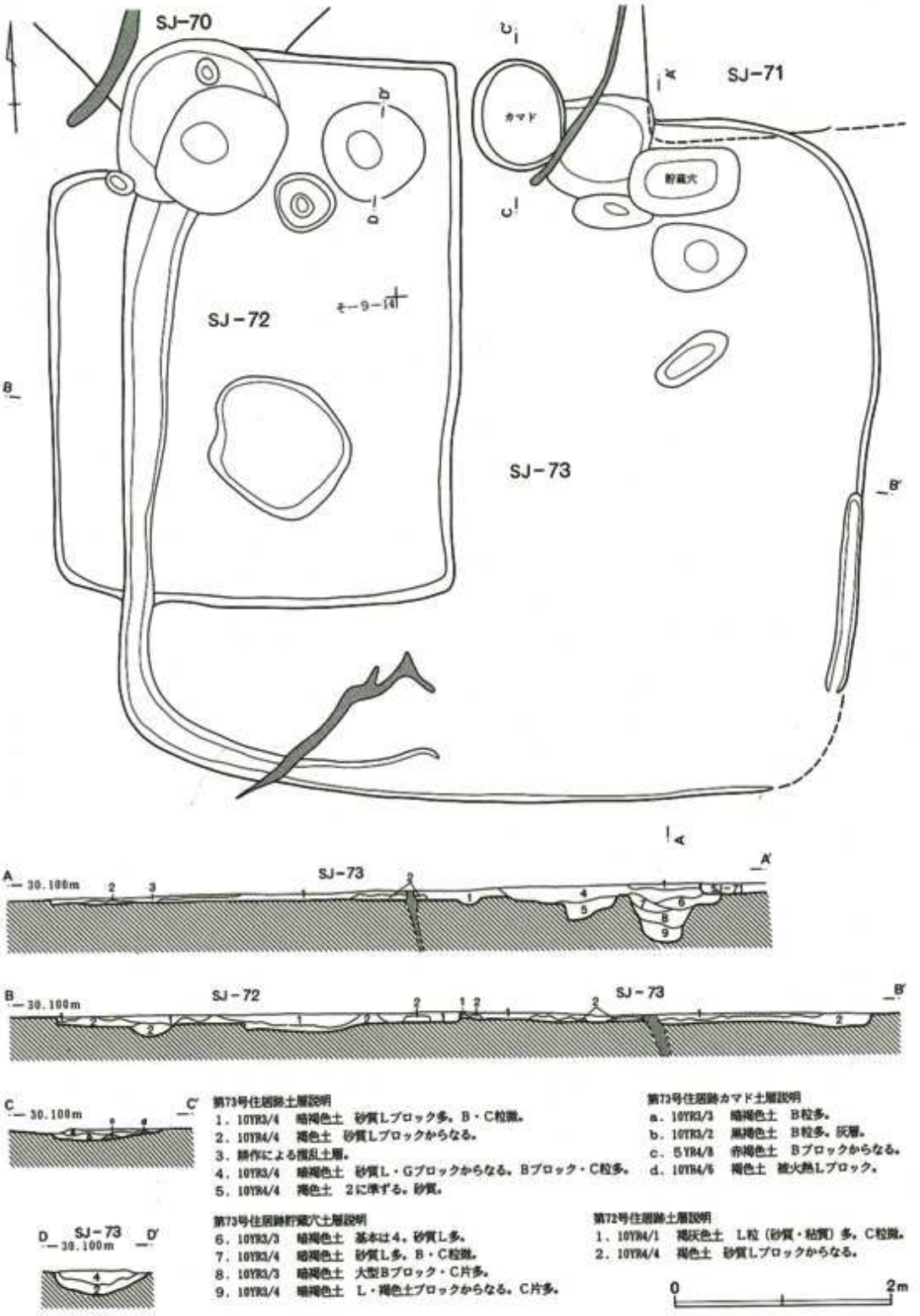
第72号住居跡(第267図)

そ－9－9グリッドを中心に位置する。第70・73号住居跡を切断して設営されている。全体は長方形を呈し、北西隅部に掘り残されたような部分が存在する。そのため、調査は重複を想定して行なったが、覆土の断面にその様な傾向は認められなかった。軸長は5.08m×3.8m、面積は約19.3m²を測る。長軸の方向はおよそN－2°－Eを指す。

覆土はしまりの悪い砂で構成されている。堆積は不自然で、人為的に投入されたものと考えられる。床面は凹凸が激しく、平坦に整形された様子はまったくない。確認面からの深さは、平均すれば8cm程度であろう。床には3箇所に大型の土坑が存在する。いずれも開口していたものではなく、覆土は同じ砂である。

カマドや貯蔵穴などは検出されず、遺物も土玉(1)のほかには、模倣坏の小破片などが少量出土したのみである。

以上のことから見て、本跡は住居跡の掘り方、ないしは住居跡以外の性格不明遺構であると考えられる。ただし、柳町遺跡の住居跡では掘り方の充塡土に砂を用いる例は他にないため、その可能性は低い。



第267図　第72・73号住居跡

第73号住居跡(第267図)

そ－9－8グリッドを中心に位置する。第71号住居跡に北東の壁を、第72号住居跡に西半部を切断されている。その上、噴砂や削平も著しく、遺存状態は極めて悪い。現状では軸長6.3m×6.9mを測る隅丸の長方形を呈し、面積約43.5m²を有する。主軸の方向はおよそN－3°－Eを指す。

覆土は主に砂質の地山からなり、床面とともに耕作機械による攪乱を広範に受けている。確認面から床までは約7cmである。床面は硬質で、噴砂を境に多くの段差が生じている。壁溝は西半部に巡り、幅30cm～40cm、深さ約10cmである。

カマドは北壁中央部に設けられている。この部分の床面を含め、カマドはほとんどが削平されており、径100cm×84cmほどの燃焼部が残存するにすぎない。火床面までは8cmが測れ、灰の堆積が観察された。

貯蔵穴は北西隅部のカマド寄りに位置する。平面は100cm×63cmの長方形で、横断面は深さ約44cmの逆台形を呈する。覆土の最上層からは坏(2)が出土している。貯蔵穴の周囲にも土坑状の掘り込みが多く見られるものの、すべて皿状の浅いものである。

遺物はほとんどが細かい破片であり、図示することができなかった。

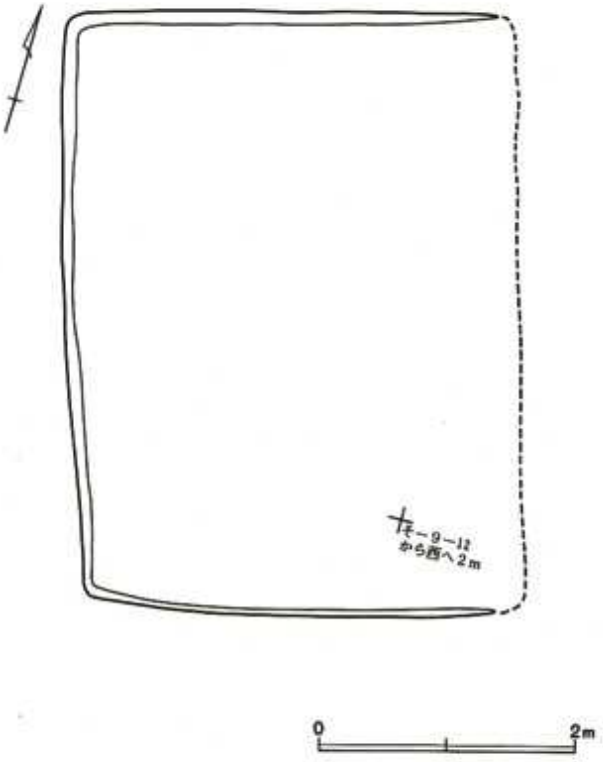
第74号住居跡(第268図)

そ－9－12グリッドを中心に位置する。本跡の場合もそのほとんどは削平されている。加えて調査が冬季であったため、霜害により覆土除去中に消滅してしまった。遺構確認時の所見では軸長3.55m×4.67mの長方形で、面積は約16.6m²となる。長軸の方向はおよそN－30°－Wを指す。

床は薄皮状の覆土を剝がすとすぐに現れ、非常に軟質であった。遺構確認面とはほぼ同一高で、最大でも3cm弱である。

カマドや貯蔵穴は、本跡の確認時より所在が不明である。

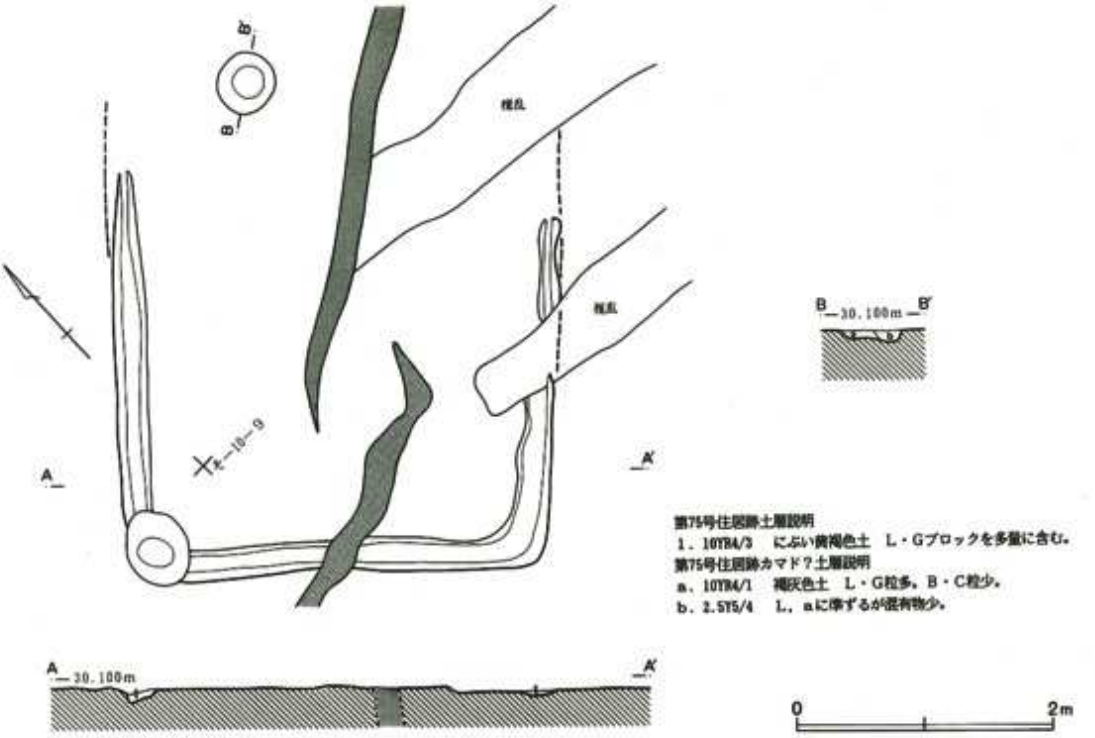
遺物は床面に張り付いて坏(1・2)と土錘(3～5)が出土している。



第268図　第74号住居跡

第75号住居跡(第269図)

そ－10－8グリッドを中心に位置する。床面まで完全に削平され、残存する壁溝に住居跡の名残りを見るのみである。全体は長方形を呈すると思われ、軸長は3.48m×(現状で3.3m)を測る。



第269図　第75号住居跡

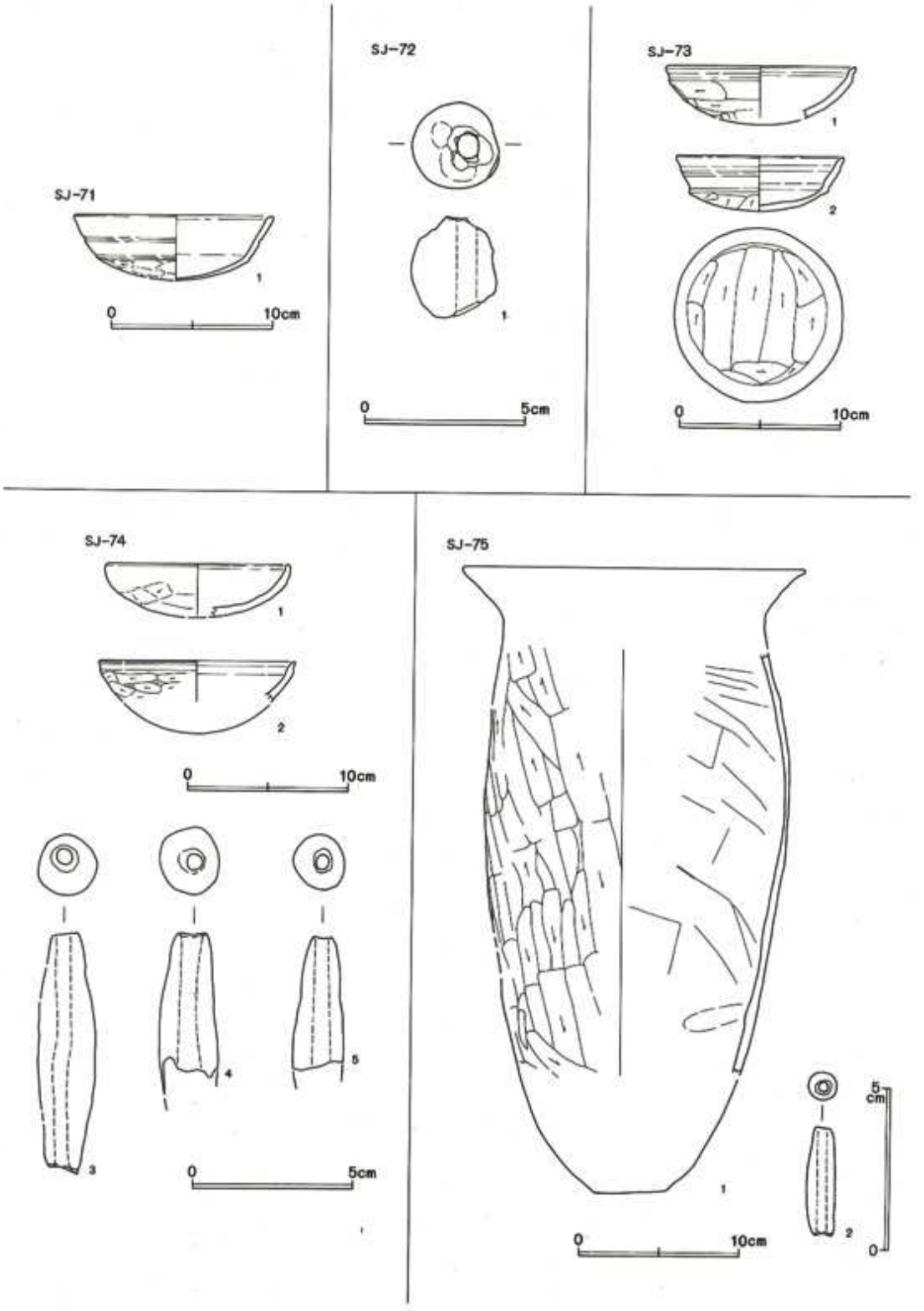
覆土と床面はまったく存在しない。壁溝は検出範囲内では全周し、確認面での幅約25cm、深さ約6cmで一定している。

カマドや貯蔵穴も確認できなかった。壁溝の残存状態から見て、カマドは北東壁に位置すると考えられた。相当部分からは直径約25cm、深さ約8cmの小穴が検出されたが、焼土はあまり含まれておらず、カマドと断定するには至らなかった。

遺物はこの小穴より甕の胴部(1)、壁溝中より土錘(2)が出土している。

第71・73・74・75号住居跡出土遺物(第270図)

No.	器種	法量	残存率	胎土	色調	備考
第71号						
1	坏	12.4 × 4.0 × —	70%	粗W+R多+B+B′	橙	磨耗著しい
第73号						
1	坏	(11.8)×(3.2)× —	口縁破片	W′+B′多	橙	
2	〃	10.6 × 3.4 × —	完形	W+W′+B′	〃	
第74号						
1	坏	(11.6)×(3.4)× —	40%	B′多+粗礫微	にぶい褐	
2	〃	(12.2)×(2.5)× —	破片	W+R+B′	橙	
第75号						
1	甕	— ×(26.3)× —	胴部	W′+B′多	にぶい橙	



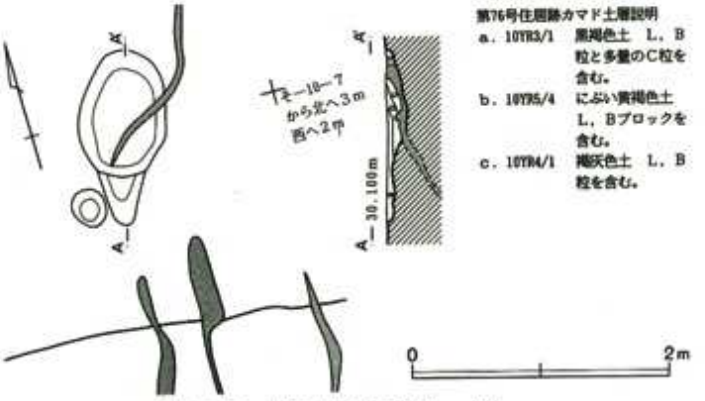
第270図　第71～75号住居跡出土遺物

第76号住居跡(第271図)

そ—10—7グリッドに位置する。カマド燃焼部のみの検出である。床面以上は完全に削平され、住居跡本体については、規模・形状ともにまったく不明である。

燃焼部は径約95cm×68cmの楕円形を呈し、深さは約12cmを測る。南側は舌状に浅く延びている。覆土の堆積状況から敢て住居跡の存在したであろう方向を推定すれば、燃焼部の南側ということになろう。

遺物はなんら出土していない。



第271図　第76号住居跡(カマド)

第77号住居跡(第272・273図)

そ—10—2グリッドを中心に位置する。第78・80号住居跡を掘り込んで設営される。南部は第79号住居跡に切断されるほか、削平や噴砂で著しく損なわれている。全体は(6.3)m×5.7mほどの長方形を呈し、面積は約35.9m²となる。主軸方向はおよそN—3°—Eを指す。

覆土は地山の粘質土を主体とし、噴砂の影響でかなり砂っぽくなっている。床面は噴砂の亀裂でズタズタとなり、多くの段差が生じている。さらに中央を走る噴砂を境に、住居跡は南北方向にズレている。

カマドは北壁中央部、やや東寄りに設けられている。噴砂による激しい破壊を受けるものの、おおよその形状は把握できた。袖は削り出されたもので、これによって燃焼部は約70cm×35cmの長方形に成形されている。焚き口部には両袖を繋ぐように、2個の甕(1・2)が差し込まれた状態で出土している。天井部の補強として横位に構架されたものであろう。火床面は床よりも10cmほど深く、丸みを有している。

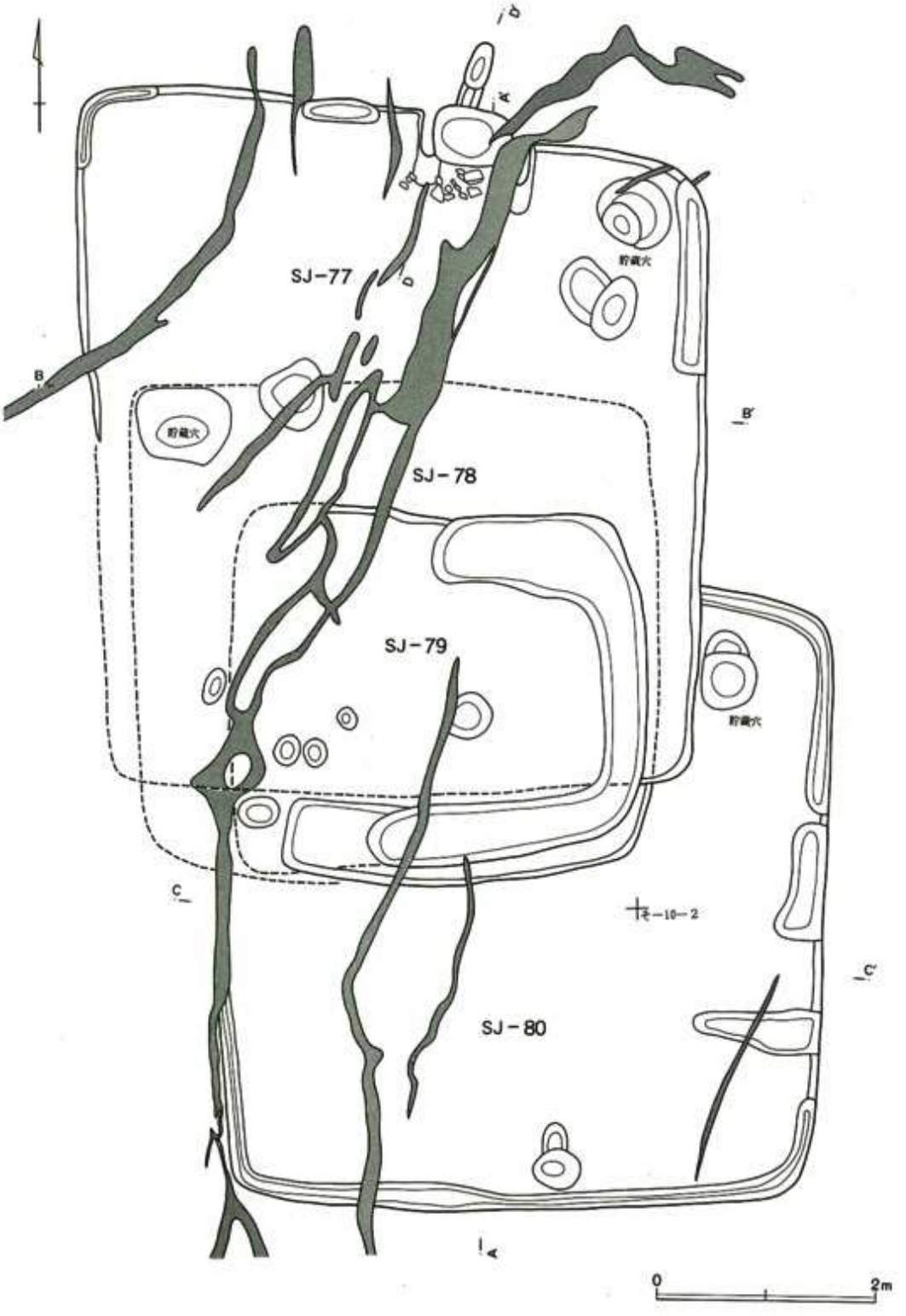
貯蔵穴は北東隅部に備わる。上面は径72cm×60cmの楕円形で、深さは約30cmを有する。この南側にも2個の掘り込みが検出されたが、本跡に伴うものか否かは確認できなかった。

遺物は概ね床面上からの出土である。しかし担当調査員が記録を怠ったため、ここに位置を図示することができなかった。

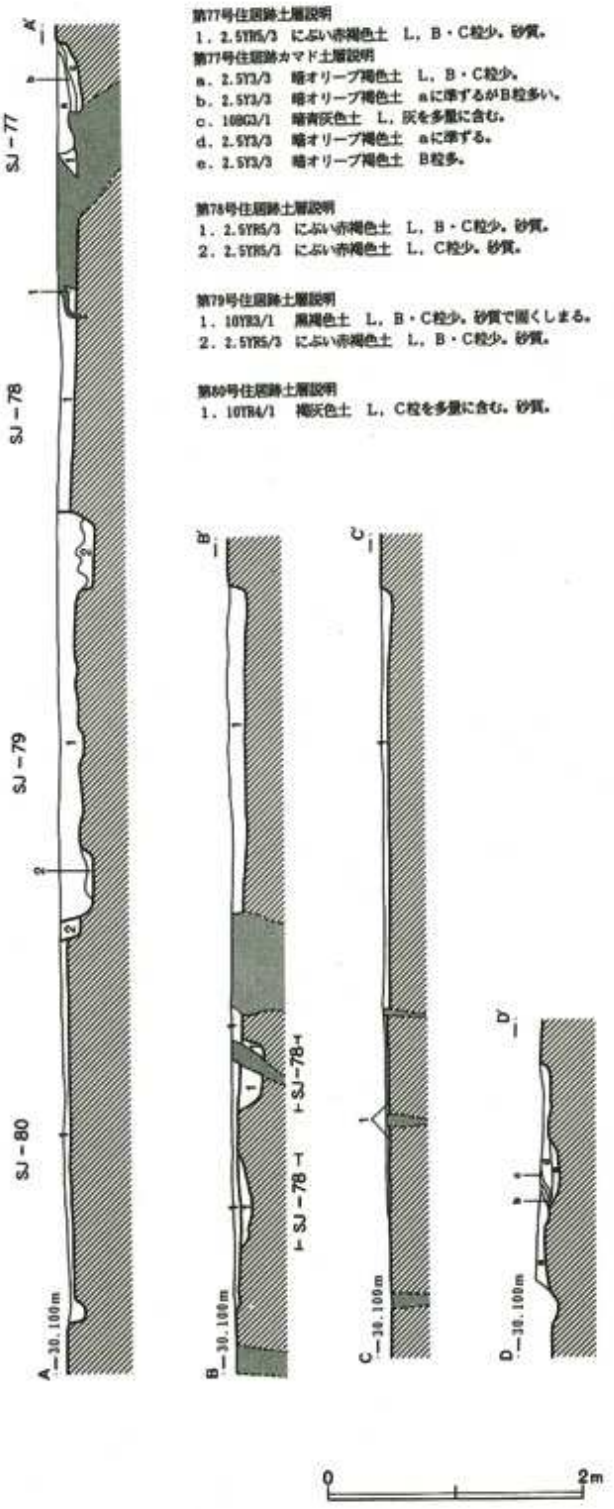
第78号住居跡(第272・273図)

そ—10—2グリッドに位置する。第77・78号住居跡による切断と激しい削平のため、ほとんど住居跡としての形状をとどめていない。土層の断面観察と平面図の整理により、その存在が確認された住居跡である。以下、規模や形状を推定復元すれば、軸長は4.5m×4.8m程度、面積は約21.6m²、主軸方向はおよそN—3°—Eとなる。

壁や床はすべてといってよいほど失われている。わずかに残存する南東部では、遺構確認面から床までは約15cmである。



第272図　第77～80号住居跡(1)



第273図　第77～80号住居跡(2)

カマドは確認できていない。貯蔵穴は北西隅部に検出された土坑であろう。覆土上面は硬くしまっており、第77号住居跡の床面となっていた。平面は85cm×76cm長方形で、深さ約40cmを測る。

遺物はなんら出土していない。

第79号住居跡(第272・273図)

そ―10―2グリッドに位置し、第77・78号住居跡を掘り込んで営まれている。西壁部は地震により隆起し、その後に削平を受けたため完全に消失している。現状では軸長3.15m×(3.2)mで、本来の平面形は長方形であったと思われる。

覆土は主に地山の粘質土で構成され、硬くしまっている。また、噴砂の影響で砂質でもある。確認面から床までは約15cmを測り、床面は軟質で起伏がやや多い。壁溝は東半部に巡り、幅は50cm～75cmと定まらないのに対し、深さは約10cmで一定している。

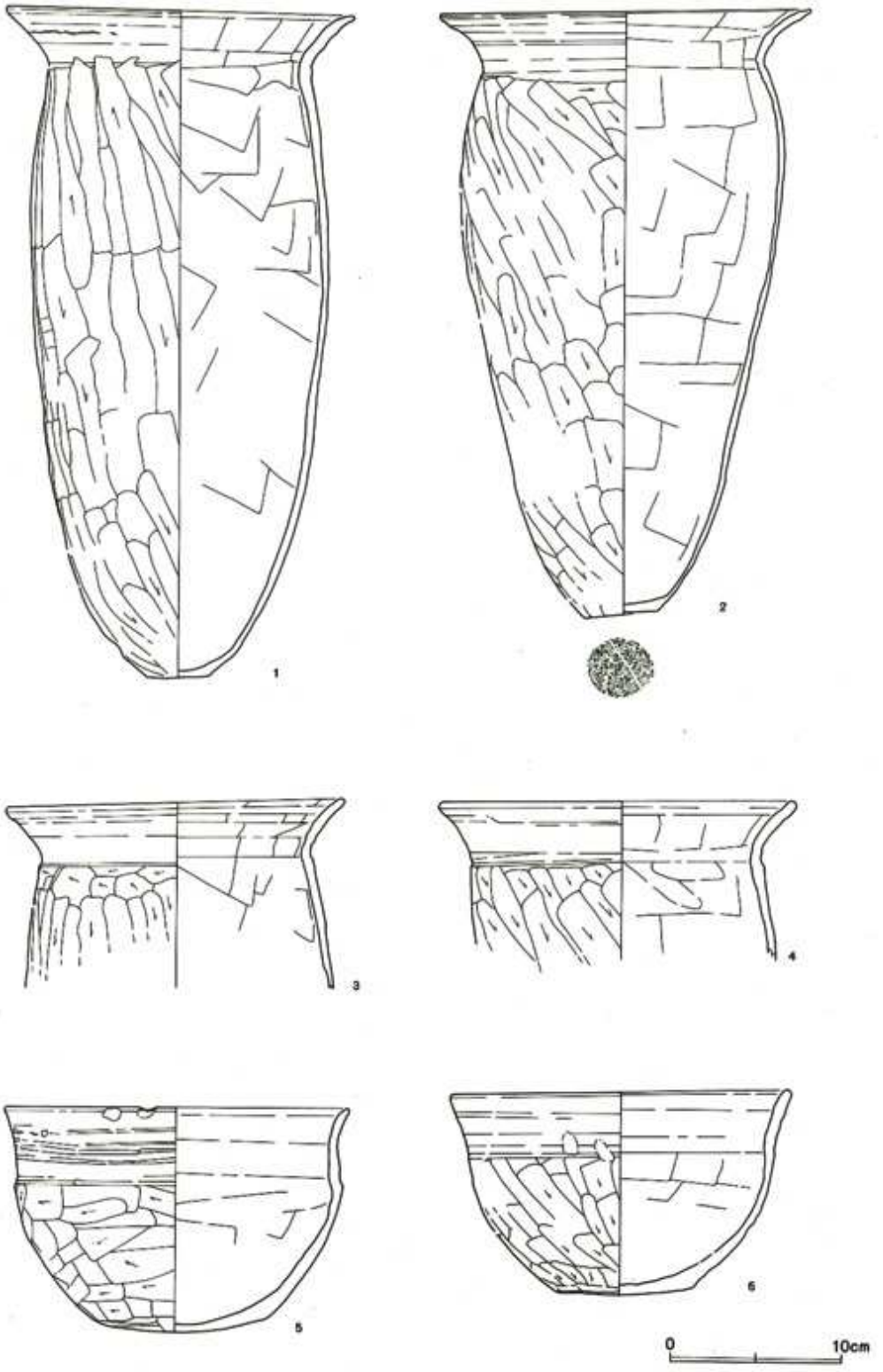
カマドや貯蔵穴は検出されなかった。削平された西壁部での存在は否定できないが、床面や壁溝の状態には住居跡とすることを躊躇させるものもある。

遺物はいずれも破片で、覆土中からの出土である。

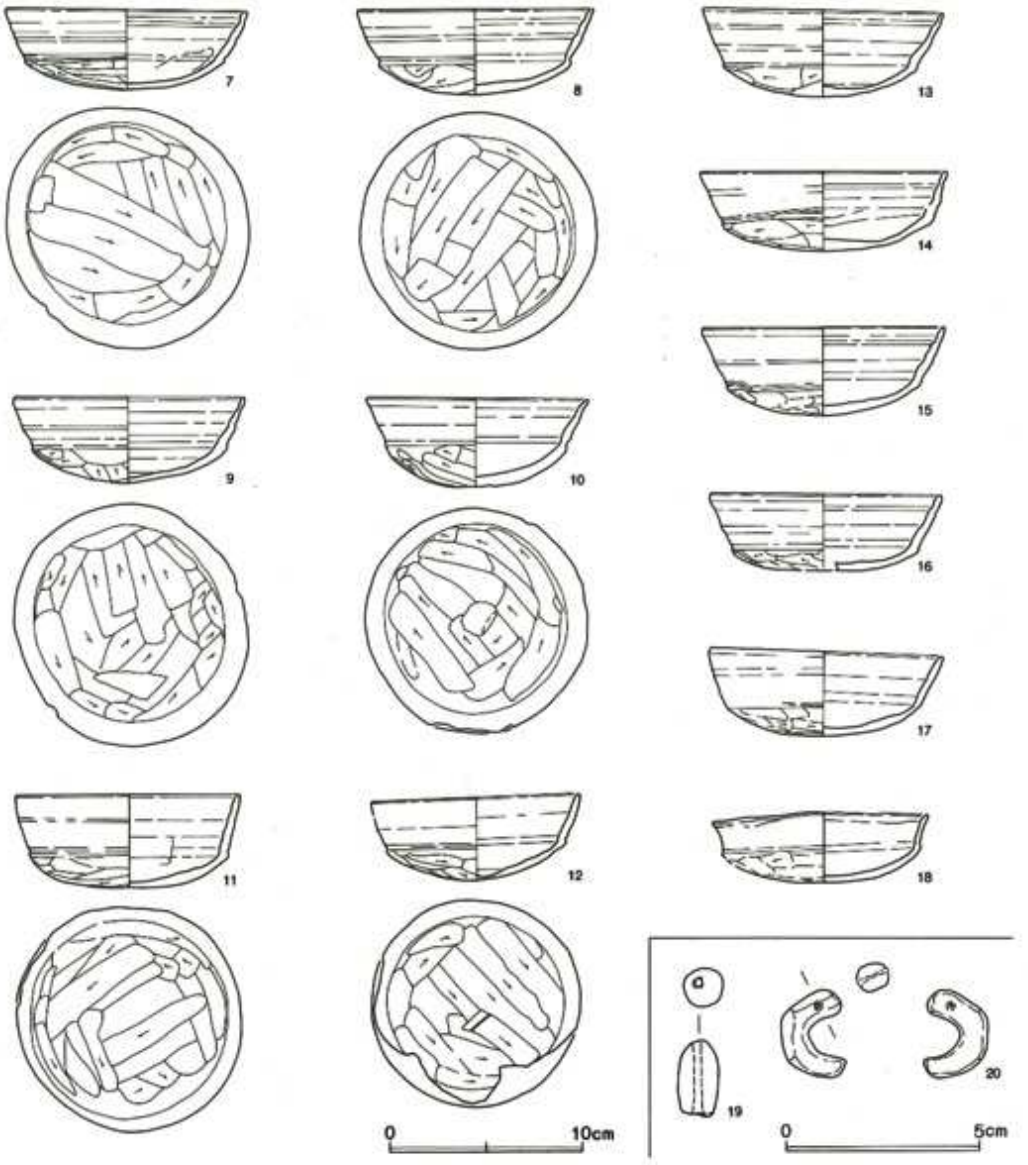
上記のように、本跡はその形状や覆土から見て、掘り方部分の残存したものと考えられる。

第80号住居跡(第272・273図)

そ―10―2グリッドを中心に位置する。北西部を第77・78・79号住居跡に切断される上、床面にまで及ぶ削平を受けている。全体はほぼ5.9m×5.5mの方形を呈し、面積は約32.5m²を測る。北カマドを想定すれば、主軸の方向はおよそN―4°



第274図　第77号住居跡出土遺物(1)



第275図　第77号住居跡出土遺物(2)

—Eとなる。

覆土や壁についてはここで触れられるほどの遺存がない。覆土は薄皮のようで、これを剝くと直ちに床が現れる。確認面からは深くても5cmである。硬くしまった床面には、各所で噴砂を伴う段差が生じている。壁溝は検出範囲内では幅約15cm、深さ約5cmでほぼ全周する。

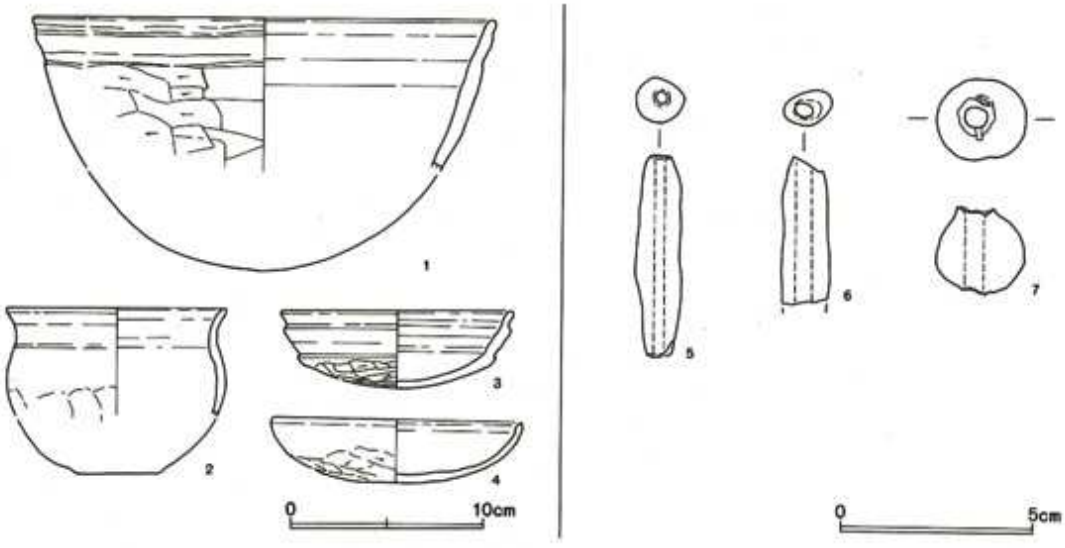
カマドは検出されなかった。既に他住居跡に切り取られてしまったものと考えられる。

貯蔵穴は北東隅部に設けられている。平面は52cm×50cmの略方形で、北側に半円状のテラスが見られる。横断面は箱形を呈し、深さ約65cmを測る。

遺物はいずれも床面に押し潰されたような状態で出土している。

第77号住居跡出土遺物(第274・275図)

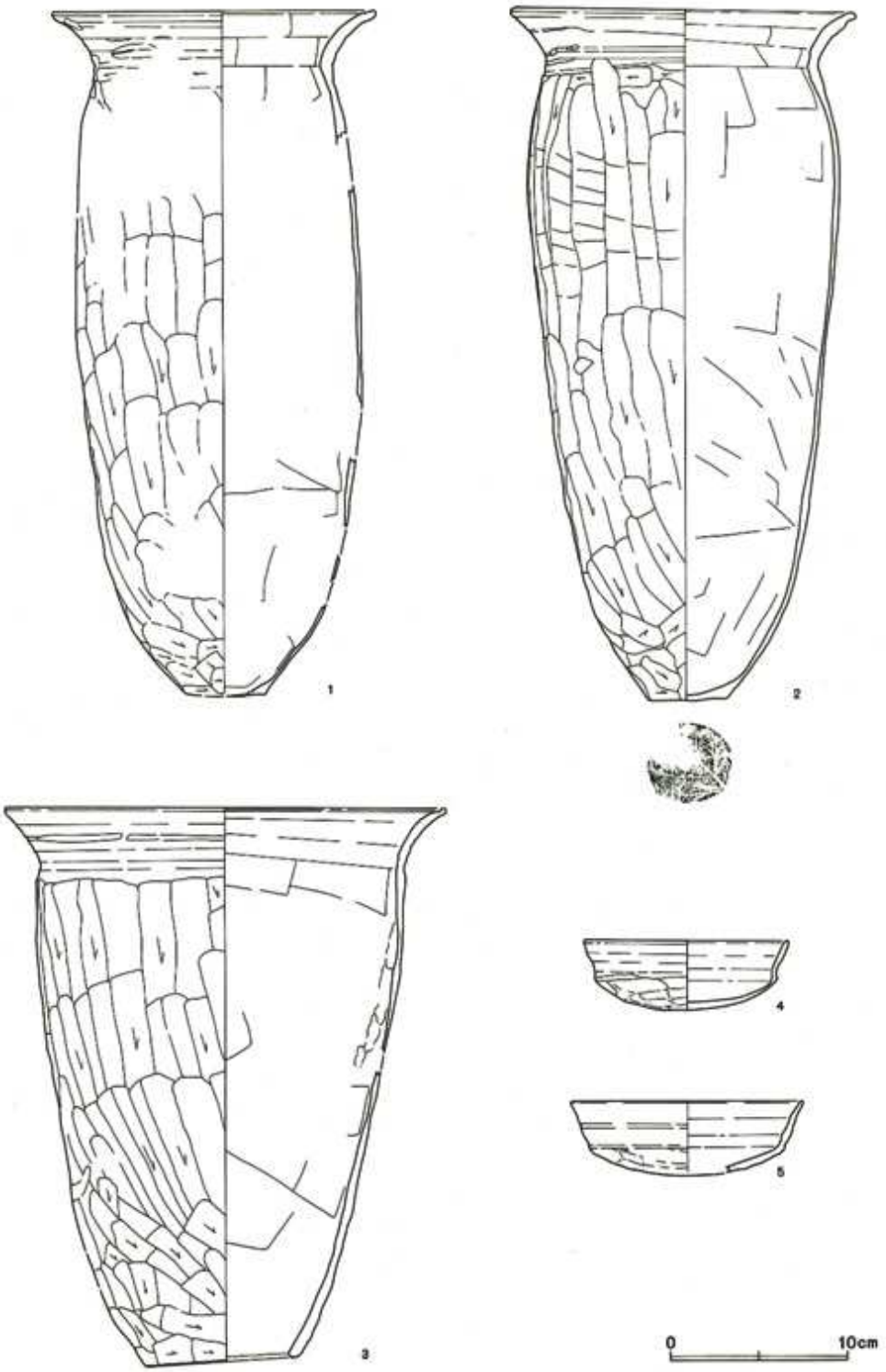
No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	甕	(20.6)× 38.9 × 3.7	90%	細(W少+W′+B′)	にぶい橙	
2	〃	21.6 × 35.3 × 3.4～3.8	70%	(W+W′)多+B′	〃	底部に木葉痕
3	〃	19.7 ×(11.2)× —	口縁～胴部	粗(W+W′)+B′	浅黄橙	
4	〃	20.6 ×(9.2)× —	〃	W+粗W′(W′+B′)	橙	
5	鉢	19.0～20.2× 13.0 × 9.7	ほぼ完形	W+W′+粗R少+B′多	〃	
6	〃	(20.0)×(11.8)× 7.8	50%	細(W少+W′+B′)	灰黄褐	
7	坏	12.8 × 4.2 × —	完形	W′少+B+B′	橙	口縁の歪みが強い
8	〃	12.2 × 4.5 × —	〃	W少+R+B′多	にぶい橙	
9	〃	5.9～6.3× 4.4 × —	ほぼ完形	W′+B+B′	〃	口縁の歪みが強い
10	〃	11.6 × 4.8 × —	〃	W+(W′+B′)多+R少	明赤褐	
11	〃	11.8 × 4.9 × —	90%	W′微+粗R少+B′多	橙	
12	〃	10.8 × 4.3 × —	80%	粗W+R多+B+B′	〃	
13	〃	12.4 × 4.5 × —	80%	W+R+B′	灰褐	
14	〃	6.3 × 4.1 × —	80%	W+W′+R+B′	橙	口縁やや歪む
15	〃	6.2～6.5× 4.6 × —	90%	W+R+B+B′多	〃	口縁の歪みが強い
16	〃	12.0 ×(3.9)× —	90%	W+R少+B′多	にぶい橙	
17	〃	12.0 × 4.6 × —	ほぼ完形	W+W′+R+B′	橙	磨耗著しい
18	〃	11.2 × 3.5 × —	70%	W微+R多+B′	〃	〃



第276図　第79号住居跡出土遺物

第79号住居跡出土遺物(第276図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	鉢	(24.0)×(7.8)× —	口縁破片	W+B′多	にぶい黄橙	
2	小型壺	(11.4)×(5.5)× —	〃	W+R+B+B′	にぶい橙	磨耗著しい
3	坏	(12.3)× 4.0 × —	30%	W+W′+B′	褐灰	
4	〃	(13.0)× 3.3 × —	60%	W+W′+粗R+B	にぶい赤褐	暗文



第277図　第80号住居跡出土遺物

第80号住居跡出土遺物(第277図)

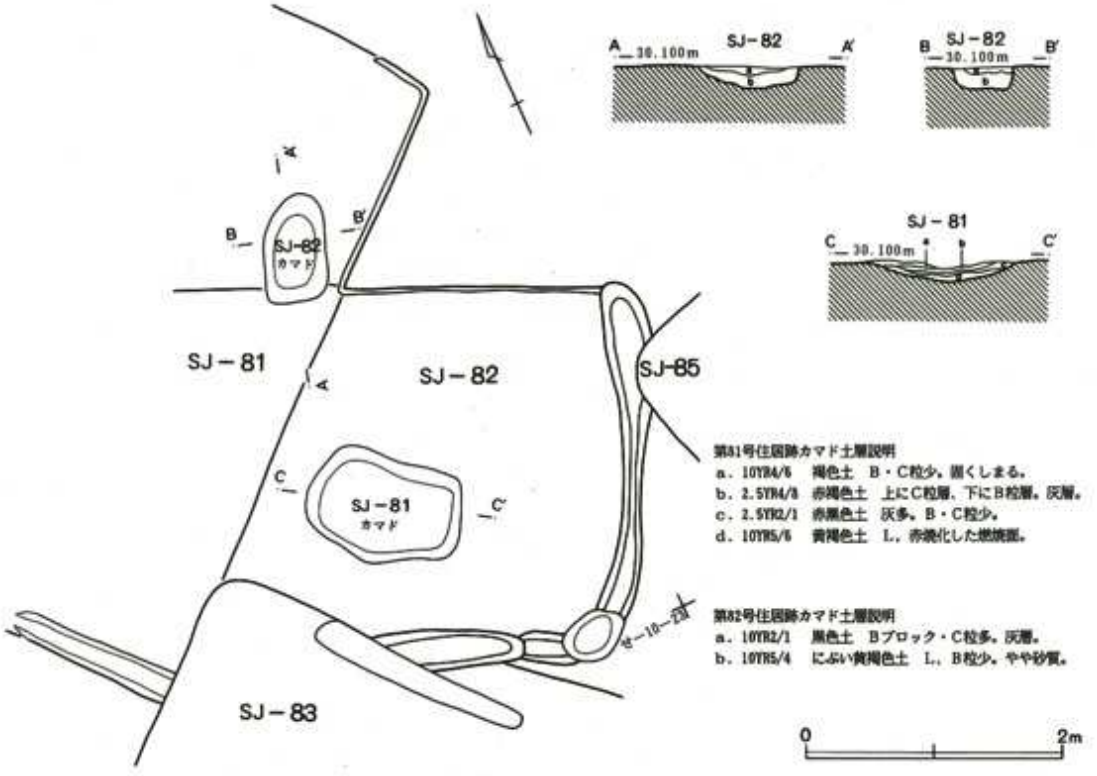
No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	甕	(18.2)×(38.4)× 4.4	70%	粗(W′+R+B+B′多)	橙	
2	〃	(19.4)× 38.7 × 4.7	70%	粗(W+W′+B′多)	〃	底部に木葉痕
3	甑	25.2 ×(31.2)×孔9.0	ほぼ完形	粗(W′+R+B′)多	〃	器表あれる
4	坏	11.6 × 4.0 × —	80%	W+粗R+B	〃	磨耗激しい
5	〃	(13.2)×(4.0)× —	30%	W+W′多+B′	〃	〃

第81号住居跡(第278図)

せ—10—23グリッドを中心に位置する。住居跡の東隅と南西の壁溝、およびカマドの一部を除き、他はほぼ完全に削平されている。遺構確認時には、カマドの半分ほどに第82号住居跡の覆土が乗っていたことから、本跡の方が先行するものと考えられる。また、第83号住居跡には壁溝を切られている。南東辺(壁)は残存部から推して、約5.2mの長さが得られる。

カマドは約120cm×80cmの長方形状で、深さは16cmほどを測る。しかし、柳町遺跡ではこの方向にカマドを有する住居跡はなく、しかも壁からだいぶ離れていることなど、別の住居跡である可能性も高い。

遺物はなんら出土していない。



第278図　第81・82号住居跡

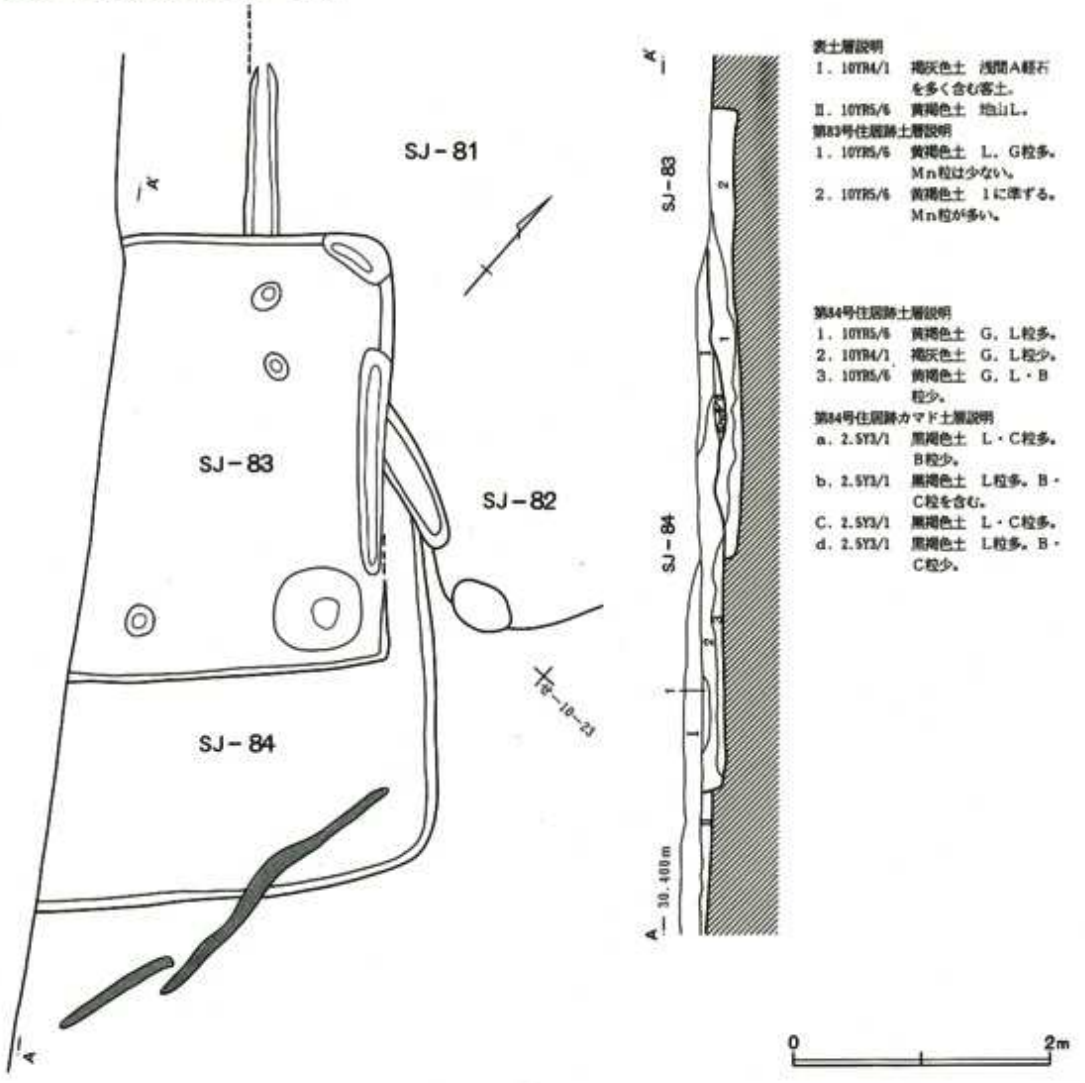
第82号住居跡(第278図)

せ—10—23グリッドを中心に位置する。第81号住居跡を切り込んで設営されながらも、西側は削平によって消滅している。第83号住居跡には南西の壁溝を切断されている。主軸長は約2.95mで、その方向はおよそN—25°—Eを示す。

遺構確認面から床までは最大でも2cm弱で、ほぼ全面が耕作による攪乱を受けている。壁溝は南部で確認された。幅は15cm～30cm、深さは平均10cmと、ともに不定で乱れている。

カマドは北東壁に燃焼部のみが残存する。平面形は95cm×50cmの楕円を呈し、中央が約18cmで最も深い。内部には灰が堆積している。

遺物の出土は見られなかった。



第279図　第83・84号住居跡

第83号住居跡(第279図)

せ—10—23グリッドを中心に位置する。東半部には第84号住居跡が乗り、逆に北隅部で第81・82号住居跡それぞれを切断している。南西部は調査区外になるものの、全体は(長)方形となろう。軸長の測れるのは一方向のみで、その長さは約3.4mである。

覆土は自然堆積を示し、第84号住居跡の床面となる部分にも、床が貼られた様子は認められない。壁はほぼ垂直に立ち上がり、遺構確認面から床まで約18cmの高さを有する。壁溝はごく部分的に存在する。床面は軟質で、凹凸がかなり多くなっている。

柱穴や調査範囲内でのカマド検出はなかった。床面に見られる小穴は深さが10cm以下の浅い窪みで、いずれも柱穴とは思われない。

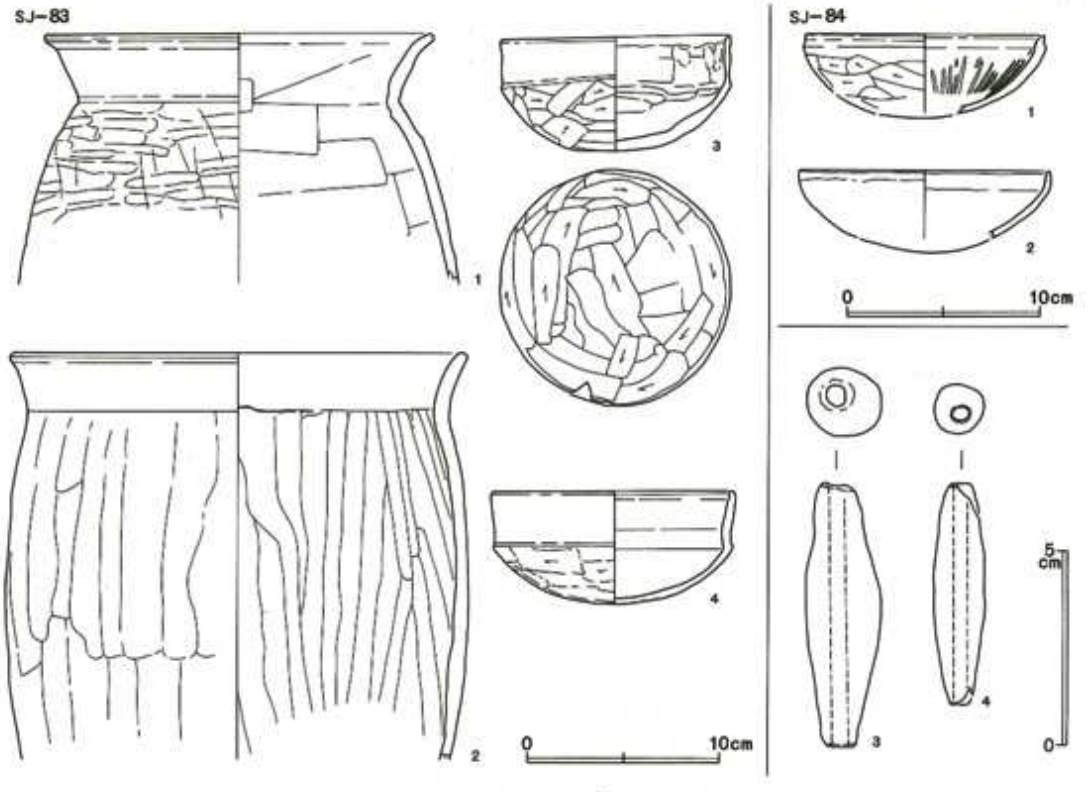
貯蔵穴は東の隅部に備わる。径56cm×50cmほどの楕円形を呈し、深さは約50cmを測る。

遺物はすべて覆土中からの出土である。

第84号住居跡(第279図)

せ—10—18グリッドを中心に位置する。第82・83号住居跡の壁と覆土を切り込んで営まれる。南西部は調査区外となるものの、全体は(長)方形を示すと思われる。ただし、土層の断面観察を行なった調査区の壁にはちょうど主軸線が現れており、北西壁にカマドを設けた住居跡であることが判明した。このときの主軸方向はおよそN—40°—Wとなる。

床面は軟質であり、第83号住居跡内となる部分においても、埋め戻しや貼り床などは観察されな



第280図　第83・84号住居跡出土遺物

かった。このため、同所での床面検出はできなかった。遺構確認面から床までは約16cmを測る。

断面観察されたカマドも、床や壁同様に平面的な検出はできなかった。断面には燃焼部と煙道が認められ、焼土や炭化物を含んでいる。

遺物としては、覆土中より坏の破片(1・2)や土錘(3・4)が出土している。

第83・84号住居跡出土遺物(第280図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
第83号						
1	甕	(20.2)×(13.4)× —	口縁～胴部片	粗(W+W′+B′)多	にぶい橙	外面ータテヘラ削り→ヨコナデ
2	甑	(23.6)×(21.0)× —	〃	W+W′+粗R+B′	明赤褐	
3	坏	11.8 × 6.1 × —	80%	W微+R+B′多	橙	口縁歪む
4	〃	12.6 × 5.9 × —	完形	W+W′+粗R	〃	磨耗著しい
第84号						
1	坏	12.6 ×(4.1)× —	50%	W′+R微+B′	にぶい橙	暗文
2	〃	(13.0)×(3.5)× —	破片	粗W+B+B′	橙	外面ー削り→ナデ、器面荒れる

第85号住居跡(第281図)

せ—10—22グリッドを中心に位置する。南北方向に走る噴砂が住居跡を分断し、しかも主軸を境に15cmほどのズレを生じさせている。第82号住居跡との重複関係は確認できなかった。平面は長方形を呈し、ズレを復元したときの規模は、軸長3.12m×4.7m、面積約14.7m²を測る。主軸の方向はおよそN—18°—Wを指す。

床は地震のため、東から西へ階段状に陥没している。従って遺構確認面からの深さは、5cmから25cmとかなりの開きがある。床面は陥没による段差に加え、地盤の捻転のために軟化と起伏が生じている。壁溝は東壁南部から南壁にかけて途切れる。検出部では幅約18cm、深さ約10cmで一定している。

カマドは北壁のやや東寄りに設けられている。袖はまったく検出されず、燃焼部も明瞭ではない。火床面は床とほぼ同一高で、境界を図示できるほどのものではない。煙道は楕円形に壁外へ突出している。

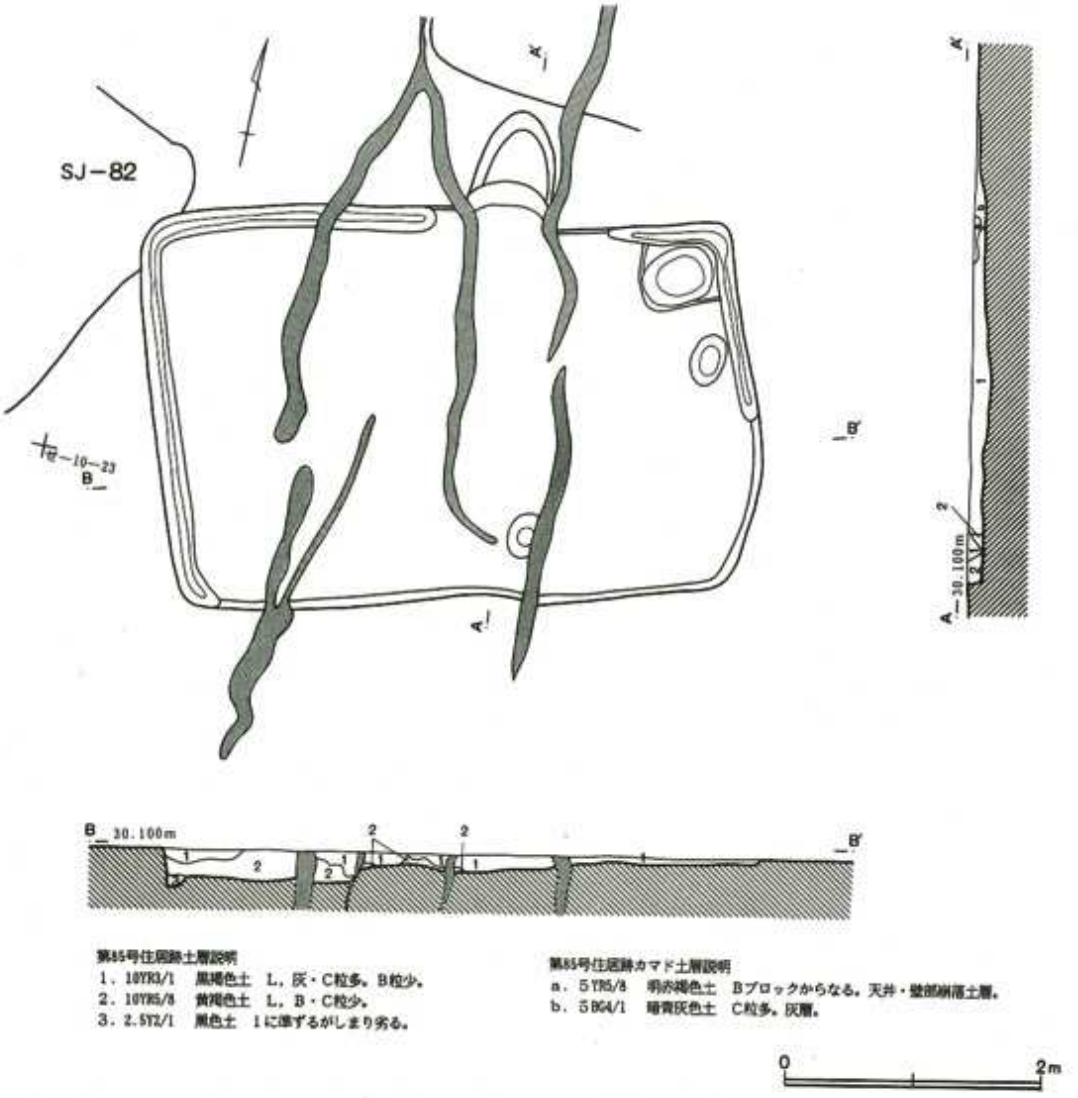
貯蔵穴は北東隅部に備わる。上面は62cm×49cmほどの長方形で、深さ5cm弱でテラス状となる。その内部は径55cm×45cmほどの楕円形となり、約54cmの深さに掘り込まれている。横断面は箱形を呈している。

カマドの対面、南壁際には径約30cm、深さ18cmほどの小穴が穿たれている。覆土はほとんど地山の粘質土からなり、柱痕は確認できなかった。位置的に見れば、出入口にかかわるものかもしれない。

遺物の出土はほとんどなく、覆土中に甕や坏の破片が散在したにすぎない。

第86号住居跡(第282図)

そ—9—5グリッドを中心に位置する。削平により、北東の壁溝と床の一部が残存するのみである。このため、住居跡とは考えられるものの、本跡の規模や形状は示すことができない。

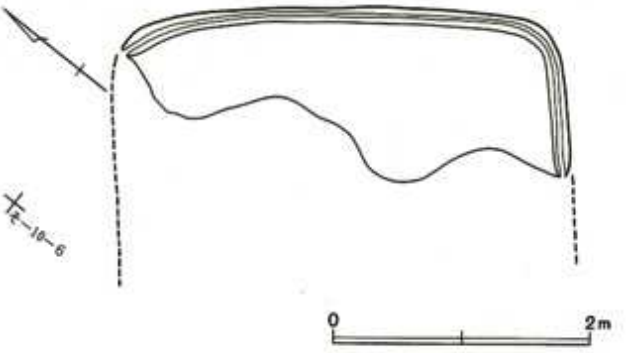


第281図　第85号住居跡

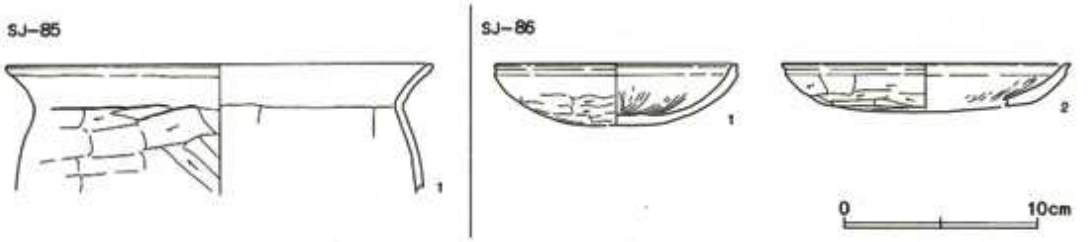
わずかに残る床も既に機能面は失われており、その下の硬化した部分が検出されたにすぎない。壁溝は確認面で幅約12cm、深さ約4cmである。

カマドや貯蔵穴は存在が予想される位置を精査したにもかかわらず、ついに確認することはできなかった。

遺物は壁溝中より坏(1・2)の破片が出土している。



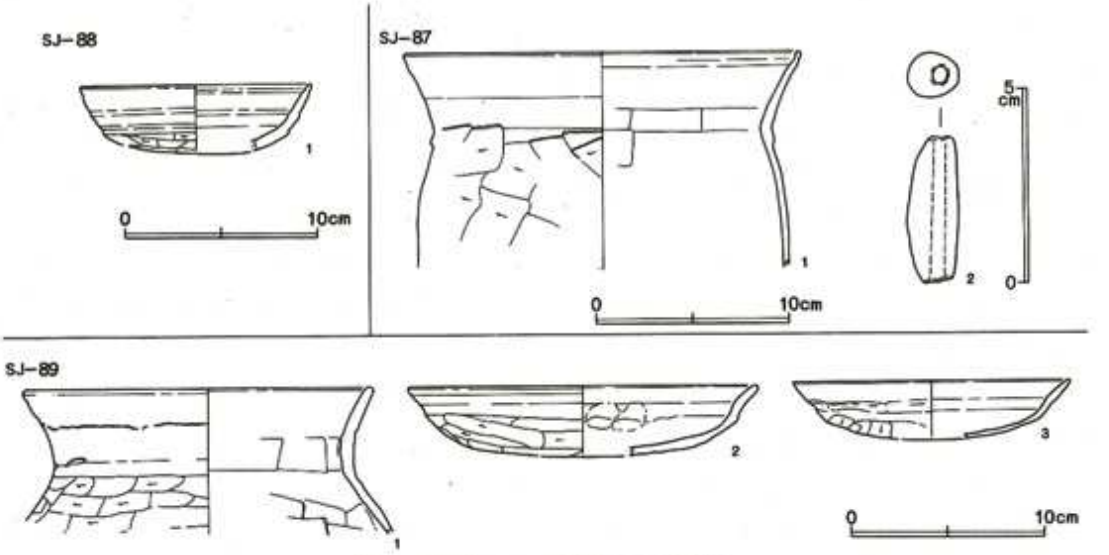
第282図　第86号住居跡



第283図　第85・86号住居跡出土遺物

第85・86号住居跡出土遺物(第283図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
第85号						
1	甕	(22.4)×(7.0)× —	口縁破片	W+W′+粗R+B′多	にぶい橙	
第86号						
1	坏	(12.6)× 3.2 × —	20%	W+W′+B′	橙	暗文、不明瞭
2	〃	(15.0)×(2.7)× —	破片	W+W′+B′	〃	暗文



第284図　第87～89号住居跡出土遺物

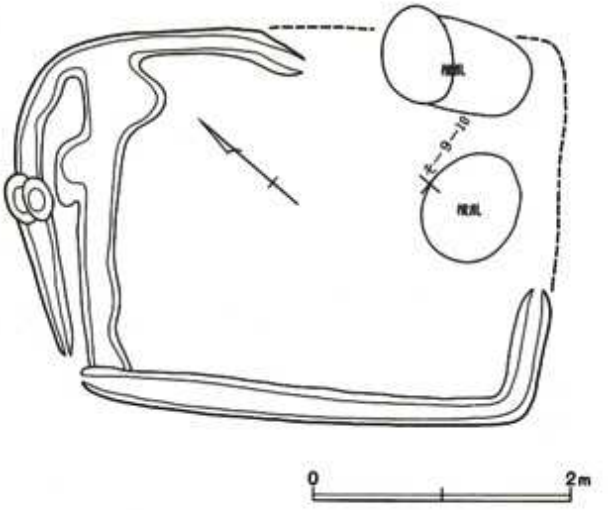
第87・88・89号住居跡出土遺物(第284図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
第87号						
1	甕	(20.6)×(11.3)× —	口縁片	W+W′+B′	にぶい橙	
第88号						
1	坏	12.2 ×(3.8)× —	60%	W′+粗R+B+B′	橙	内全面炭化物付着
第89号						
1	甕	19.5 ×(7.5)× —	口縁～肩部	細(W+W′+R+B′少)	暗赤褐	
2	坏	(18.2)×(3.5)× —	30%	W+W′多+B	橙	
3	〃	(14.4)×(3.0)× —	20%	W+W′+B′	にぶい橙	

第87号住居跡(第285図)

そ－9－10グリッドを中心に位置する。壁溝のみの残存で、床面以上は完全に削平されている。壁溝は北西部で二重となっており、2軒の重複とも考えられる。しかし明確さを欠くため、ここでは内部に巡る壁溝を1軒として捉える。その平面は大略長方形をなし、軸長3.7m×3.0m、面積11.1m²ほどを測る。長軸の方向はおよそN－36°－Wとなる。

壁溝は確認面で幅約32cm、深さ約6cmである。この内より甕の破片(1)と土錘(2)が出土している。



第285図　第87号住居跡

第88号住居跡(第286図)

そ－9－5グリッドを中心に位置する。削平で南東隅部をわずかに失うとはいえ、全体は軸長4.44m×4.84mの長方形を呈している。面積は約21.5m²を測り、主軸方向はおよそN－22°－Wを指す。

壁はほとんど残っていないものの、床はすんでのところで削平を免れている。床面はいくぶん軟質で、中央部が盛り上がるように高まっている。

カマドは北壁のやや北寄りに設けられる。袖は壁からほぼ垂直に削り出され、燃焼部を箱形に画している。燃焼部自体は径84cm×48cmほどの楕円形で、奥部は一段高くなる。焚き口部は床面が硬化し、燃焼部へ向けてやや傾斜する。火床面はこれより4cmほど深くなり、上には灰層が形成されている。

貯蔵穴は北東隅部、カマドの右側に位置している。上面は77cm×63cmの楕円形で、床面から12cmほどでテラス状となる。中央部はさらに直径約37cm、深さ32cmにわたって掘り込まれる。底面は平坦で、横断面は逆位の凸字状を呈する。

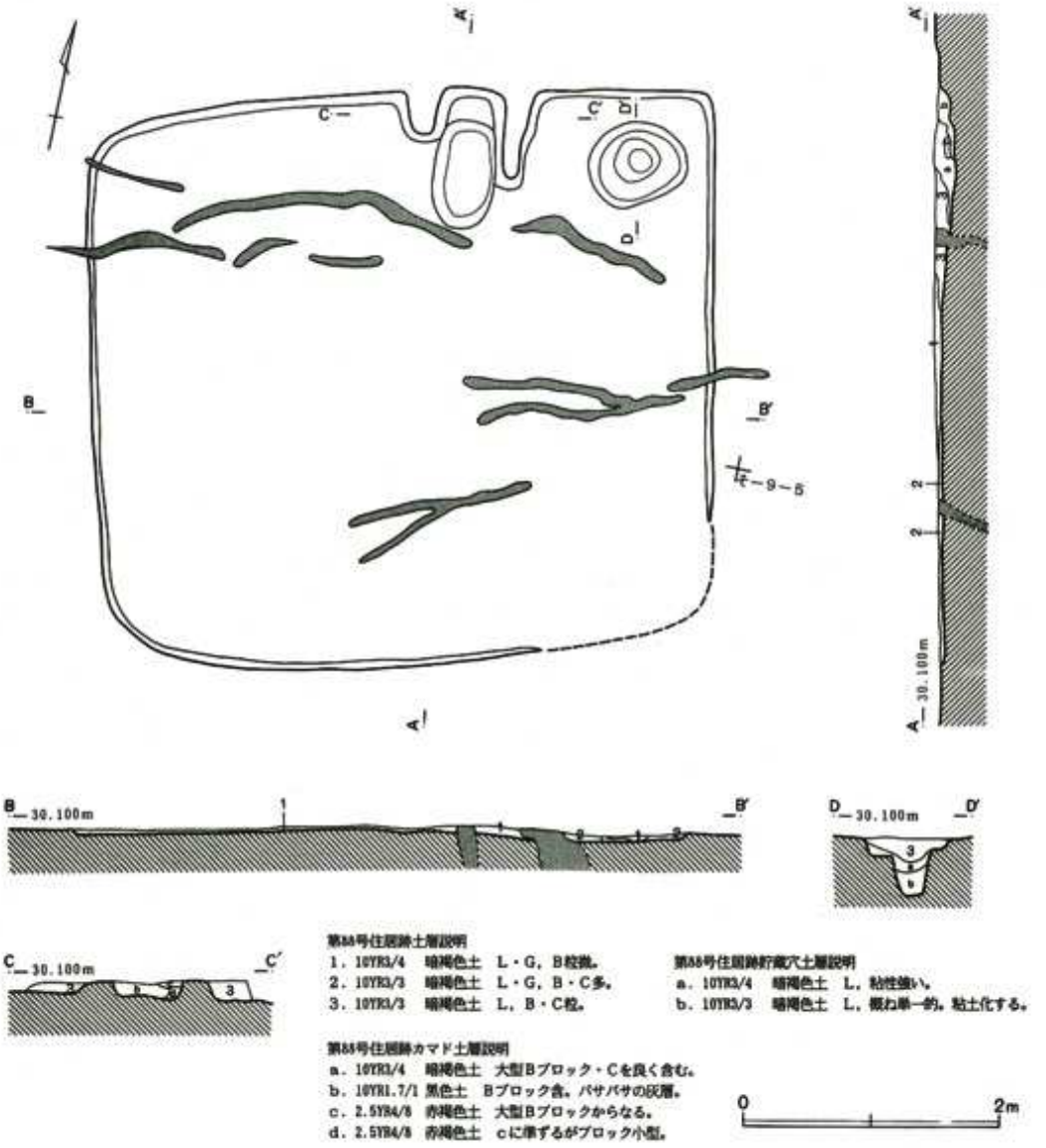
遺物は図示したもの以外にはほとんど出土していない。

第89号住居跡(第287図)

そ－9－3グリッドを中心に位置する。南西部は地震による隆起と、その後の削平により完全に消失している。残存部も床面以上は既になく、壁溝のみが確認されたにすぎない。壁溝は遺構確認時に第92号住居跡内でも観察できたことから、同住居跡よりも新しいものといえる。規模や形状は明らかとしえない。

検出された壁溝は現状で幅約24cm、深さ約6cmである。

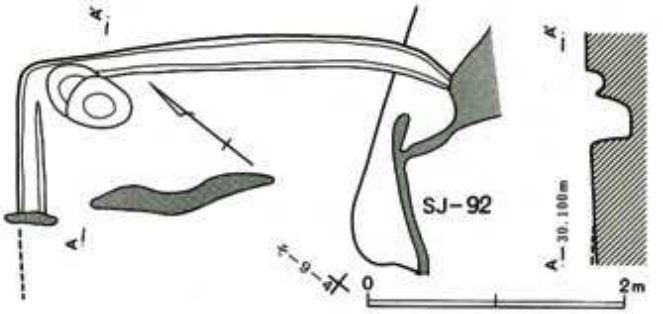
カマドも削平されてしまったものと思われる。わずかに北西の壁部に焼土が見られるものの、その存在を推測させるような量や範囲ではない。



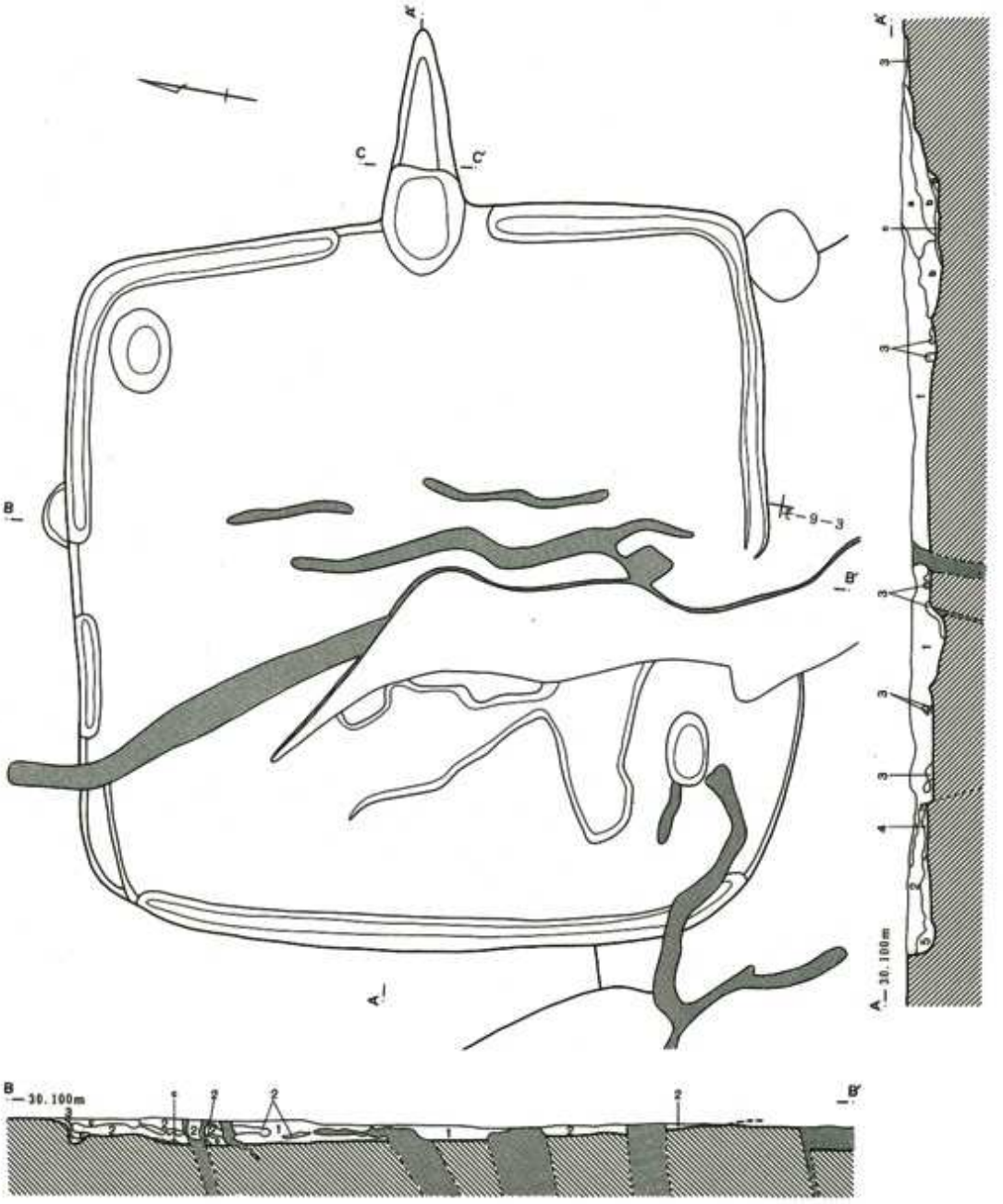
第286図　第88号住居跡

貯蔵穴は北隅に検出された、土坑状の掘り込みであろう。平面は50cm×38cmの楕円形を呈し、深さは約30cmを測る。

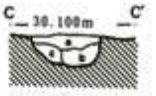
位置は不詳ながらも、甕(1)と坏(2・3)の破片が出土している。



第287図　第89号住居跡



第90号住居跡土層説明
1．10YR2/1　黒色土（灰）＋10YR5/1　褐灰色土の互層。
2．10YR3/4　暗褐色土　主にLブロックからなる。B・C粒微。
3．地山Lブロック。
4．10YR2/3　黒褐色土　Cの薄い層。
5．10YR3/3　暗褐色土　L・Gブロックからなる。



第90号住居跡カマド土層説明
a．10YR3/3　暗褐色土　Lブロック少。B粒多。
b．10YR3/3　暗褐色土　基本はa。B粒多。灰少。
c．10YR2/3　黒褐色土　B・C粒微。灰層。
d．10YR3/3　暗褐色土　Bブロック多。

0　2m

第288図　第90号住居跡

第90号住居跡出土遺物(第289・290図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	甕?	(20.3)×(29.0)× —	40%	W+W′+R微+B′多	にぶい褐	外面剥落(ヘラ後ナデ?)
2	小型壺	(16.0)×(12.9)× —	口縁～胴部破片	粗(W+B′)多+W′	にぶい黄橙	
3	甕	(21.4)×(8.9)× —	〃	W多+W′+R少+B′	灰黄褐	外面—ヨコヘラ削り,磨耗著しい
4	〃	21.1～23.1×(5.3)× —	口縁片	(W+B′)多+W′+R少	にぶい橙	全体に歪む
5	鉢	(23.0)×(12.6)× —	40%	W+W′+R+B′	橙	
6	〃	(20.2)× 11.9 × —	40%	細(W+W′+R+B′)	〃	
7	〃	(21.0)×(8.3)× —	20%	W+W′+B′	にぶい橙	
8	〃	(22.4)× 9.4 × —	60%	W+B+B′多	にぶい黄橙	
9	〃(甕)	— × 9.5 × 8.4	胴下半部～底部	W+W′+B′多	にぶい赤褐	磨耗著しい 外面—ヘラ削り→ヘラナデ?
10	坏	9.4 × 4.8 × —	90%	W+R+B′	にぶい橙	口縁やや歪む
11	〃	(17.2)×(4.8)× —	口縁片	W′多+B+B′	橙	暗文
12	〃	(12.4)×(3.9)× —	30%	W微+B+B′	明赤褐	外面体部ヘラ削りだが剥落で不明瞭
13	〃	13.8 × 3.9 × —	90%	W+W′多+B+B′	橙	暗文、外面—ヘラ削り→ミガキ
14	〃	12.0 × 4.0 × —	ほぼ完形	W微+W′+B′多	にぶい黄橙	
15	〃	(15.4)× 5.6 × —	60%	W微+R少+B′多	にぶい橙	
16	〃	(14.8)×(4.3)× —	20%	W′少+B+B′多	橙	破砕後破片によっては焼ける
17	〃	(12.2)×(4.6)× —	30%	W+R+B′	にぶい橙	
18	〃	(12.6)×(3.7)× —	20%	W+W′多+B	にぶい黄橙	内面に煤け
19	〃	(13.0)×(3.3)× —	20%	W+R+B′多	にぶい橙	
20	〃	(12.0)× 3.9 × —	40%	W+R多+B′	〃	内面—炭化物付着 外面—煤け
21	〃	(11.6)×(3.8)× —	30%	W少+B′多	灰黄褐	
22	〃	(12.0)×(3.3)× —	30%	B+B′	にぶい褐	内面—炭化物付着 外面—煤け
23	〃	(11.7)×(3.6)× —	20%	W′+B′	橙	
24	〃	(11.6)×(3.5)× —	30%	W+W′+R多+B′	にぶい橙	
25	〃	(13.6)× 4.6 × —	60%	W′微+R+B′	橙	
26	〃	11.8 ×(3.6)× —	60%	粗(W+B)+W′+粗B′多	にぶい橙	
27	〃	(13.5)×(3.9)× —	40%	W微+W′+R+B′	橙	
28	〃	11.6 × 3.2 × —	60%	W+B+B′	にぶい橙	

第90号住居跡(第288図)

そ—9—3グリッドを中心に位置し、南部は第91・92号住居跡と重複している。3軒の関係は92号(古)→90号→91号(新)である。全体はやや四辺の張る隅丸方形となり、軸長6.3m×5.9m、面積約37.2m²を測る。主軸方向はおよそN—78°—Eを指す。

覆土のうち、1層は黒色と白色の薄い灰層が重なり合っている。灰には焼土や炭化物はあまり含まれておらず、ここで直接火が焚かれたというよりも、埋没途中で投入された可能性が高い。遺物の大半はこの灰層から出土しており、二次的な火熱を受けたものが多い。

床は例によって噴砂が吹き抜けており、これを境に著しい段差を生じている。床面は比較的硬質で、把握は容易であった。壁溝は幅約25cm、深さ約5cmでほぼ全周する。

カマドは西壁の中央部に設けられている。袖らしきものは検出されなかったが、壁溝の切れてい